

読書の価値観とその形成過程：
カフェ空間で「読書」をする人びと
を対象として

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2016年3月

豊島 嶺奈

目次

| | | |
|---------|-----------------------|----|
| 第1章 | はじめに..... | 4 |
| 1.1 | 研究背景..... | 4 |
| 1.1.1 | 読書離れ..... | 4 |
| 1.1.2 | 「外」での読書を推奨する場、モノ..... | 4 |
| 1.1.3 | 卒業研究..... | 5 |
| 1.1.4 | 読書の定義について..... | 5 |
| 1.2 | 先行研究..... | 6 |
| 1.3 | 研究目的..... | 10 |
| 1.4 | 用語説明・定義..... | 10 |
| 第2章 | 調査概要..... | 11 |
| 2.1 | 調査方法..... | 11 |
| 2.2 | 調査内容..... | 11 |
| 2.3 | 調査対象者..... | 11 |
| 第3章 | 調査実施概要..... | 12 |
| 3.1 | 調査対象者概要..... | 12 |
| 3.2 | 質問項目..... | 12 |
| 第4章 | 研究結果および結果の分析と考察..... | 14 |
| 4.1 | 調査対象者各々の回答..... | 14 |
| 4.1.1 | Aさん..... | 14 |
| 4.1.1.1 | インタビュー内容の分析..... | 14 |
| 4.1.1.2 | KJ法の結果..... | 22 |
| 4.1.1.3 | Aさんのまとめ..... | 31 |
| 4.1.2 | Bさん..... | 31 |
| 4.1.2.1 | インタビュー内容の分析..... | 31 |
| 4.1.2.2 | KJ法の結果..... | 39 |
| 4.1.2.3 | Bさんのまとめ..... | 42 |
| 4.1.3 | Cさん..... | 42 |
| 4.1.3.1 | インタビュー内容の分析..... | 42 |
| 4.1.3.2 | KJ法の結果..... | 52 |
| 4.1.3.3 | Cさんのまとめ..... | 55 |
| 4.1.4 | Dさん..... | 56 |
| 4.1.4.1 | インタビュー内容の分析..... | 56 |
| 4.1.4.2 | KJ法の結果..... | 61 |
| 4.1.4.3 | Dさんのまとめ..... | 63 |
| 4.1.5 | Eさん..... | 64 |

| | | |
|---------|--------------------|----|
| 4.1.5.1 | インタビュー内容の分析 | 64 |
| 4.1.5.2 | KJ法の結果 | 70 |
| 4.1.5.3 | Eさんのまとめ | 73 |
| 4.2 | 全員の比較 | 73 |
| 4.2.1 | 価値観とその形成過程 | 74 |
| 4.2.2 | 両親の影響と読書への考え | 76 |
| 4.3 | 先行研究への批判 | 78 |
| 第5章 | 結論 | 80 |
| 5.1 | 結論 | 80 |
| 5.2 | 今後の課題 | 81 |
| | 参考文献一覧 | 83 |
| | 謝辞 | 83 |
| 付録 | | 1 |
| Aさん | | 1 |
| Bさん | | 2 |
| Cさん | | 3 |
| Dさん | | 4 |
| Eさん | | 5 |

第1章 はじめに

1.1 研究背景

1.1.1 読書離れ

近年、若者の読書離れが叫ばれている。2015年の全国大学生生活協同組合連合会の調査¹では、まったく本を読まない学生が初めて4割を超える結果となった。日経新聞やテレビ番組でも“読書ゼロ”が取り上げられるなど、若者が本を読まないという認識は一般的なものになりつつある。

文化庁の「国語に関する世論調査」²では、平成14年度には月に1~10冊読む16歳以上の男女が58%おり、読まない人々は全体の37%だったのに対し、平成25年度には月に1~2冊読む男女は34%、読まない人々は47%という結果になっている。そもそも1か月の読書量に関して、平成14年度の項目は1~10冊であるのに対し、平成25年度の調査では1~2冊になっているなど、読書量の減少が顕著に表れている。また、この対象年齢からしても読書離れは若者だけに限った話ではないと言える。

1.1.2 「外」³での読書を推奨する場、モノ

読書離れが叫ばれる一方で、読書を推奨する商業・公共施設は増えつつある。その代表として書店内にコーヒーチェーン店を設置する複合型書店⁴、店内の本を読みながらコーヒーや飲食を楽しめるブックカフェ⁵、指定管理者制度を取り入れ、図書館内にカフェを設置する図書館⁶などがあげられる。また、外で読書を推奨するものとして、電子書籍があげら

¹全国大学生生活協同組合連合会. “第50回学生生活実態調査の概要報告”. 第50回学生生活実態調査の概要報告 | 全国大学生生活協同組合連合会 (全国大学生協連). 2015-2-27.

<http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>, (参照 2015-6-24).

²文化庁. “平成14年度「国語に関する世論調査」の結果について”. 平成14年度「国語に関する世論調査」の結果について | 文化庁. 2003-6.

http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/h14/, (参照 2015-6-24).

³ここでの「外」とは、家を「中」とし家以外の場を指す。

⁴starbucks japan. “コンセプトストア”. コンセプトストア スターバックスコーヒー ジャパン. <http://www.starbucks.co.jp/store/concept/>, (参照 2014-10-8).

⁵タイムアウト東京. “東京、ブックカフェ20選”. 東京、ブックカフェ20選-Time Out Tokyo. 2013-09-02. <http://www.timeout.jp/ja/tokyo/feature/7828>, (参照 2014-10-8).

⁶武雄市図書館. “武雄市図書館”. 武雄市図書館. 2014 - 10 - 13. <https://www.epochal.city.takeo.lg.jp/winj/opac/top.do>, (参照 2014-10-10).

武蔵野生涯学習振興事業団. “002.武蔵野プレイス”. 002.武蔵野プレイス. 2014 - 9 - 9. <http://www.musashino.or.jp/place.html>, (参照 2014-10-10).

れる。毎日新聞の読書世論調査⁷では 2013 年から 2014 年にかけて電子書籍を読んだことがある人が 14%から 17%に増えるなど少しずつではあるが利用が増えてきている。電子書籍を利用すれば何冊も本を持ち歩くことなく、外で読書することが可能であり、「外」での読書を推奨するツールであるといえる。以上のように読書離れが叫ばれる一方で、「外」で読書を推奨する施設の増加や「外」で読書しやすい端末の登場など、人々が読書しやすい環境は以前よりも整ってきていると言えよう。

1.1.3 卒業研究

自身の卒業研究「図書館と同機能を持つ場の選択と代替性：読書機能に焦点をあてて」では、読書する場として図書館に焦点をあて、読書の場についてインタビュー調査を行った。当時のインタビューでは、読書する場として図書館、自宅、書店（複合型書店）、飲食店（カフェ・ファミレスなど）、電車、教室などがあげられ、それぞれの読書の場の選択理由をウェーバーの行為の 4 類型⁸にあてはめ、分析を行った。その中でも書店・飲食店で読書する人びとに一定の傾向が見られた。ここでは主に複合型書店やカフェが読書の場としてあげられていたが、彼らは読書そのものを目的とするのではなく、カフェが提供する「空間・雰囲気」を楽しみにして対象の場所に行き、読書をしていた。このように場所の雰囲気重視で読書の場を選択することを感情的行為⁹として分類した。

以上より、読書を推奨する「外」の場を「オシャレな場であるから」という理由で利用している人たちが一定数いることが卒業研究より明らかとなった。

1.1.4 読書の定義について

読書とは広辞苑では、「書物を読むこと」¹⁰と定義されている。しかし、現代はインターネットの発達などによりウェブ上でも様々な情報を得ることができる。また、タブレット端末の登場や電子書籍の普及などに情報媒体が多様化している。インターネットの発達や情報媒体の多様化はどこからが読書か、という人々の認識を曖昧にさせている。さらに上記で述べたような「外」での読書を推奨する場が増加している。このような場所の増加は、

⁷毎日新聞社. 読書世論調査 2013. 毎日新聞社, 2013, 100p. 毎日新聞社. 読書世論調査 2014. 毎日新聞社, 2014, 100p.

⁸ マックス・ウェーバー. 社会学の根本概念. 岩波文庫, 1972, 108p. (参照 39 ページ).

⁹ ウェーバーは社会的行為を大別して、①「目的合理的行為」(結果として求められる自己の目的のために「条件」「手段」として行為をすること)②「価値合理的行為」(行動そのものに絶対的な価値があり行為をすること)、③「感情的行為」(自己の感情に対し、正直に情緒的に行為をすること)、④「伝統的行為」(なじんだ慣習によってする行為)という四類型を提案した。卒業研究では、④「伝統的行為」を「習慣的行為」と呼びかえ分析を行った。

¹⁰ 新村出編. 広辞苑: 机上版た一ん. 第六版, 岩波書店, 2008, 3049p. (参照 2004 ページ).

読書が目的なのか、場所が目的なのかを曖昧にさせるなど、読書の定義そのものを揺るがしているものと言えよう。

このように、読書概念や捉え方が揺らいでいる現在において、従来の読書という概念に捉われず、ケーススタディとして各々の読書の価値観とその形成過程を明らかにすることは、読書研究の新たな指標となりうる。

1.2 先行研究

人びとがどのような行為を「読書」ととらえて読書行為を行っているのかについて書かれた研究としては國本ら（2009）のものがあげられる。國本らの「読書行為の次元：成人を対象としたフォーカス・グループ・インタビュー」¹¹では、「読書とはいかなる行為であるのか」を明らかにすることを目的とし、日常的に読書をする男女29名にフォーカス・グループ・インタビューを行った。調査では参加者自身の日常的な読書について「普段どのようなものをどのように読書しているか教えてください。」と発言を促し、互いの発言に対する意見を求めた。参加者同士の議論が活発化した段階で、自分にとって読書とはどのようなものだと思うか、という読書の捉え方について話し合いを求めた。

インタビューを書き起こし、①読書に関する発言を抽出する②読書か否かを決定している要素を見出して要素名を付与する③要素同士を集約して階層関係を見出すという三段階の作業を行った。この作業の結果、読書という行為は①読書の「対象」（何を読むのか）、②読書への「志向」（なんのために読むのか）、③読書時の「行動」（どのように読むのか）、④読書の「作用」（読んだ結果から何を得るのか）、⑤読書する「場所」（どこで読むのか）の五つ次元から成る行為であることが指摘されている。

この中でも「対象」に関する言及は116件と最も多く、「対象」は読書を構成する次元として最も注目されていることが述べられている。また、「対象」は①どのような「物理的媒体」を読むのか、②どのような「ジャンル」を読むのか、③「内容」のどの点を評価して分けるのかといった3つのサブ次元（サブ次元1）にわけることができる。さらに、このサブ次元の下位にさらなるサブ次元（サブ次元2）を有していた。

サブ次元1「物理的媒体」の下位の次元にはサブ次元2として「紙」「電子」があり、「紙」の要素として書籍・雑誌・新聞・手紙があげられ、「電子」の要素としてはインターネット・PDF・電子ブック・ipod・携帯電話・ニンテンドーDSがあげられた。サブ次元1「ジャンル」の下位の次元には、サブ次元2として「文字主体」「絵主体」があげられており、「文字主体」の要素としては、小説・論文・ビジネス書・実用書・エッセイ・日記、闘病記・書評・教科書・ノンフィクション・ノベライズ・対談があげられていた。「絵主体」の要素としては、マンガ・絵本・図鑑・絵画・ファッション雑誌があげられた。サブ次元1「内容」の下位の次元は「ストーリー」「主題／主張」「持続性」である。「ストーリー」の要素とし

¹¹ 國本 千裕ほか. 読書行為の次元：成人を対象としたフォーカス・グループ・インタビュー. 日本図書館情報学会誌. 2009, 55(4), p.199-212.

では、重厚感・一貫性・作り込み／完成度・疑似体験・ドラマチックがあげられる。「主題／主張」では、主題／主張が明確・単なる情報が要素になっており、「持続性」では時間経過後の価値が要素としてあげられていた。

五つの次元の一つである「志向」については、サブ次元として「背景」「目的」があげられる。「背景」は要素として、義務（勉強・仕事）・興味・羨望・切迫を含んでおり、「目的」の要素として、何かを期待して・知識、教養・好奇心・暇つぶし・情報収集があげられていた。この「背景」としてあげられている要素は、読書の中でなにを大切にしているかという、「価値観」が含まれると考えられる。よって、本研究における価値観とは、この「志向」の「背景」を結びつくものであるとする。

大きな次元の「行動」のサブ次元は「身体的」「心的」であり、「身体的」は書き込み・手で開くという二つの要素で構成されている。また、「心的」も時間をつくる・頭を使うという二つの要素であった。

大きな次元である「作用」「場所」には、サブ次元はなく、どちらも要素のみで構成されていた。「作用」の要素としては、楽しみ、娯楽・時間、世界の共有・価値観の吸収・感動・心に響く・なにも感じない・引き込まれる・考えさせられる、があげられる。「場所」は、家・喫茶店・電車・状況は問わない・ベッド・心地いい環境という要素で構成されていた（図1参照）。

五つの大きな次元は、図1のようなサブ次元という階層構造を有しており、特に読書の「対象」は、三階層にわたる複雑な構造を有している。それに比べ「作用」「場所」は一階層の単純な構造であった。これらの構造を明らかにし、國本は

五つの次元は互いに独立し、次元間に階層関係はない。¹²次元同士が相互に関係している可能性や、それぞれが互いに影響を及ぼしあっている可能性も考えられるが、ここでの分析結果からは関係づけに至っていない。

と述べている。しかし何を得るのかという「作用」に関しては、「価値観を吸収したいから読む」など、「志向」のサブ次元である「目的」と重なる部分があるだろう。このことから、「作用」と「志向」の区別などは人によって曖昧なところがあり、次元間に階層関係がないとは言い難い。また、例えば「義務（志向・背景）で本を読まなければならない、頭を使う（行動・心的）ため、喫茶店（場所）で読む」など、人の読書行為は一つの次元では語ることができず、それぞれの次元の関連を見ていくことは不可欠だろう。

また、國本は、

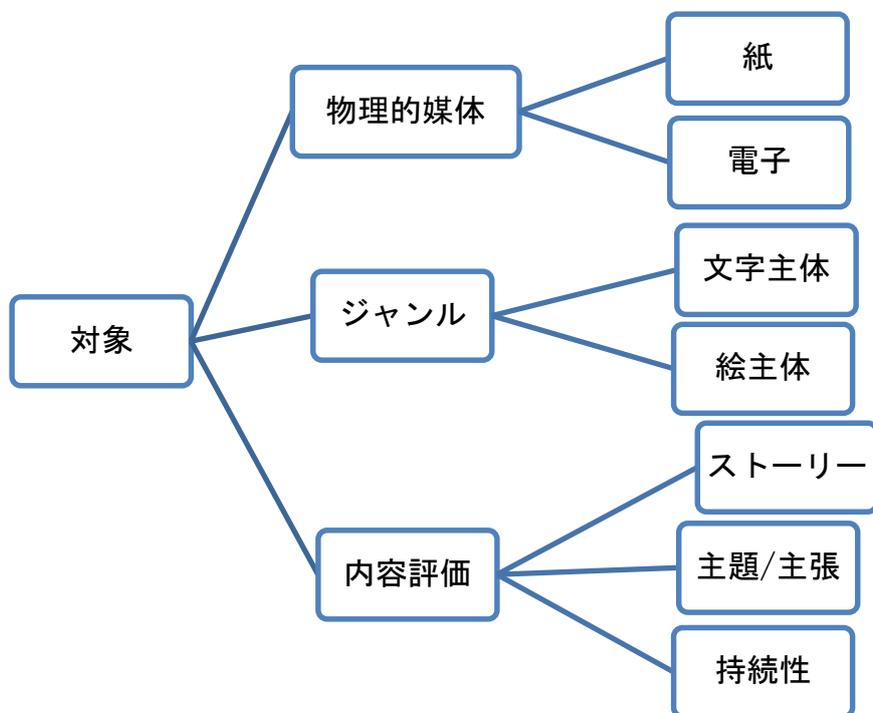
このように、既存研究であまり扱われてこなかった「対象」以外の側面に着目し、「志向」「行動」「作用」「場所」といった、「対象」以外の四つの次元を明らかに

¹² 図2参照

した。個々人は「読書」という行為を、「何を読むのか」だけでなく、なぜ、何のために、どのように読むのか、読んだ結果、何を得るのか、そしてどこで読むのか、までを幅広く含む行為として捉えている。少なくとも、「本を読むこと」が「読書」であるという捉え方はしていない場合が多いことが確認された。

と読書という行為の幅広さを唱えおり、「読書」という行為が「本を読むこと」という従来の定義だけでは語れないことを示唆している。このことから、読書の定義を明確にした調査ではなく、どのような人がどのような読書をするのか、という広い視点で読書を見ていくことが読書という行為を定義づけるの一つの指標となると考えた。

また、五つの次元を持つようになるには、読書はどういうものか、という個々人の定義や、読書においてどのようなことを大切にしているかという「価値観」が関わる可能性がある。この「価値観」とは、読書の中で何を大切にしているか、という考え方にあたり、先行研究の次元では「志向」のサブ次元である「背景」に大きく関わってくる。先行研究では、現在の自分の読書行為そのものに関する回答が多く、なぜそのような読書の考え方をするようになったのかという各々の「価値観」や考え方、またそれらができる過程について触れられていなかった。



要素

紙：書籍、雑誌、新聞、手紙

電子：インターネット、PDF、電子ブック、iPod、携帯電話、ニンテンドーDS

文字主体：小説、論文、ビジネス書、実用書、エッセイ、日記・闘病記、書評、教科書、ノンフィクション、ノベライズ、対談

絵主体：マンガ、絵本、図鑑、絵画、ファッション雑誌

ストーリー：重厚感、一貫性、作り込み／完成度、疑似体験・ドラマチック

主題／主張：主題／主張が明確
単なる情報

持続性：時間経過後の価値

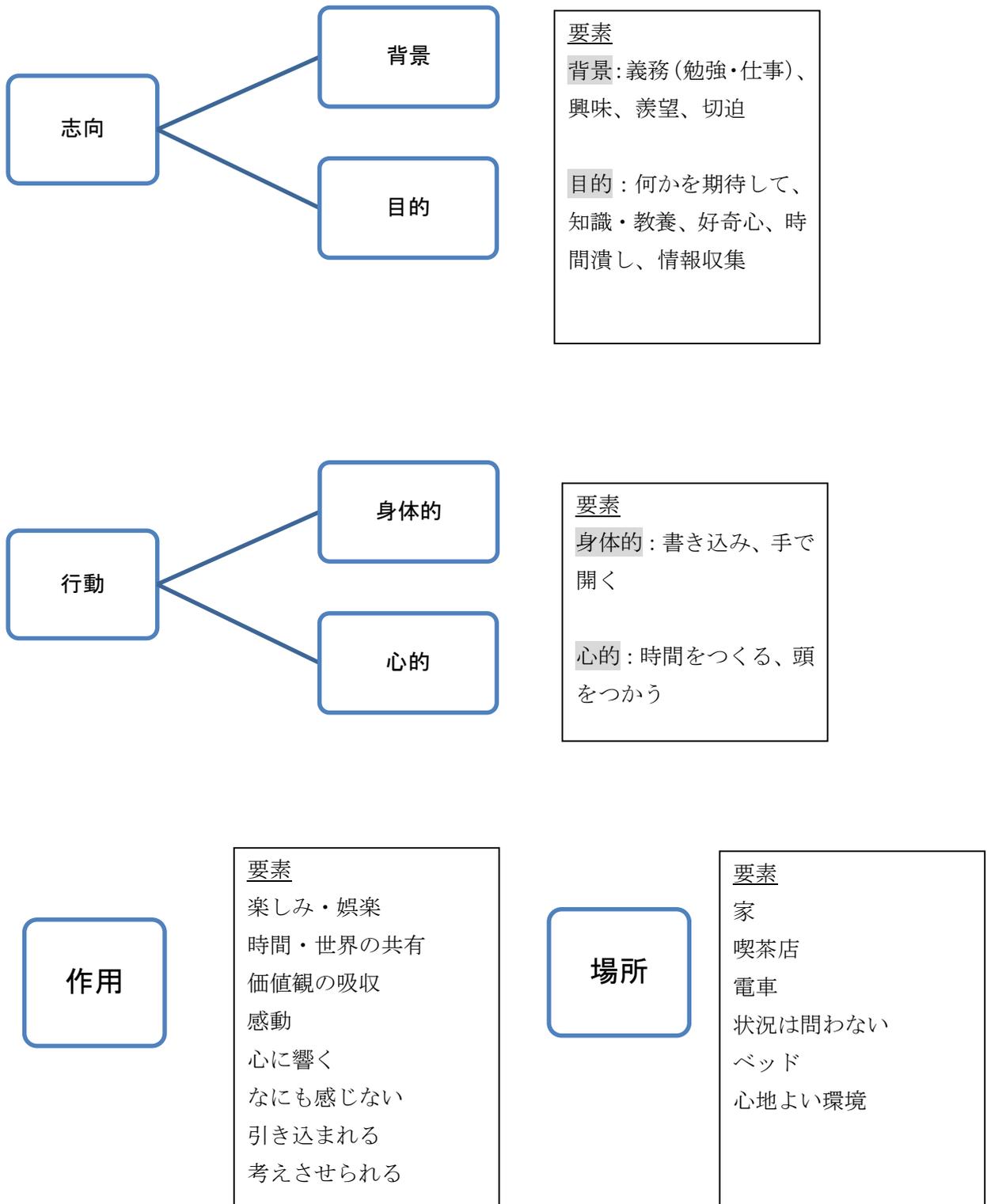


図1 先行研究でふれられている、読書を構成する次元とその要素

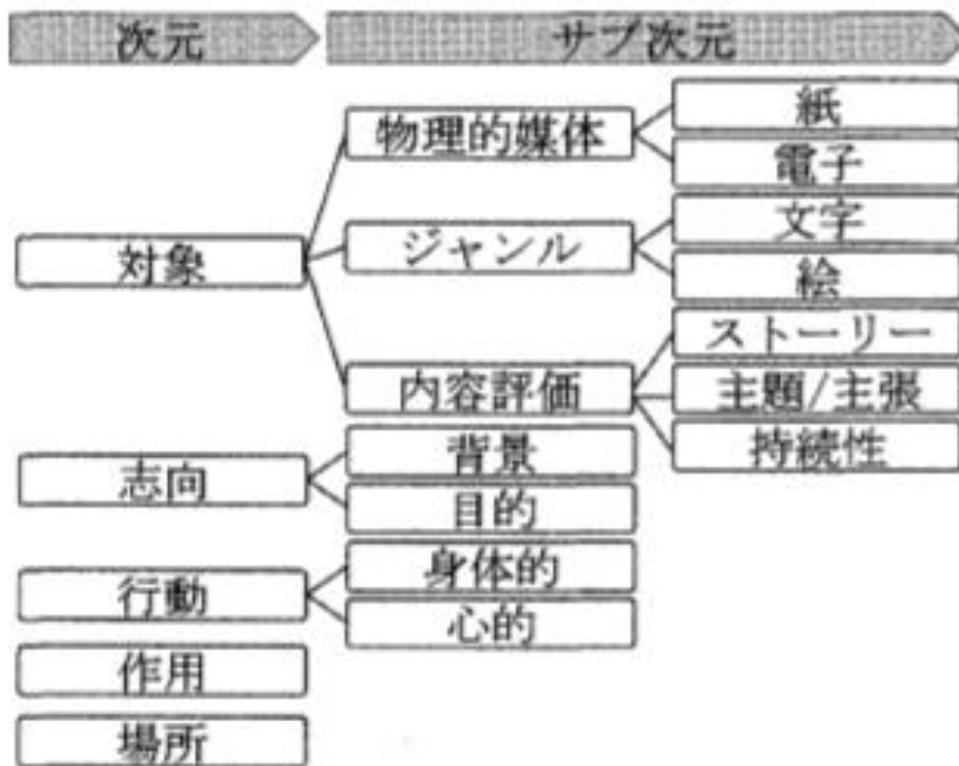


図2 読書を構成する次元（國本（2009）のものを引用）¹³

1.3 研究目的

そこで、本研究では読書の優先度が高い人たちに焦点をあて、各々の読書の価値観とその要因、形成過程を明らかにする。そこから、各々のライフストーリーの中で、読書がどのように語られているかを明らかにする。このように、価値だけでなく形成過程に着目することによって、読書に対するさまざまな意味づけの関連性を見出すことができると考えた。

1.4 用語説明・定義

本研究において価値観とは各々が読書の中でなにを大切にしているか、を指す。本稿における読書の定義は一定のものを定めず、調査対象者の個人的な読書の考え方を採用するものとする。しかし、会話などのその他の行為が含まれることを防ぐため、「テキスト・イラストデータをもとにしたコンテンツそのものを楽しむことができるもの（会話やチャット、掲示板はこれに含まない。）」を最低限の定義とした。

¹³國本 千裕ほか. 読書行為の次元：成人を対象としたフォーカス・グループ・インタビュー. 日本図書館情報学会誌. 2009, 55(4), p.199-212. (210 ページ参照)

第2章 調査概要

2.1 調査方法

調査は個人に話を深く掘り下げて聞くことのできるインタビュー調査を採用した。本研究では、個人が読書に対してどのような価値観をもち、その価値観を形成するにいたった過程を明らかにすることを目的とする。この価値観とその形成過程には、各々が受けてきた教育、成長する際に培われてきた経験、考え方等のライフストーリーが反映されると考えた。そこでそれらを探るには、一人一人に何度かにわけ、深く話を聞いていく必要があると考えたためである。

インタビュー調査は、おおまかな質問項目を設定し、回答者の答えによって臨機応変に質問内容を変化させていく半構造化インタビューを採用した。これは、個々人によって変化する意見を聞くことを目的とするため、凝り固まった質問項目では意見を引き出せないと判断したためである。

2.2 調査内容

本調査では、調査対象者に対し①読書そのものの定義や価値観、各々の思想②それらの考え方が定着する原因、定着してから現在までの読書活動などの経験③読書の場合やどのようなジャンルを読んでいるか等読書そのものに関するもの④その他について、話題を限定せずにインタビューした。

2.3 調査対象者

本研究では、読書の優先度が高い人たちとして、カフェで読書する人々を選定した。これは、わざわざお金を使い読書時間を確保しているということが優先度の高さの指標となると考えたためである。実際にカフェで読書をしていた人に声をかけ一人目の対象者を選定し、そこからスノーボールサンプリング¹⁴でサンプリングをした。調査対象者に対し、1回1時間から1時間半のインタビューを1人に対し2回から3回行った。

調査は、筑波大学図書館情報メディア系研究倫理審査委員会に本研究の内容を申請し、承諾を得た後に進めた。その際に、調査対象者に配布する本研究の協力依頼について書かれた依頼書、同意書に関しても同時に申請し、承諾後、調査対象者に配布している。

調査依頼は、調査対象者の紹介により、依頼メールを送信し、協力が得られた人びとに調査を行う形をとった。この際、メールに研究目的・調査概要について記載し、調査を行う直前には、詳細な内容を記載した依頼書を読んでもらい、本人の了承を得た後、インタビュー調査を実施した。またインタビューに入る際には、ICレコーダーでインタビュー内容を記録することを伝え、承諾を得た後にセッティングをし、インタビューを記録した。

¹⁴ スノーボールサンプリングとは、最初の面接の対象者・対象集団に、友人・知人を紹介を依頼し、紹介された人に対しインタビューを行い、紹介を繰り返して次の調査対象者を採用していくサンプリング方法のことである。

第3章 調査実施概要

3.1 調査対象者概要

以下の表は、調査対象者の性別、年齢、職業、インタビュー日時を示したものである。以降、調査対象者はこの記号で表すものとする。

表1 調査対象者概要

| 対象者 | 性別 | 年齢 | 職業 | 日時 1回目・2回目 (3回目) |
|-----|----|-------|-------------|--------------------------------|
| A | 女 | 30代前半 | 主婦兼フリーランス | 2015/3/4・2015/9/14・2015/11/24 |
| B | 女 | 30代前半 | IT会社勤務 (SE) | 2015/3/29・2015/9/27・2015/11/29 |
| C | 男 | 30代前半 | IT会社勤務 (SE) | 2015/4/26・2015/10/11・2015/12/5 |
| D | 女 | 40代前半 | IT会社 (事務) | 2015/5/28・2015/10/21 |
| E | 男 | 50代前半 | IT会社 (SE) | 2015/6/16・2015/10/22 |

3.2 質問項目

調査対象者に半構造化インタビューをするにあたり、以下の通り、大まかな質問項目を設定した。

A) 読書そのものの定義・価値観、それらに関する思想について

こちらで定義を定めず、「あなたの読書の定義はどのようなものですが。」という質問から始め、漫画・雑誌を読書に含むか、通読を読書とするかパラパラ読みを読書とするかなど、細かい読書の基準を準備しておき、それを比較することで各々の定義をつくるよう試みた。また、自分が読書行為にどのような価値をもっているか、持っている場合はなぜそう思うのかを尋ねた。さらに「『読書=よいこと』という社会の通念についてどう思うか。」¹⁵など、世間的な話を聞くことで、読書に関する自分の情熱、想い、考え方について語ってもらった。

B) 読書の定義・価値観が定着する原因、定着してから現在までの経験について

(1)で述べられた価値観を持つようになったきっかけや変化について尋ねる。成人までの自分の経験をライフストーリーA、成人から現在に至る経験をライフストーリーBとし、それぞれの時期にどのような経験をしたか、他人に影響を受けたか、それにより自分の読書

¹⁵ ドイツの哲学者であるショーペンハウエル (1983) は、自身の著「読書について」の中で「読書は、他人にモノを考えてもらうことである。」と述べ、読書ばかりをすることがしだいに自分でモノを考える力を失っていくことを述べた。背景で述べた読書離れは、「読書=いいこと」という通念が前提となっており、ショーペンハウエルのようなその理論を覆す考え方を提示することで、世間に流されない各々の意見を聞くことを目的とした。

行動がどう変化したかを中心に尋ねた。

C) 読書行為全般について

読書頻度や読むジャンル、購入頻度、読書の場所など読書行為に関することを全般的に尋ねる。読書の場所については、カフェ・電車を中心とし、なぜ外の場所を利用するのか、利用時間や周囲の環境をどれだけ気にするかを尋ねた。

D) その他

本研究は、対象者 A、B、C に対しては 3 回ずつ、D、E に関しては 2 回ずつインタビューを行った。このように何度かにわたりインタビューを行うのは、より深くそれぞれの読書について聞いていくためである。しかし、インタビューを受けたことにより、調査対象者の読書行動に変化がみられる場合があると考え、読書に関して何か変化があったか否か、もしある場合はどのように変化したかも尋ねた。また、読書と直接関係がなくとも、本人の性格や考え方などもここに含めた。

インタビューの際には、上記の質問項目を基準とし、個々人の読書の価値観と形成過程について掘り下げていった。

第4章 研究結果および結果の分析と考察

4.1 調査対象者各々の回答

ここでは、インタビュー対象者の回答から各々にどのような読書の傾向がみられるか、またどのような価値観を持つか、さらにその価値観を持つようになった形成過程を探る。

インタビュー内容の分析では、3.1.2の質問項目に準じ調査対象者の発言から興味深いものを選定し、各々が何を考えて読書行為を行っているのかを記述し、分析した。

KJ法¹⁶では、インタビューのトランスクリプトからコーディングを行った。キーワードを抽出し、それらを羅列、中分類、大分類と分類し、大分類の関係性を見ることで、対象者の語りの中から一貫した関連性が見られないかを分析し、文章にまとめた。実際には紙と付箋を使った作業であるため、Aさんのみ羅列形式で記入し、B～Eさんに関しては作業工程を写真にて掲載する。

まとめは、インタビュー内容の分析とKJ法の結果を総括したものである。

4.1.1 Aさん

4.1.1.1 インタビュー内容の分析

Aさんは30代前半の女性で、現在は主婦業をメインにしなが、フリーランスでインフォメーションアーキテクトとして仕事をしている。首都圏出身の都内在住。四年制大を出ており、建築関連の勉強をしていた。

A) 読書の価値観

Aさんは、読書の定義として「知りたいことを知る」というものをあげている。

なんか知りたいものが載っているのが雑誌だったりマンガであれば全然、形態にはこだわらない感じで、ブログも見るし、ホームページ上の情報も見たり、フェイスブックで情報収集したりとかもするんで。

あー、なんか知りたいことを知ることが自分にとっての娯楽なので、なんか、あんまりその垣根はないかもしれないです。

と述べているように、知ることそのものが娯楽につながっている。内容・形態がどのようなもの（教養に関するものや、小説のようなもの）であっても自ら調べて情報を得ているかぎり、それがAさんの「読書」となる。

¹⁶ 文化人類学者の川喜田二郎が考案した手法。発想法ともいう。本調査では、インタビューのキーワードをカードに記述し、カードをグループごとにまとめ図解した。

ここでのAさんの読書の価値観は「知識の取得」「娯楽の享受」と言える。自分が知りたい欲求を満たすために読書から知識を得る、というようなプロセスをたどっている。

また、勉強は読書であるか、という質問に対しては、

なんかでもたぶん大学のときの勉強はまえに言った¹⁷読書の定義と同じかもしれないです。見てるものは図面だけど、ようはそのそういう空間を作るにはどういう設計をしてるのかな、とかどういうインテリアを使っているのかを知りたくて読んでたので。

と答えており、自分から知りたくて読む本は勉強関連のものであっても読書になりうると述べている。大学時代には、建築士を目指し図面や写真集を見るが多かったが、これも彼女にとっては「夢を叶える読書」であり、

一夢を叶えるために、勉強のために本を読むことはたのしかったですか。

楽しかったです。知ることは快感なので。なんか自分が知りたいことを知れる読書をするときはすごい楽しいです。

というように、彼女の読書の定義におさまっている。大学時代、社会人になった今と読んでいるものに違いはあれど、どちらも自分の「知りたいことを知る」ための読書であり、幅広い読書の定義をしていると言えよう。

また、「読書=いいこと」という世間の通念については、

ああ、なんかほっとけばって。やりたい人が読めばいいだけだからあんまりあれこれ口を出すのは余計かなって思うんですけど。やりたい人はやるし、読まなくても走りまわりたい子は走り回るし。読みたくないのに読んでても頭にはいらないういしなって。別に引きこもりが好きで読んでたいならずと読んでればよいと思いますけどね。その生き方が本人の生き方なら。

と述べている。このことから、彼女にとって読書とは、あくまで知りたいことを知るためのツールの一つであり、読書行為に自分なりの価値を持っていても、その価値を絶対とし、「やったほうがよい」という考え方を持っているわけではない。あくまでも、行為の一つとして、やりたい人が自由にやればよいというスタンスをとっている。

¹⁷ ここでの「前に言った読書の定義」とは、1回目のインタビューでAさんが話した「読書は知りたいことを知るもの」を指す

B) 価値観の形成過程

ライフストーリーA

Aさんは、小学生のころシリーズものの少女小説を何度も読みひたすらその世界観を楽しんでいた。様々な娯楽がある小学生の生活において、読書が習慣化されたきっかけの一つとして、近所の友達付き合いがあげられた。

あーなんか、近所の仲良い友達グループと気が合わなかったんですよね（笑）仲良い子もいて、仲良い子は外で決まった遊び、好きな遊びがあってそれを2人で遊ぶとかはよくやってたけど、なんかあのそれ以外の近所で5人くらいで遊んでたんですけど、お向かいとかの歩いてすぐっていう幼稚園のころから一緒の子たちと、なんかどうも一緒にいるのが心地よくなくて、それよりは小説をよんで浸っているときのほうが快適だったっていう。

というように、人間関係から読書に逃避した様子がみられる。自分の家でゲームなどをすることもあったが、基本的には新しいシリーズがでるのを心待ちにし、そのつなぎでゲームをしていた。両親も読書をよくしていた記憶はあるが、読書を強制されたわけではなく、自分のお小遣いで本を買い読んでいた。建築士を目指し始めた中学生のころから、夢を叶えるための勉強は楽しいと思うようになり好んでやっていた。

Aさんと反対に、あまり勉強しなかった弟に関しては、両親は口出しをしていた。

ああ、まったく読まないと思います。マンガくらいは読むけど、活字を追ってなさそうな感じです。小さいときから嫌いだったんですよね、本が。なんか母親がどうしても読ませたくてハリーポッターを買い与えるけど、私がそれ読んでるみたいなの（笑）弟は全然読まずに姉が読むみたいなの。

このことから、両親には「読書＝いいこと」という考え方が根付いていたと思われる。

両親には、勉強のことに口出しされることはあったものの、基本的に自由にさせてもらっていたというAさん。しかし、宗教に入っていた両親に対して嫌気がさしている部分が見られた。

あんまり口を出さないほうかなとは思いますが、ん～、..なんかうち両親とも宗教に入ってる家だったので、なんか私はそれが嫌だったんですよ。宗教があるのは。だからずっとそっち方面ではあれこれ言われ続けたんですけど、なんか、その、社会にでてどういう会社に入ってとかどういう業種でいてほしいっていうのは特になかった。

なんかわりと自由にやりたいことやらせてもらったのでそこはよかったし、宗教やってるってところで、望みもしないけどいいことをいいと言わなきゃいけない、そういうところはすごく嫌だったので、そういうことは自分もしたくないと思うし。なんかなにがいいか悪いかって本当に分からないと思ってるので自分で選んでやってくしかないんだよって、そういう上で楽しんでってねって思いますけどね。

と述べているように、「望みもしないけどいいことをいいと言わなければいけない」環境に対して不満を感じていた。他人の思想に頼らず、自分で「いいこと」「悪いこと」を考え、選択していくという宗教と反対の姿勢が、「知りたいことを知る」という彼女の娯楽に結び付いているのではないかと考えられる。

また、この自分で選択していくという彼女のスタンスは高校時代から身についており、周りにあわせて自分も同じ行動をする、ということに抵抗感を感じていた。

なんか周りの空気読まないとかバカにされるっていうのがめんどくさかったんですよ。いいじゃんみたいな。(笑)

というように、周囲に合わせることへ疑問を持っていたことも、自分がいいと思うことをやりたいという彼女の気持ちの表れであると言えよう。両親の宗教の影響は、彼女の読書の価値観、性格にも影響を及ぼしている可能性がある。

ライフストーリーB

大学では、建築家になるという夢のために一心不乱に勉学に励んでいたAさん。しかし、在学中にふと気づき、建築家を目指すことはやめたという。

なんか、本当に一心不乱に建築家になるって決めて勉強してたんですけど、あるとき私がやりたいのは建物建てることじゃなくて、なんか、暮らしをしたいんだってことにハッと気づいて。

なんかもやもやはずっとしてたんですよ。なんか好きだけどほんとにいいのかなってのはずっとひっかかってて、でようやく何か鍵があうっていうか、かちっとああ違うんだってことに気づいて。

というように、はた、と立ち止まる。自分の立ち位置を見る、という行為がこれまでの人生において何度か登場している。卒業後続けていた仕事も、働きすぎて自分の生活がおろそかになっていることにはたと気づき、それが退職するきっかけとなった。

でもなんか、自分で明確にだれだれにああいうこと言われたから考え方が変わったと言えるようなことはないんですけど、ベースに興味があって色々な情報を取得しに行っているの、間接的に色々な影響を受けてると思うんです。その様なところで受けた影響が最後自分の中で形になって、自分の行きたい方向に向かわせるみたいな感じなのかな。

ここでいう、「いろんな情報の取得」には、読書やセミナーが含まれており、彼女自身が読書は人生のターニングポイントに間接的に影響を与えていると自覚している。

また、3回目のインタビューでは、社会人になり読んだ自己啓発本が彼女と両親との付き合い方に影響を与えていることが明らかとなった。実際に自己啓発本を10冊ほど読み、それらに関連するセミナーに行き、ある程度その世界のビジネスの仕組みを理解し満足したために今は手を引いている。「それしかない、限界をつくっている感じがする」というように、自己啓発本で提示されるメソッドに頼り切りになってしまう現実があることを知った。依存してしまう人もいることから、宗教と似ている部分があると感じ、あまり没頭できなかったという。しかし、自己啓発に関連するものの現実を知ったことで、彼女の中で「やりたい人がやればいい」という考え方が身に着き、両親の宗教も同じように考えられるようになったと語った。このことから、自己啓発本を読むという読書行為が彼女の考え方そのものに影響を与えていることが分かる。

また、社会人になって参加した読書会は、彼女の読み方に影響を与えている。

レゾナンスリーディングって言って、で、それはなんか最初に目的を決めて本を読んでいくんですけど、最初に目的をこの本を読むことで何を知りたいかっていうのを決めて、で、これを決めたら、そのびっくりすると思うんですけど、とりあえずパラパラとこうやって読むんです。文字を読むんじゃなくて、こう見て、で何度か見たら、こういうなんかグラフを書いて行って、適当にページ数をふってみていくと、そのページに自分の知りたい情報が載っているっていうものなんですけど。そうなんか、魔法みたいなんですけど、不思議とできちゃって、それが面白くて。なんか遊び感覚で最近こればかりやって。でなんか、こうやって見てるだけで情報が入ってきているらしく。

読書会で知ったレゾナンスリーディングに夢中になり、「遊び感覚」で読書をする様子が見られる。この時期¹⁸は、彼女の読書の波がきていた時期、と本人も話しており、このレゾナンスリーディングは彼女の読書欲を向上させるものになったと言える。また、この経験はノートに書きながら読書をするという、新たな読書のスタイルを彼女に定着させるものと

¹⁸ 2015年3月あたり。1回目のインタビュー時を指す。2回目、3回目のインタビュー時にはレゾナンスリーディングはやっていなかった。

なった。

C) 読書そのものに関すること

A) 価値観でも述べたように、Aさんの読書のジャンルは多岐に渡る。書籍だけではなく、ブログやfacebookのシェアされた記事など、自分から情報を取得しにいき読むものは全て読書に含む。

わりとやりたいことがあって、それを実現するために知識を本で得たいという感じなので。なんか自然とハウツー系の本とか、あとは考え方とかエッセイ本みたいなものとか、そういうのが多くなってると思います。

と答えており、知識を得ることができるようなジャンル（実用書、ビジネス書など）を選択していた。

読書頻度に関しては、読むとき読まないときの差が激しい。

あ〜なんか、わりと自分の中に波があるんですけど、そのなかでも色々知りたいときとそうでもないときとあって、なんかいまそういう、あれこれ知りたい欲がないっていう感じですね。

というように、「知りたい欲」があるときに一気に読書をし、欲がないときはまったく読書をしなない。「知りたい欲」がわくときは心に余裕があることが多く、退職後、十分に自分の時間が取れる際には週に3~4冊以上読んでいた。

自分の知りたいことがはっきりしているため、図書館で借りたり、Amazonで購入することが多い。電子書籍に関しては、

なんか一時期やろうと思ったんですけど、kindleとかも持ってるんですけど、なんかあんまり好きじゃなくて。なんかちょっとまどろっこしいんですよね。ページと読めないのも、なんかそれがパラパラと見れないのがめんどくさいっていう感じですかね。あとやっぱり実物がほしいっていうのがあります。なんか、大体本って結構知りたい思いが強い本とかがあったりするので、なんかそういうものはすぐ見れるように手元に置いときたいっていう感じなんですね。

というように、思い入れが強い本に関しては手元に置くなどの利用の差別化がみられる。

読書をする場としては、カフェをあげている。カフェで読書をする理由としては、

あー、なんか家だと、わりといろんなことに気が散っちゃうんですよ。家事や洗

濯だったりとか。なので。やっぱり家のほうが集中しようってしないと集中できない感じかな。っていうか。カフェだとほどよい感覚でざわめき感というか、あって。なんか本読んだり考えたりする間にちょっと人間観察したりとか。

と話しており、カフェを「集中できる場」として利用していた。また、カフェの「ざわめき」を好み、「人間観察」ができるところに注目するなど、他人がいる空間に意味を見出しているところがあった。

カフェそのものの雰囲気を目的に読書をしにいつているか尋ねたところ、

両方な気がします。なんかわりと読んだ満足感が高いっていうか。あと読みながら自分の中で本とやりとりしているみたいな感じで頭の中を使っているんで、なんか、一人で本を読んでもんですけど、本と会話してるみたいな、なんかそれが家よりカフェのほうがしやすいのかもしれない。

と述べており、カフェの雰囲気が「読書との対話」をしやすくさせていると考えている。家に自分の部屋がないこともあり、全員が各々のことをしているカフェ空間は自分のことがやりやすい、とも語っており、他人がいるけれど干渉されないプライベートな場としてカフェを利用していることが考えられる。

建築家を目指していたこともあり、

んー、開放感と、あとほどよく仕切られてるところ。なんか、もともと建築やっただので、なんかそのレイアウトとか見るのが結構好きなんですよ。で、なんか、スタバってあのレイアウト的に結構、こう、なんか仕事したい人エリアとか、ゆっくりくつろいでお茶したい人エリアとか、エリア分けが結構ちゃんとしてるので、なんか、わりとしやすいことが多くてスタバにいつちゃうっていうのはある。

というように、建築家志向であっただけに店内のレイアウトそのものを見ることにも魅力をかんじている。3回目のインタビューをした時は、「知りたい欲」が引いている時期であったため読書はあまりしていないとのことだったが、カフェは引き続き利用していた。このことからカフェに行くことそのものを楽しんでいる様子も見られる。

また、2回目のインタビューでは、カフェを利用する一番の目的は「くつろぐこと」と述べており、「くつろげるか否か」を自分なりに判断し、カフェを選択していると話していた。このことより Aさんは場所に行くことそのものに目的があり、場所に行って読書という行為を選択していると考察できる。前の会社で働いていた際には、早めに家を出て毎朝スターバックスコーヒーでコーヒーを飲みながら読書をし出勤していた。このことに関しても「こういう時間をつくるだけで1日が豊かになる。」と述べていた。このように日常的にカ

フェを利用しており、特に朝の時間帯が特別な時間であることが分かった。

本は買うこと、借りることが半々で買う場合はほとんど新品で買う、とのことだったが、2回目のインタビューの際には買った本をほとんど捨ててしまったと述べた。

わたし今本が、一時期すごい持ってたんですけど、数か月前に一気に捨てようと思って、20冊くらいしか持ってないんですよ。なんか読まないなと思って、本当に置いときたいものだけにしようと思ってすごく減らしたんですけど、なんか、夫にも知られたくないことって色々あって、すごい内面的に考えてることとかをさらけ出したいようなさらけ出したくないようなところがあるので、そういうのを安心して全部だせるような空間がほしいです。

興味の幅が広く、宗教に関連するものなど、一見怪しいと思われるものも本棚にあるため、夫と共同のものではなく自分だけの空間を欲していた。カフェという場は、一見すると様々な人が使うソーシャルな場である。しかし、スターバックスコーヒーのような仕切りを意識させるつくりのカフェで読書をすることで、ソーシャルな場で自分だけの「読書空間」を作り出していることが考えられた。

D) その他

2回目のインタビュー、3回目のインタビューでは「知りたい欲」がひいているときであり、ほとんど読書をしていなかった。Aさんは「あれこれ考えることが好き」と述べており、今はその「考える期間」であると述べていた。普段読書をしていて気になったことや自分が考えていたことは日記に記すようにしていたが、後から読む返すことが難しく、2回目のインタビューの際にはリスト化されるブログに挑戦していた。しかし、自分の考えていることを人に見られる恥ずかしさなどから、自分には合わないと判断し3回目のインタビュー時にはブログをやめていた。

まあなんか様子みながらって感じですね。割と考えることが好きなんで、やり始めるとなんか頭ばかり使っちゃうのが嫌なんですよ。そこは自分では。自分の生活をちゃんとするほうに今は重きをおきたいのでそことのバランスでうまくやってくれるようであれば続けてくかもしれないし、自分の生活を邪魔するなと思うようになったら辞めるかもしれないし、みたいな。

考えることそのものが好きだが、「自分の生活をしっかりしたい」という生き方のベースがある。読書して知識を得ること、得た知識から自分なりに考えることというインプット、アウトプットに夢中になりすぎることを恐れているように感じられた。

4.1.1.2 KJ法の結果

4.1.1.2.1 キーワードの羅列

形態にこだわらない
facebook＝読書
自分から得に行く情報＝読書
読書はやりたいことの実現ツール
自分から選ぶ本 - 読書
読書＝知りたいことを知る
教養、娯楽の境目無し
知ること＝快感
勉強も読書
小説＝中身の体験
小説→世界を知る楽しみ
社会人になって実用書
友人→教えあう喜び
さっぱりとした友人関係
友人の薦め→信頼
知ったことのシェア
知りたいことが共通している友人
小さいころ お小遣いで本購入
家族→図書館あまり使わない
子どものほしいもの→本
家族との読書コミュニケーションなし
父の本興味なし
部屋に本があった
小さいころ ジャンル少女小説
小中 自室にこもって読書
小さいころ 好きなものを二度読み
弟 - 勉強しない、勉強嫌い
弟 - 親からの口出し
考える - 中学生から
建築家の夢 中3のリフォームがきっかけ
父親 新聞
父親 本好き
両親口出ししない
叔父が建築家
両親の宗教の口出し いや
父親→勉強への口出しあり
勉強がある程度できること→暗黙の了解
宗教の不自由⇔宗教以外の自由
自己啓発→親の宗教を許す
複合型書店、本持参
服にこだわりなし
カフェ読書好む
カフェ読書 大学から
カフェ＝スタバ
ネット環境重視
朝のスタバ利用
カフェ→人間観察
カフェ→週1回利用
仕事時 朝スタバ日課
お気に入りのカフェ有
お気に入りのカフェ 寄り道
レイアウト重視
建築学的視点
近所のスタバ
カフェ読書→周囲からの影響なし
複合型→場所目当て
読書、考え事→カフェがやりやすい
雰囲気、効率性、どちらも重視
カフェ→読んだ後の満足感
カフェで読書→本との対話
カフェ→他人との距離感がよい
リラックスできる雰囲気
読書の区切り→満足感
外での読書→意味がある行為
忙しい中で読書をする喜び
読書 贅沢な時間
カフェ→一人でこもれるところ
カフェ→くつろぐことがメイン

くつろげるところが偶然カフェ
休めるカフェを探す
ほどよいざわめき
家一気が散る
周囲の反応の観察
フォトリディング、レゾナンスリーディング
レゾナンスリーディング→遊び感覚
ノートにつける読み方
読書の記録 - 好きな言葉日記に
読書ノートの見返し たまに
表現、言い回しへの興味
日記の表現を考える
ブログ (公開しない)
ブログ→記録の効率性
考えのアウトプット
日記→4, 5年前
字が好き
読めることが嬉しい
小さいころ 小説 - アニメ感覚
近所の友達と合わない
遊ぶのが楽しくない→小説に浸る
小さいころ ふるまい方が分からない
本人の意思尊重
やりたい人が読書をすればいい
自分で選択すること
自分が納得すること
依存したくない
昔から周囲に流されない
他人と自分のわりきり
自己啓発 - 他人は他人、自分は自分
周囲の目、気にならない
テレビ・ゲームより読書が上
読書の優先度 中の上
自由に読書したい
読書しない通念→ほっとけば

ダラダラ→何するか→読書
考えすぎること→生活に支障
朝読書=有意義
店員がこない→長居
たばこの有無
BGM ほどよい
価格 500 円くらい
滞在時間 1~2 時間
お店がいまいちという感覚
お店のハシゴなし
自然と人間観察
混んでても待つ
時間に自由→読書の波がくる
読書の波の差
突然の気づき
突発的な行動
流れに身をまかす
ターニングポイント←読書が関節的に影響
本を一斉に処分
勢いで捨てる
自分の立ち位置の確認、整理
整理したい欲
結婚・退職→整理
仕事をやめた時期→読書
モノは少ないほうがいい
滞在時間臨機応変
イヤフォンで音楽→周囲がうるさい
ネット情報→スタバで読書
旦那も読書好き
プライベートルームがほしい
シェアなし
旦那との読書コミュニケーションなし
本がありすぎる→専用の部屋
書斎の魅力
プライベートな読書のを求む
興味の範囲広い→見られたくない

読み方に影響←読書会、高校の親友
図書館、友達に借りる
知りたい欲 - 社会人から
学生時代 - 知りたい欲、勉強
夢を叶えるための読書→好き
学生時代→勉強に励む
建築の道に進まない
大学時代→建築家になるための読書
大人→知りたいことを知るための読書
夢を叶えるための読書
ブックカバー 痛み防止
きれいなまま保ちたい
しおりこだわり無し
探求心
ながらで考える
日々の考察
結論を出す
結論までの過程 - あまり調べない
自分のトピックと考え事を結びつける
好奇心旺盛
気になることあれこれ
知的興奮の快感
自分の考えの主張→恥
知ったもの→自分の経験値になる
今やっていることが正しいか考える
知ること→娯楽
生活をおろそかにしたくない→生活の方向
修正
自分の生活をちゃんとする
日々の生活に満足したい
考えることばかりになりたくない
家で読む→一人のとき
家、外 読むものの変化なし
読書メイン
読み方が面白い

読みたい本決まっている
思いが強い本 手元
パラパラ読み
Kindle
拾い読み
読書会参加
本から読書会を知る
精読
速読
一度読み
買う、借りる半々
図書館にない→購入
読書週 3-4 冊 (多いとき)
月 4 冊購入
新品多い
ネット購入多い
読書会=ハウツー系
自分の気がすむまで
中途半端が気持ち悪い
持ち歩き 1~3 冊
リゾート地でも読書
旅行先での読書
通学時に読書
集団作業も好き
ゲーム、ストーリーが好き
晒すことの実験
他人にどう思われるか怖い
読書の息継ぎ→満足するところ
満足いくところ→最後までだが、タイプア
ップや疲れで止めることも

4.1.1.2.2 キーワードの羅列と中分類

カフェで読むことが好き

カフェ読書好む
カフェ読書 大学から
カフェ=スタバ
ネット環境重視
朝のスタバ利用
カフェ→人間観察
カフェ→週1回利用
仕事時 朝スタバ日課
お気に入りのカフェ有
お気に入りのカフェ 寄り道
レイアウト重視
建築学的視点
近所のスタバ
カフェ読書→周囲からの影響なし
複合型→場所目当て
複合型書店、本持参
服にこだわりなし

探求心、知ることが快感

探求心
ながらで考える
日々の考察
結論を出す
結論までの過程 - あまり調べない
自分のトピックと考え事を結びつける
好奇心旺盛
気になることあれこれ
知的興奮の快感
自分の考えの主張→恥
知ったもの→自分の経験値になる
今やっていることが正しいか考える
知ること→娯楽

カフェ=くつろげる場、本と対話できる

読書、考え事→カフェがやりやすい
雰囲気、効率性、どちらも重視
カフェ→読んだ後の満足感
カフェで読書→本との対話
カフェ→他人との距離感がよい
リラックスできる雰囲気
読書の区切り→満足感
外での読書→意味がある行為
忙しい中で読書をする喜び
読書 贅沢な時間
カフェ→一人でこもれるところ
カフェ→くつろぐことがメイン
くつろげるところが偶然カフェ
休めるカフェを探す
ほどよいざわめき
家一気が散る
周囲の反応の観察

幼少期 周りに合わせるのが苦手→読書

小さいころ 小説 - アニメ感覚
近所の友達と合わない
遊ぶのが楽しくない→小説に浸る
小さいころ ふるまい方が分からない

カフェ利用概要

朝読書=有意義
店員がこない→長居
たばこの有無
BGM ほどよい
価格 500 円くらい
滞在時間 1~2 時間
お店がいまいちという感覚
お店のハシゴなし
自然と人間観察

混んでも待つ

滞在時間臨機応変

イヤフォンで音楽→周囲がうるさい

ネット情報→スタバで読書

プライベートな場がほしい

旦那も読書好き

プライベートルームがほしい

シェアなし

旦那との読書コミュニケーションなし

本がありすぎる→専用の部屋

書斎の魅力

プライベートな読書の場を求む

興味の範囲広い→見られたくない

突発的な欲（整理欲、読書欲）

本能的な行動

読書の波の差

突然の気づき

突発的な行動

流れに身をまかせ

ターニングポイント←読書が関節的に影響

本を一斉に処分

勢いで捨てる

自分の立ち位置の確認、整理

整理したい欲

結婚・退職→整理

仕事をやめた時期→読書

モノは少ないほうがいい

出先での読書＝贅沢

リゾート地でも読書

旅行先での読書

自分から情報を得に行き読むもの→読書

形態にこだわらない

facebook＝読書

自分から得に行く情報＝読書

読書はやりたいことの実現ツール

自分から選ぶ本 - 読書

読書＝知りたいことを知る

教養、娯楽の境目無し

知ること＝快感

勉強も読書

小説＝中身の体験

小説→世界を知る楽しみ

社会人になって実用書

夢を叶えるための勉強→知りたい欲と通ずる

読書に含まれる

知りたい欲 - 社会人から

学生時代 - 知りたい欲、勉強

夢を叶えるための読書→好き

学生時代→勉強に励む

建築の道に進まない

大学時代→建築家になるための読書

大人→知りたいことを知るための読書

本はきれいに

ブックカバー 痛み防止

きれいなまま保ちたい

しおりこだわり無し

読み方（速読、一度読み）

拾い読み

読書会参加

本から読書会を知る

精読

速読

一度読み

買う、借りる半々

パラパラ読み

kindle

図書館にない→購入

読書週 3-4 冊 (多いとき)

月 4 冊購入

新品多い

ネット購入多い

読書会=ハウツー系

自分の気がすむまで

中途半端が気持ち悪い

持ち歩き 1~3 冊

読書メイン

読み方が面白い

自分の満足感を重視

満足いくところ→最後までだが、タイムアップで止めることも

幼少期から読書好き

お気に入りを読んで二度読み

小さいころ お小遣いで本購入

家族→図書館あまり使わない

子どものほしいもの→本

家族との読書コミュニケーションなし

父の本興味なし

部屋に本があった

小さいころ ジャンル少女小説

小中 自室にこもって読書

小さいころ 好きなものを二度読み

弟 - 勉強しない、勉強嫌い

弟 - 親からの口出し

考える - 中学生から

建築家の夢 中3のリフォームがきっかけ

他人の読書スタイルに影響を受ける

読み方に影響←読書会、高校の親友

読みたい本決まっている

思いが強い本 手元

自分は自分、他人は他人

本人の意思尊重

やりたい人が読書をすればいい

自分で選択すること

自分が納得すること

依存したくない

昔から周囲に流されない

他人と自分のわりきり

自己啓発-他人は他人、自分は自分

周囲の目、気にならない

読書の息継ぎ→満足するところ

図書館、友達に借りる

信頼できる友人の薦め

友人→教えあう喜び

さっぱりとした友人関係

友人の薦め→信頼

知ったことのシェア

知りたいことが共通している友人

記録すること

フォトリーディング、レゾナンスリーディング

レゾナンスリーディング→遊び感覚

ノートにつける読み方

読書の記録 - 好きな言葉日記に

読書ノートの見返し たまに

表現、言い回しへの興味

日記の表現を考える

ブログ (公開しない)

ブログ→記録の効率性

考えのアウトプット

日記→4, 5年前
字が好き
読めることが嬉しい

読書の優先度中の上

テレビ・ゲームより読書が上
読書の優先度 中の上
自由に読書したい
読書しない通念→ほっとけば
ダラダラ→何するか→読書

宗教にのみ口出しする両親

父親 本好き
両親口出ししない
叔父が建築家
両親の宗教の口出し いや

父親→勉強への口出しあり
勉強がある程度できること→暗黙の了解
宗教の不自由⇔宗教以外の自由
自己啓発→親の宗教を許す

日々の生活>考えること

生活をおろそかにしたくない→生活の方向
修正
自分の生活をちゃんとする
日々の生活に満足したい
考えることばかりになりたくない

家と外変わらない

家で読む→一人のとき
家、外 読むものの変化なし

4.1.1.2.3 中分類と大分類

カフェを特別な空間だと感じている

カフェで読むことが好き
カフェ=くつろげる場、本と対話できる
カフェ利用概要
プライベートな場がほしい
出先での読書=贅沢

読書=知ること=快感

探求心、知ることが快感
自分から情報を得に行き読むもの→読書
夢を叶えるための勉強→知りたい欲と通ずる、読書に含まれる

読書の仕方、保ち方

本はきれいに
読み方(速読、一度読み)

他人と自分の明確な線引き

幼少期 周りに合わせるのが苦手→読書

自分の満足感を重視

自分は自分、他人は他人

信頼できる人からの影響

他人の読書スタイルに影響を受ける

信頼できる友人の薦め

ライフストーリー

幼少期から読書好き、お気に入りを二度読み

宗教にのみ口出しする両親

読むこと・書くこと・考えること

記録すること

読書の優先度中の上

日々の生活>考えること

家と外読むもの変わらない

突発的な欲（整理欲、読書欲）、本能的な行動

4.1.1.2.4 中分類、大分類をふまえた関係図

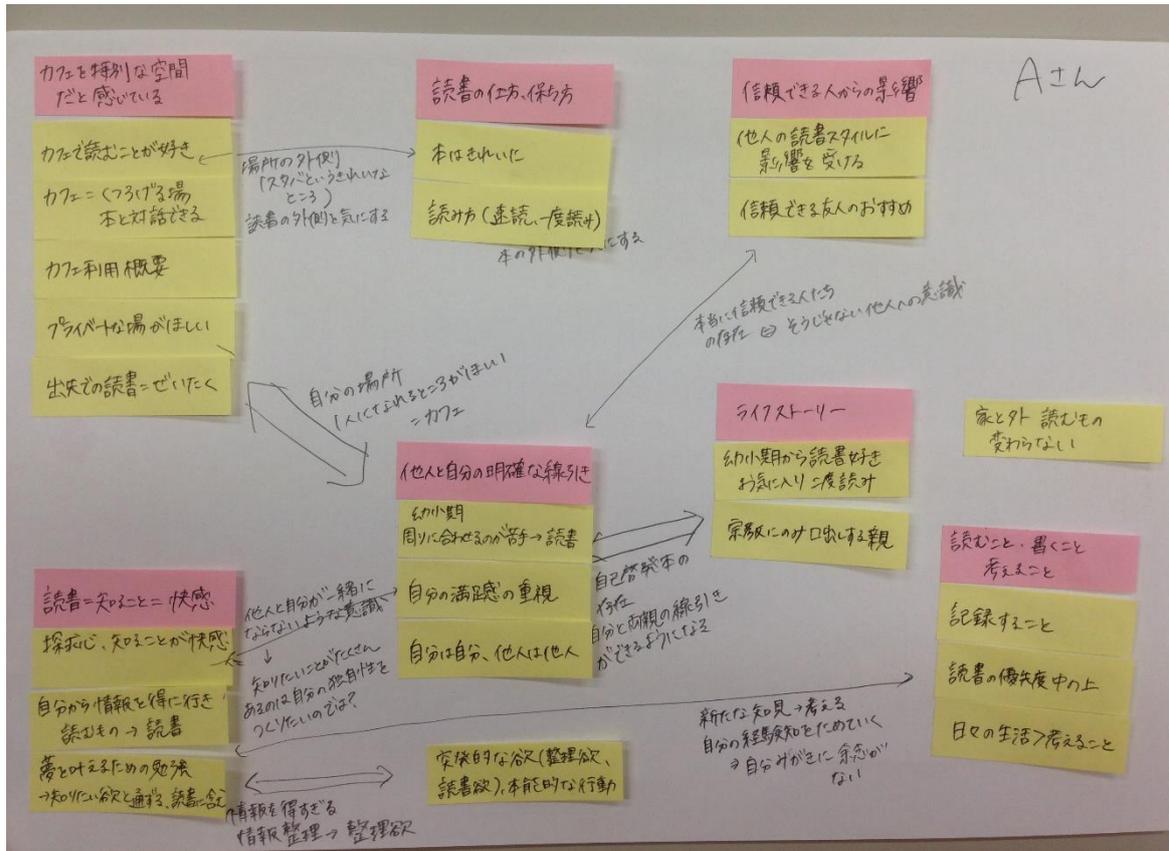


図3 Aさんの関係図

4.1.1.2.5 KJ法のまとめ

Aさんは知りたいことを知れるものが読書であると述べており、媒体にはこだわらず自分から調べ情報を得に行き読むものは全て読書だと捉えている。知的好奇心が旺盛になるきっかけには、両親の宗教が影響していると考えられる。よくないと思っているものでもいいと言わなければならない環境が反面教師となり、幅広い分野に興味を持ちそれぞれのトピックを突き詰めるようになったと考えられる。また、Aさんは人生のターニングポイント（結婚、仕事を辞める等）で本などの身近整理をするところがある。このことから、読書はAさんに様々な考えを提供するが、そればかりには縛られたくないという意味が見られる。自分で調べ、蓄積し、開放するというプロセスは宗教のように一つの物事ばかりに捉われたくないという気持ちから生まれた可能性が考えられる。

また、社会人になって読んだ自己啓発本やセミナーを通し、両親と自分の線引きができるようになった。自分は自分、他人は他人、という考え方は彼女の読書スタイルにも影響を与えている。リラックスする目的でカフェを利用するAさんは各々が自分の好きなことをやっているその空間を一人になれるプライベートの場として捉えている。ソーシャルな

空間ではあるが他人が自分に興味がない空間だからこそ、プライベートな読書を楽しむことができていると考えられる。

コンテンツを重要視している一方で、本はきれいに保ちたいことやリラックスできるカフェを読書の間として選択するなど「外側」には気を使う様子が見られた。

4.1.1.3 Aさんのまとめ

自分の知りたいことを知れる本（＝実用書、ビジネス書等）を中心に読み、それ以外にも自分から情報を得に行きそれらを読むことは全て読書だと捉えるAさん。その背景には、自分で好きなものを選び選択できなかった宗教に対する反発が関係しているだろう。「知れることが快感」という言葉の裏には、自分で情報を取捨選択できる喜びがあるのではないだろうか。

考えたことを日記に書くことが好き、というように、「知識を取得する・考える・書く」の三要素が彼女の生活の土台になっており、一つに比重が置かれる時期や、どれもフラットに行っている時期など様々である。読書行為は彼女にとって情報取得の手段の一端であり、読書というものがすばらしい行為であるという世間的な価値を持っているわけではない。

カフェで読書をするに関しても、上記の発言からカフェの雰囲気や利用することそのものに価値を感じているように見える。読書をしていない時期でもカフェにくつろぎに行くことから、「カフェに行き読書がしたい時期には読書をする」というようなカフェ主体の読書の場の選択を行っている。

彼女にとって、読書の価値観は「知識の取得」「娯楽の享受」だが、知識を求めるようになった背景には両親の宗教によって変化していった彼女の考え方・生き方がある。また、その考え方が彼女にとってプライベートな場であるカフェを読書の場として選択することや、読むジャンル、本の整理等につながってきていると言える。

4.1.2 Bさん

Bさんは30代前半の女性で、現在はIT企業でコンサルティングの仕事を行っている。地方出身で都内在住。独身。四年制大を出ており、哲学関連のゼミに所属していた。

4.1.2.1 インタビュー内容の分析

A) 読書の価値観

Bさんは、読書のことを「大切な趣味の一つ」と言っており、

うん、なくてはならないものだし、読み続けたいという欲求はなくならないと思います。

というように、自分の人生において読書は必要不可欠である、と考えている。読書家族の中に生まれ、幼いころから読書に慣れ親しんできたこともあり、「読書が楽しいこと」という認識が染みついている。読書が当たり前の行為だったからこそ、「読まない」自分の生活が想像できないという。

ちょっと想像がつかない。(笑)そうなんですよ。なんで読まないんだろう。しかもなんか私がちょっと不思議だなんておもうのが、まったく読まない社内の同僚さんとかいるじゃないですか。で、よく本を私が読んでるってことに対して、しかも純文学が好きとかいうとすごいって人がいるんですよ。それはちょっとよく分からなくて、その反応、たとえばすごい難しいゲームをやっているでもそれがすごいってことにはなんないじゃないですか。なんかそれは趣味であって、確かにすごいかもしれないけど。

このように、自分の会社の人たちがまったく本を読まないこと、「読める人」と認識されてしまうことに疑問を感じている。彼女にとって読書とは幼いころからの習慣で身に着いたものであり、日常的にないことが想像できない。このことから、彼女は「読書行為そのもの」に価値を見出していると言えよう。

読書として読んでいる範囲は、8割が小説で残りの2割が哲学書や社会学のものなど、教養を身に着けるものである。大学のゼミでは勉強の一貫でとにかく本を読まされたが、社会人になった今は読書対象が「自分が楽しいと思うもの」に集約されていったと語る。勉強と読書は「なんか分かれている感じがあります」と言っていることから、自分から楽しんで読むものとそうじゃないもの間で読書の線引きがされていた。

「読書=いいこと」という世間の通念に関しては、

なんともいえないので、人によっては必要ないことかもしれないですよ。あんまり私も絶対的にこれがいいこととは思ってなくて、なんか数ある、数ある文化的領域のひとつかなって感じなんですよ。そこまで絶対的にと言いきれないものがあるんじゃないかな、そこに。なにごとも、みたいな。個人的な意見としては読んだ方がいいなって思っていますけど。でもほんとに読む人ってあんまりいないんだなってしみじみ思う。思いませんか？

と述べており、強制はできないものではあるが読書そのものはいいことである、という考え方が身についている。また、読書は「普段生活しているときは絶対に使わない頭の領域を使う気がする。」といい、想像力や思考力が鍛えられるものだと述べている。

そういう体験自体をもってないって、ちょっと残念な気がしてて。なんだろう。なんかその、気付きのなことがよくある本ってあるんですよ。すごい言うの難しいんですけど、

というように、読書という行為からでしか得られないものがありそれが無いことは「残念な気がする」と述べている。世間的に読書が絶対的にいいことである、とは言わないものの、自分なりに読書という行為に対し絶対的な価値を見出しており、「読書教」的な一面が見られた。

B) 価値観の形成過程

ライフストーリーA

父親が英文学者であり、何千冊と本がある家で育ってきた B さん。本を読むように教育されたわけではなく、家の中が本で溢れていたため自然と読書が身に着くようになった。両親も祖父母もジャンルは違うが読書家であり、自らのことを「根っからの読書家系」と述べていた。

そうですね、もう基本、会話はわりと本のことで(笑)ほんとすごい読む家庭、珍しいくらい読む家庭だと思います。なんかお正月とか集まるじゃないですか、家族が。私は東京にいますけど、田舎に集まったときも、お正月の大晦日でもみんな銘々本を読んでいる。すごいんですよ、うち(笑)なぜか。紅白とかうるさいから消してくれるみたいな感じですね。(笑)

と述べているように、自分たち家族が他と比べても特別読書好きであることを認識している。

中学生のころに父親が買ってきた日本の文学者が紹介されている書評を読み、衝撃を受けたことをきっかけに純文学にのめり込むようになる。

なんか今でも覚えているんですけど、安部公房っていう作家がいて、その人の著作がこんながあると紹介されてて、そのストーリーの独自性とか芸術性がすごいなと思って読みたくなった。

当時中学生であったが、「こんな世界があるんだ」と思い、父親の本棚から本をとってきて読み漁るようになった。今となっては文学者の書評もさりげなく父親が置いたものだろうと語っており、読書を無理強いすることはなくてもその布石があったと本人も解釈してい

た。中学の友人と自分が読んでいるものに違いがあることを理解しており、自分が浮くことをさけるため当時は読書家であることをあまり表にださず友達付き合いをしていた。読書に関するコミュニケーションは父親と話すことで満足しており、読書について話す友人がいないことに関しては特に不満はなかったと語った。

「父親の読んでいるレベルに到達したい」というように、読書家として父親を深く尊敬しており、憧れから読書をしていた部分も垣間見える。親に褒められたい、という意識のもとで読書をしていたわけではないが、

褒められたことないかもしれないです。読書に対して、こんなに読んでえらいって言われたことはないんですけど、でも、私がすごい本を読んでいるのを喜んでるってのはすごい伝わって、よく本屋に連れてってもらえて、好きな本なんでも買ってもらえた。これは読んだほうがいいよっていうのも教えてもらって。それで、これは肯定されてることなんだっていうのは分かっていた。

と述べており、父親から肯定されることに喜びを感じていた。父親がテレビ嫌いだったこともあり、あまりテレビを見ることができず、周囲の友人と家庭環境が違うことに葛藤していた時期も見られたが、

そうだなー、昔は割と葛藤していたこともあるんですけど、そういう教育方針に。でも大人になったら彼の知的な部分に対する尊敬しか残らなかった感じですね。

というように、当時の環境が現在の父親への尊敬につながっていることを述べていた。読書家としての父への憧れと尊敬は、彼女が一心不乱に読むようになった要因の一つであることが伺える。

ライフストーリーB

父親の影響で自分自身も文学に興味を持ち、大学は文学部を希望していたが、食扶ちがないという理由で父親に止められたと語る B さん。父親の薦めの通り東京の大学に進学した後は、哲学関連のゼミに行き、勉強に関連した本を大量に読むことになった。大学時代に周囲が読書家ばかりだったことから、現在の勤め先に読書家がほとんどいないことを嘆いていた。

そう、なんかビジネス書とか、を読むって人はもうちょっと多いと思うんですけど、たとえばこういうところになっちゃうと、小説をたとえば習慣的に読む人が

どんだけいるかっていうと、30人中私も入れて3人とかってなっちゃいます。ITだからかもしれないです。もっと印刷会社とか行けばもっとあるのかもしれないけど。特に私のいる環境ではほんとにいないですね。すごいと思います。

彼女にとっては読むことが当たり前のことであるため、まったく読書をしない人たちが多数という環境自体が「すごい」ことなのだろう。現在は中学生のときのように読書家であることを隠すことはしていないが、周囲に「そんな難しいもの読んでいるなんてすごい」と言われることに疑問を感じており、あまり積極的に話す・語るといことはしないようにしている。「浮いてまで自分の好きなものを貫きとおすつもりはない」と言うように周囲の目気にする様子が見られた。

また、社会人になってからは父親との関係が対等になったとインタビュー中に喜ぶ様子が見られた。

そうなんですよ！大人になってからは、認めてくれるようになったんですよ。私のレベルが追いついてきて。なんとかそのレベルに追いついてきて、確かに面白かったみたいなことを言われたときは嬉しかったですね。でしょー！みたいな。だと思った！って。

たしか結構大人になってからは父親にも母親にも本を勧めるようになったんですね。好きそうなやつとか見つけて、それを見繕ってあげたりとか。だいたい8割くらいはちゃんと当たりますね。当たらないときもありますけど。

と述べているように、父親や母親に本を見繕い、それが両親の好みに合致することに喜びを感じている。面白い、と認められることは、Bさんにとって父親のレベルに追いついたと感ずることができる一番の言葉だったと思われる。褒めないという教育方針のもとに育ったこともあり、認められることで褒められているような感覚を覚えていたのではないかと推測できる。

社会人になってからは、自分が父親に本を見繕ったり、父親から誕生日プレゼントに本をもらうなどそれまで以上に濃い読書コミュニケーションをしていた。3回目のインタビューでは、読書の趣味以外にも音楽の趣味（クラシック）があい、実家に帰ったときに趣味の話が一番するのは父親だったと語った。母親も音楽好き、読書好きではあるが、好きなジャンルが微妙にずれており、Bさんと父親の話にはついていけない、と言われてしまったと語った。このことから、Bさんの読書が習慣化されたきっかけには、読書そのものの魅力以外に、「父親とつながる」ということに魅力を感じていたことがあったのではないかと考えられる。

C) 読書そのものに関すること

Bさんが主に読むジャンルは海外の純文学である。波があるが読むときは1週間に5冊、あまり読んでいない時期でも半月に1冊と、生活の中に読書をする習慣が組み込まれている。「文学っていうジャンルでもともと読みたいジャンルはあらかじめ読んでしまったんですね、若いときに」というように、自分の読みたいものを読みつくしている現在は、新たに読みたいものが見つければそこを深堀し思いっきり読書漬けになることがある。

「一生読書をしていきたい」という気持ちがあることから、読書に関する情報収集を積極的に行っている。

なんか、出版社が流してるツイッターってあるじゃないですか。公式アカウント。あれを頼りにしてて、あれで、なんか、新潮社、岩波文庫とか、今日の一言とかあるんですよ。そこで、これがいいと思ったら買ったりとか。うまいなと思ったのは、読者がツイッターで感想を書いたやつをリツイートしたりしてて、出版社が。それが何回も出てくると、これは面白いんじゃないかって思ってリストに入れてって、そういう出会いの広げ方。本のレビューサイトとかあるんですね。本に載ってるようなやつじゃなくって、わりとプロフェッショナルがレビューしてるサイトとかあって、そこのレビュー読んで買ったりとか。なんか本屋行かなくても、ネットでそういう接点ができるように思います。

というように、ツイッター等 SNS やインターネットを活用し、新たな本に出会う機会を自らつくっている。

「書店にはあまり海外文学¹⁹が置かれない」ということを嘆いており、自分の気になったものは Amazon で買うことが多い。

何度も読み返すお気に入りの本は紙で、一回読めればいいものは電子書籍で、というように媒体の使い分けをしている。また、本の保管方法については、

えっと、読んでないやつは積読スペースがあってそこに置いておいて、読み終わったもので読み返しそうなやつは本棚に置く、で、読み返さなそうでも手元に置きたいってなったら収納の中、もっかいは読まないだろうなって思ったら処分するなり、溜まったら売るってそんな感じです。

というように、自分なりの体系化がされており効率よく読書をする環境が整っている。本に関する情報収集から購入、保管まで自分なりのプロセスが身につけており、読書をしや

¹⁹ ここでは翻訳されているものを指す

すい環境を作り出していると考えられる。大学生までは本の装丁やフォントを気にすることもあったが、「社会人になって、実利²⁰を求めるようになった。」というように、外側ではなく、より中身を重視し自分が一生読書しやすい状態を模索していると言えよう。

読書をする場所は家、カフェ、電車があげられる。カフェを利用するときは「集中して読み終えたいとき」であり、読み終えたい章など目標があるときに利用するとのことだった。

どうかな、うちで読む本と、…なんか本を並行して読むことがあるんですね。で、難解で結構ちびちび読まなきゃいけないものは寝る前に読んだりして、サクサク読めるモノは持ち歩きの、とかなんとなく決めてるんだけど、カフェで読むっていうのは内容がどうこうっていうよりも目的に近い。読み終えたいとか進めたいっていうときに行くので、内容というよりは、目的、そうですね。

この章を読み切りたい、あとは大体これは1時間くらいかかるけど集中して読みたいなってときにたぶんいくんだと思います。ただたんにこの厚さある集中したいってときだと行かないかもしれないです。ちょうどよさげなところ、ほどよい感じですね。

このように、カフェを利用するときは内容にそくしたのではなく、「ここまでは読み切るぞ」という自分なりの目標をたてているときと考えられる。本の厚さもカフェで読み切りやすいものと考慮しており、「読みたいからカフェに行く」「カフェに行きたいから読む」という理由でカフェを利用するのではなく「このくらいの厚さならカフェがちょうどいい。」という読みたいものの厚さから場所を考える様子がみられた。

「席を占領し続けるのに罪悪感がある」と語っており、混みやすいカフェは避ける傾向にある。何時間もいることが申し訳ないという気持ち強いことから、長くても滞在時間は1時間半程度である、と述べたが、この「申し訳なさ」が自然と1時間程度で読み終わるものを選択することに関わっているのではないかと考えられる。自分が読んでいるものとの兼ね合いでカフェを選択することが多いが、電車で気になるところで中断された場合はそのまま駅のホームのベンチで読むなど、読む場所に大きなこだわりがあるわけではない。読むもの、時間、場所の使い分けは見られたが、基本的には読書することが最も重視されており、「どこでも読むことができる」という気持ちもあることが分かった。

また、古本屋に行くことが好きで、

²⁰ ここでいう実利は、本当に必要なものだけを集めることを指す。

例) 本の装丁を気にしてほとんど冊子体で買っていたが、1度読みでいいものは電子書籍で読むようになった、など

神田まではいかないですけど、古本屋があれば絶対に入るって感じですね。絶対入るって感じで。で、近所にもあるので時々行くようにしている。チェックしたりしていますね。

掘り出し物を探すって感じです。雰囲気も好きだから行くは行くんですけど、どちらかというところあるんじゃないかなって感じなんです。

というように、新たな本との出会いを求めて利用している。学生時代は初版本を集めることに魅力を感じていたが、上記でも述べたように実利を求めるようになってからは、収集癖的な利用のためではなく、とにかく新たな本に出会いたいという情報収集的な目的で利用していることが分かった。

D) その他

Bさんは1回目のインタビューで読書会に行くか、という質問をした際に、「読書会に興味がある」と話していた。その話がきっかけになり、2回目、3回目のインタビューの時には定期的に読書会に通うようになっていた。古典文学に関する読書会を探し月1回通い、交流を楽しんでいた。

面白さは、古典文学っていうのがそもそもマニアックじゃないですか。普段いるとそういうの読める人と巡り合わないですけど、そういう人がほとんどっていう空間がすごい新鮮で、あの、ほんとうに古典しかすきじゃないって人もたまにいるんですけど、本当にそういう人が多くって、新鮮です。

なんかどうしてもそのことを話したいってわけじゃないけど、なんか私家族が結構よんでるので、その欲求は家族で結構満たされていて、自分の興味はそうやって親と話していたので、外の人で、いたらいいくらいだったんですけど、その空間だと全員が好きっていう(笑)すごい。でもその中でも自分がさうとうマニアックだったってことが分かりました。よく分かりました。(笑)

と言うように、これまで家族の中で閉ざされていた読書コミュニケーションが、読書会に参加することで外にも向けられるようになった。誰かと共感できることが嬉しい、というよりも、古典文学好きしかいないという空間の特殊性に対して感動している面もみられ、貴重な場であると述べていた。この読書会は、紹介された本を読んで次の月にその本について話し合うというものだが、自分にとって読みにくいものはカフェで一心不乱に読むなど、使命感からカフェを利用する様子も見られた。Cさんはカフェで読書をする際には「読み終えたい、進めたい」という気持ちをもっていることが多く、読書会で課された本もカフェで読書をする対象に入ったのだろう。

また、読書会の魅力について尋ねたところ、

なんだろう。なんかでも同じものを読んで他の人がどう思うかっていうのを知りたいっていうのはあります。なんか自分の好きな本を知ってもらいたいとか共感したいっていうよりかはこの一つの作品について他の人がどう思うかっていうのを純粋に聞いてみたいような感じがします。

というように、自分以外の感想を知りたいと思う側面がある。読書会では他人の感想だけでなく直接話すことで人の個性まで見ることができ、それが魅力の一つだと語った。自分が好きな作品に対して新たな観点を知ることができるなど、自分の読書の楽しみ方を見直すきっかけにもなっている。

他人がどう思っているかを知りたいという気持ちから、批評本や後書き・解説を読むことも多く、読書会にそのような役割を求めていることが考えられた。

4.1.2.2 KJ法の結果

4.1.2.2.1 キーワードの羅列と中分類

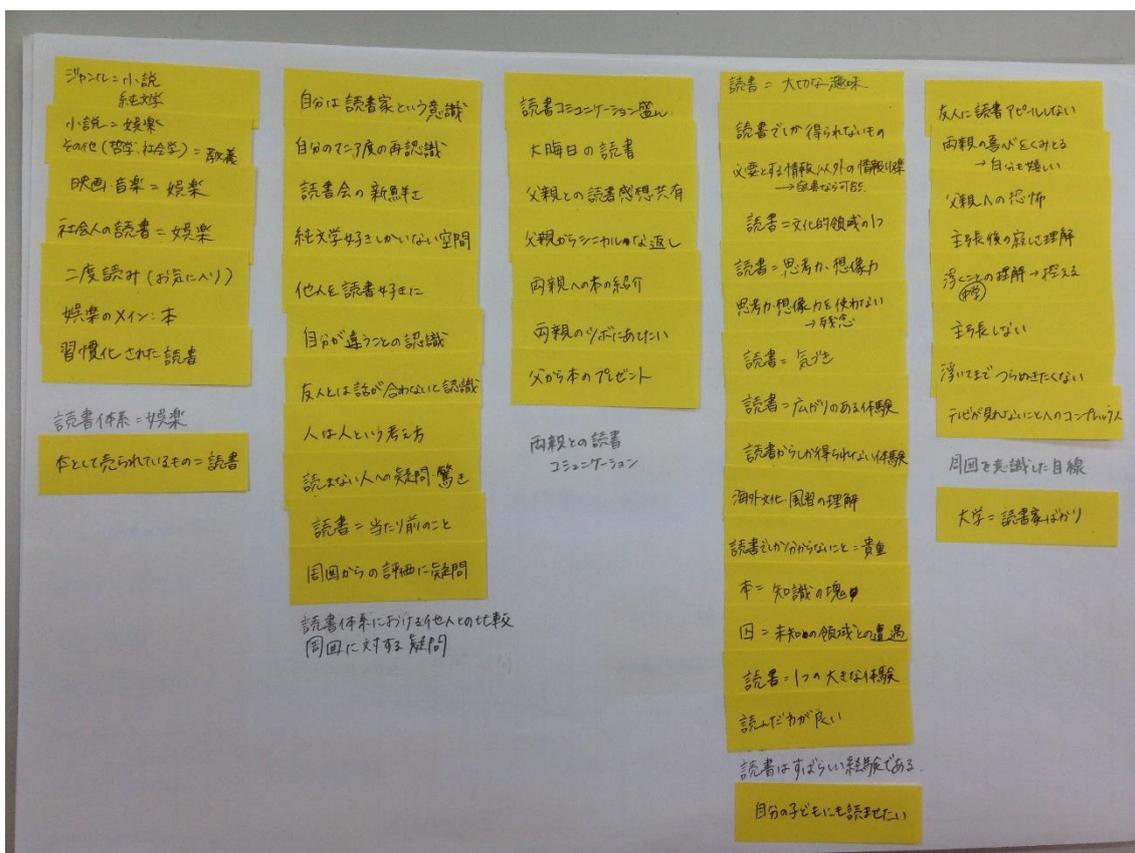


図4 Bさんのキーワードの羅列と中分類1

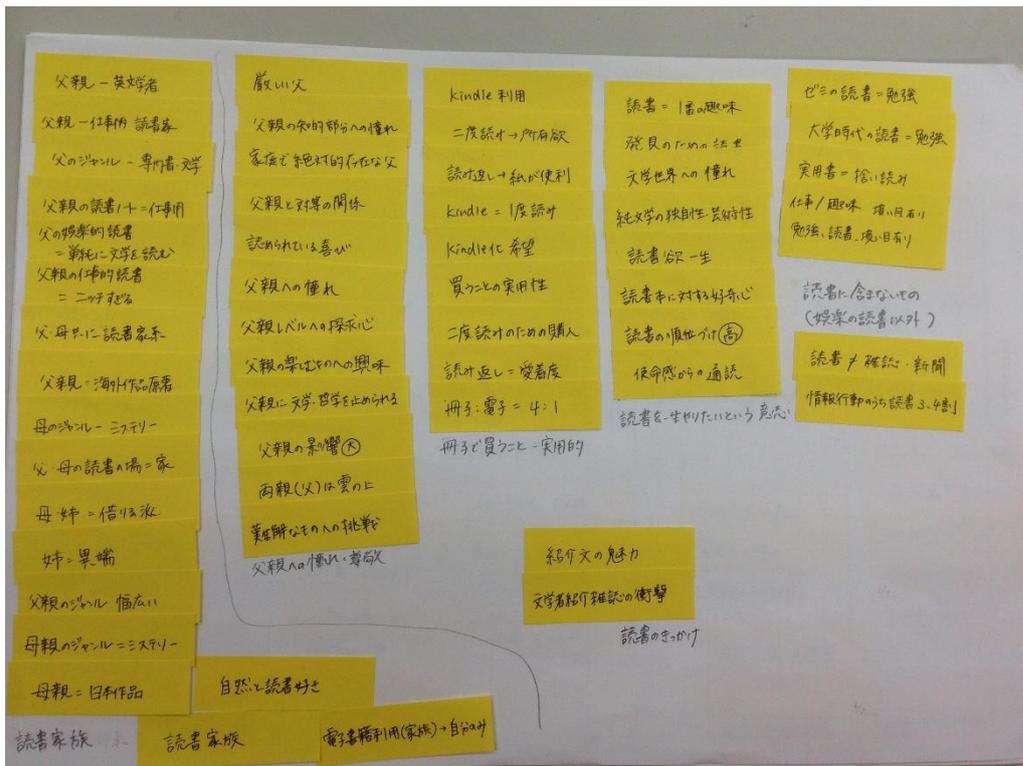


図5 Bさんのキーワードの羅列と中分類2

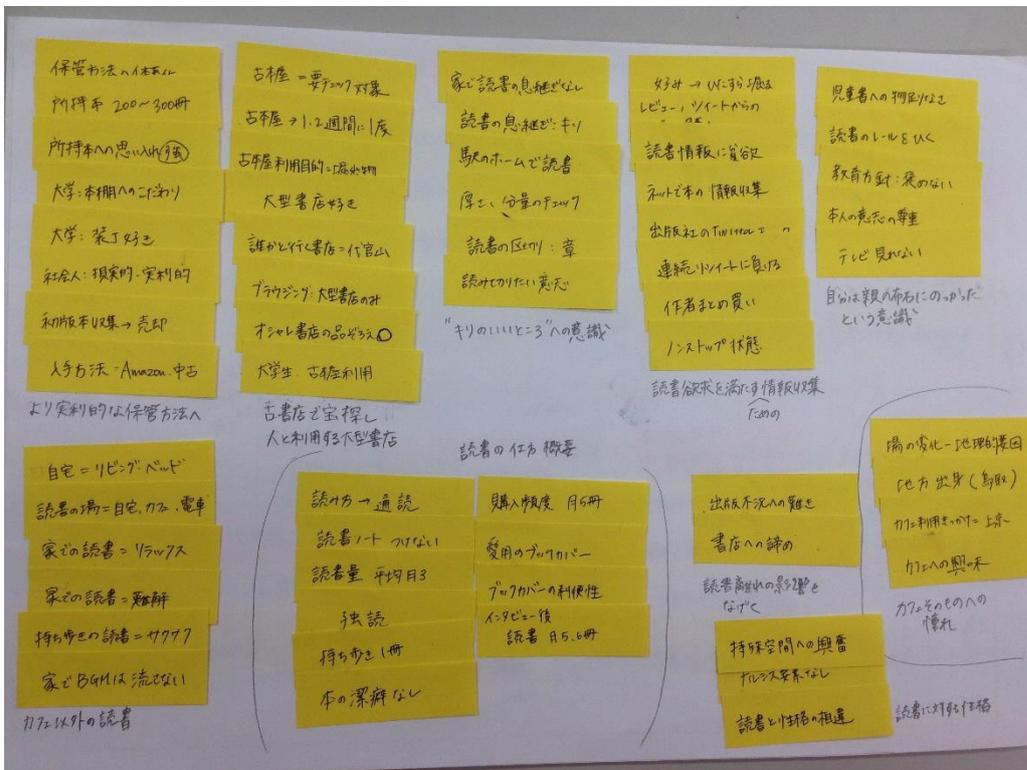


図6 Bさんのキーワードの羅列と中分類3

4.1.2.2.2 中分類と大分類、その関係性

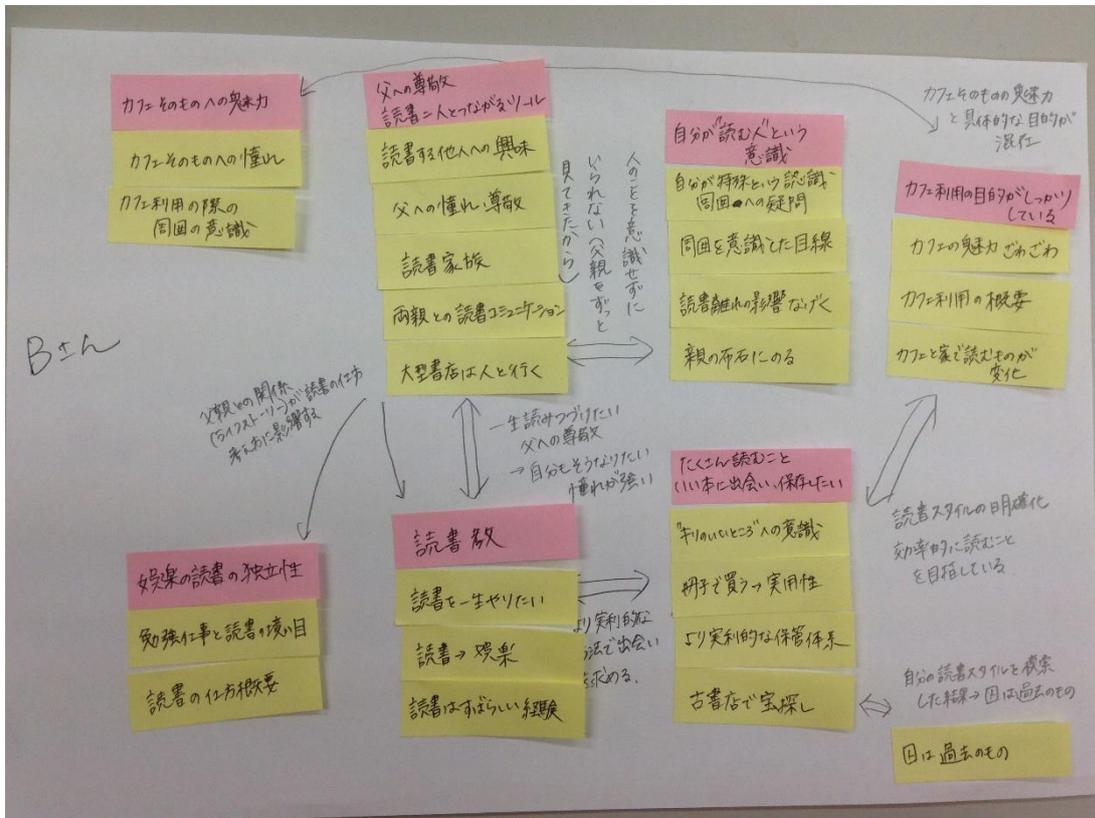


図7 Bさんの中分類と大分類、その関係図

4.1.2.2.3 KJ法のまとめ

読書家族の中で育ち、海外文学者である父親の読書様式に多大な影響を受けている。父親を尊敬しており、彼の面白いと思う領域に達したいという気持ちはかなり強かった。認められたいという気持ちも強く読んだものを父親に話しているところから、彼女にとって読書とは父親とつながるツールの一つであったように考えられる。小学校高学年から中学生にかけて日本の純文学などを読むようになり、周囲の友人と読んでいるものとの差があることを理解していた。自分が読むものを主張することは自分が浮くことにつながる、という考えが強く、読書コミュニケーションの幅は家の中だけにより限られていく。他人には理解されないだろうという気持ちが、父親とのコミュニケーションをより深いものにしていったのではないかと考えられる。

一生本を読み続けた父親に憧れていることが、彼女の読書を一生続けていきたいという考えに影響を与えている。一生読み続けたいという彼女にとって、情報収集と保存の体系化は欠かせないだろう。効率的な保存体系は、何度も好きな本を読み返したいという彼女の欲求を満たし、同時に新たな本に出会えるようにツイッターなどを駆使しネット上での

情報収集を行っている。また、カフェで読む本は集中して読みたいもの、少し苦手な分野と決まっており、これも効率的に読むことを目指した場所の選択をしている。一生読書したいという彼女の欲求は効率的な読書スタイル形成に関わっている。

4.1.2.3 Bさんのまとめ

純文学を好んで読む B さんの読書のルーツには父親の存在が切り離せない。父親が置いたと思われる父親の文学者の書評をきっかけに自分自身も読書にのめり込み習慣化された。基本的に褒められることはなかったと言ったが、成人後に父親が自分の薦めた本を「面白い」と言うことに喜ぶなど、父親に褒められたい、認められたいという気持ちが彼女の読書欲を駆り立てる要因になっていたと考えられる。周囲の人が読書をしないことを嘆く、また読書はいいものであると語る様子から、「読書そのもの」にも価値を持っている様子が見られる。同じものを読み、他人がどのような感想を持つのかに興味を持っていたが、そのコミュニケーションは家族内で完結していた。しかし、読書会に参加し、他人との意見交換や新たな本に出会うことを楽しむなど、読書に対してアクティブな面が見られる。

読書はカフェ・電車・家などに分け、カフェで読むときは読み切れそうなものとの兼ね合いで本を選ぶときがある。しかし自分が気になる内容であれば、場所よりも読書そのものを優先させるところがあり、電車で気になるところで目的地に着けば、そのまま駅のホームで読み続けるなど、読書の順位付けは相当高いと言える。

B さんが読書に価値を持つようになった背景には、父親や家族の読書する姿が関連している。読書そのものに価値を感じていることが、一生読書していきたいという「読書欲」につながり、効率的な情報収集や読書する場の選定など、彼女の読書スタイルに影響を与えていると言えよう。

4.1.3 Cさん

4.1.3.1 インタビュー内容の分析

C さんは 30 代前半の男性で、現在は IT 企業で SE として働いている。仕事のかたわらで映画の脚本を書いている。関西出身の首都圏在住。四年制大を出ており、当時は演劇の勉強をしていた。

A) 読書の価値観

C さんは、読書の定義として、「本を読むこと、その中でもフィクションを読むか小説を読むこと」と述べている。

いや、たぶん小さいころから図書室、とか街の図書館に行くのが好きだった。そ

こでひたすら本を読む感覚が楽しいっていうのがあったんで。たぶんそのときから入りこんで現実忘れるみたいな感覚がその図書室とか図書館にあったっていうのがたぶんあるから、入りこめるものっていうのが読書って、たぶんそういうところから来ています。

というように、「現実を忘れ、没頭できるもの」を読書として捉えている。彼が重視しているものはストーリー性であり、それがしっかりしていれば媒体にこだわらない様子が見られる。

そういう意味だと、作者っていうものが存在してるものを読むことは読書、インターネットで表現している詩人とか、そういうサイトでよく見てたりするんで。ウェブ漫画とかもそうですけど。創作物としてきちんと作者がたつて、作品として発表されているものは読書に捉える。

このように、読むものの幅は広い。映画の脚本を手掛けていることもあり、作者の表現力や「なぜこんなことを思いつくんだろう」と思わせるような発想力に注目するところがある。この着眼点は、小説という形態にとられるものではないことから、彼の読書の幅を広げていると考えられる。

2回目のインタビューでは、海外にドラマにはまりすぎて読書をしていないことに焦りを感じていた。

ほんとその、ドラマにハマってて読まないことに関してちょっと危機感はあるんですよね。なんか全然本読んでないなってことはあって。なんか燃料みたいにとらえてるところがあって。自分が生きてくうえでの燃料として、そういう本とか面白い本を見つけて読んだり考えたりすると、モチベーションあがるな、みたいな、あることをやってないから、俺こんな映像ばっか見てていいのかなっていう危機感がありますね。

というように、「読書=生きていくための燃料」という表現をしている。映画やドラマを見ることも脚本家として勉強になることはもちろん多いが、「表現力がないと、人の肉体を通して役者が演技をしたときに変な感覚になることがある。作者の思っていることが役者の個性で散らないように、そこまでの文章が必要になる」といっており、表現力は文章を読むことでより磨かれていくと考えている。映画やドラマに比べ読書は

このさっきの本、本の残り方ってもうちょっと長いっていうか、文章で覚えるか

らかな、なんか結構残ったりする。時間の長さが長いっていうか、もう、一回しか読んでないのにくっきり覚えてる。

なんかやっぱその残り方って文章で全部自分の中で作る映像を喚起させるから。残り方が長いですね。受けてだけ²¹じゃない。

と言うように「残る」感覚に関しては読書の方があると感じている。自然と映像作品と読書を比較している様子がみられ、「読書の方がためになる」と、考えているような印象を受けた。

あー、読書、まあでもたぶんそのシナリオ書いたりし始めてからは、学ぶって意識がかなり。楽しむだけじゃなくてどういう風にこれ着想したのかな、そういう視点をすごく持つようになったので、それ以降は読書の定義とか意識が変わったと思う。そういう意味だと自分の書きたいものの精度をあげたいっていう意識はかなりあって。

と述べていることから、脚本家として読書に対して「学ぶ」という視点が強いことがわかる。

自分の脚本家としての生き方とは切っても切れないところがある読書だが、

なんかやっぱ、なんだろう、没頭感が違う。読書っていうとやっぱり本の中に没頭する感じがあるので、それ新聞とかルポライターものは自分の中ではどうかと。入り方の問題 だと思います。

というなど、書くことを意識しているだけではなく読者として没頭し、楽しむ一面も見られる。このことからCさんは読書に対し、「知識の取得」と「読書そのものの価値」を求め、という2つの価値観を持っていると考えられる。

また、「読書=いいこと」という世間の通念に対しては、

あー、でもやっぱ、思慮深さに直結していくと思うんですね。本を多く読んでいる人って。なんか話し方に出てくるっていうか。大学の人にすごく思ったのが。なんかまあ本をいっぱい読んでいっぱい感想を人に言う人って、話し方がさうとうめえなって。周りのね。

なんか、映画もそうだろうって感じだけど、映画もだんだんアトラクション的なものが増えてきてて。なんなんだろう。本がいいって言うよりは、...ただ読んで

²¹ ただ作品を受けて消化するだけではない、という意味

るだけだとあんまり変わらない気がするんですよね。なんでもこう掘り下げるといいたいなのに向かうといいんじゃないかなって思う。やっぱ。本だけじゃないですけど。音楽とかもそうですけど。

と述べるなど、「読書=いいこと」という通念に対する否定はなく、むしろ肯定する様子が見られる。しかし、ただ読むだけではなく、読んだ後に掘り下げ自分なりに感想を持つ、分析することが必要だと考えており、「読書=いいこと」という世間の通念を鵜呑みにするのではなく、読書行為から「思慮深さ」を得るためにはどのようなプロセスが必要なのか、という自分なりの解釈を持っていることが分かった。

B) 価値観の形成過程

ライフストーリーA

母子家庭で育ち、母親の仕事の都合上、家で一人で過ごすことが多かったという C さん。裕福ではなかったため、ゲームや自転車もなく、自分のお小遣いで買った漫画や、マチカド図書館²²で借りた本が数少ない娯楽だった。周囲の友人ともあまり話が合わず、友達が少なかったために小学校のころは放課後や昼休みも読書をしていたという。また、母親との関係性が読書にのめり込むきっかけにもなっており、

で、親と本当に仲良くなかったから、しゃべると喧嘩になるけどしゃべらないので、ずーっと読んでました。環境がかなり影響を与えていたかもしれない。

と述べているように、母親との仲の悪さは C さんの読書の習慣化のきっかけになったと思われる。母と仲が悪くあまりコミュニケーションをとらなかった一方で、夕食時にぼつぼつと会話する中で母親が話すマチカド図書館に興味を持ち、自ら借りに行くなど、母の行動を真似する一面も見られる。読書家の父を尊敬し背中を追いかけた B さんとは対照的であるが、親の読書行動を自然と真似する様子は C さんにも見られた。

マチカド図書館で本を借りるようになったことがきっかけとなり、図書館で本を借り読書することが C さんの習慣になった。中学生のときに「細胞率」という詩を読み、詩に興味を持つようになる。

ほんとその初めて詩集とか読んでみて全然面白くなくて、でもなんか気になったとか思って何回も図書館で借りたんですよ。何カ月とか。もっかい読んだら面白さが分かるかもとか思って。そうやってる間にほんと 1 年くらいかけて、これ

²² 駅などに設置してある寄付型の図書館。本棚に置かれているものは自由に借りることができる。手続き等は特に必要なく、好きなときに貸し借りができる。(C さん談)

めちゃくちゃ良いかもしれないと思ったのも、きっかけで、すごい色んなものを味わいたって思うようになった。

この本をきっかけに、同じものでも読めば読むほど自分の感覚が変化していく楽しさを感じるようになる。同時に、読書からストーリーの面白さだけではなく、「他人の価値観の吸収」をするようになったと考えられる。また、小説だけではなく、ネットアイドルのチャットルームを通じ知り合った人びとのブログを読み、他人の表現の面白さに触れるようになった。

うん。ほんとインターネット、ネットアイドル黎明期だったと思う。珍しかったんですね。小説とか書いて、ひそかに夢見てた自分にとっては、ネットに書いて何万人の人が見てますっていうことは、すげー！みたいどころがあったんでしょうね。自己表現、別に小説じゃなくてもできるんだって思い始めた。

というように、インターネットからも他人の表現力を吸収しており、媒体ではなく中身にこだわる様子は中学生のころから見られた。

また、この時期から小説や詩を書くなどの自己表現をするようになるが、読むことと書くことに大きな違いがあることに感銘を受け夢中になる。当時付き合っていた彼女が詩を書いていたこともあり、他人に影響を受けている様子も見られた。詩を書くことは高校生まで続いていたが、

昭和初期の詩人たちの言葉の強さに勝てないんですよ。まあそれは俺の語彙力が弱いこともあるかもしれませんが、表現の核心とかってあって。

なんかその、シリアス感が、生活のシリアス感が違って。俺がいくら詩を書いたって、昭和の詩人たちに勝てないんですよ。絶対に。それがあったから言葉が弱すぎるなって。

学校の授業終わってなんか書くかって書いてるような俺が適うかって思って、そうそうに諦めたっていうことはあります。

というように、先人と自分の時代を比較し、詩をかくことはやめたという。詩だけに限らず、昔の人びとが生み出した「オリジナル」の強さ²³には現代のモノは勝てないと語っており、

現代芸術に対して諦めている様子がこのころから見られた。

創作物の中でも詩に対しては特別な思い入れをもっている。一つの描写に全情報を入れ

²³ ここでいう「オリジナル」の強さとは、古典的なものの力強さを指す。

例) クラシック音楽・夏目漱石、など 100 年以上経っても継がれ続けるものなど

る詩を「これ以上研ぎ澄ませられないもの」と表現しており、

なんかそういうほんのワンシーンの描写だけで切り取ったのが詩って感じがして。ぼくの中のランク付けは詩人が一番上。詩人になれないやつが小説家になる。小説家になれないやつが映像にいくって僕は勝手に決めているんですよ。

と創作物のランク付けをしていた。

ライフストーリーB

大学では文芸学部の演劇学科に入り、演劇の脚本を手掛けていた。中学、高校時代から詩や小説で自己表現をしてきていたが、演劇の脚本をやり役者がついたことに感銘をうけ演劇の脚本家として活動をはじめた。

でもそれが本当に楽しいって思ったのは大学で初めて上演したときですね。自分の劇団で。上演したときに、まあウケるウケない含めて、自分の手で作ったものが他人に委ねられる怖さと興奮みたいなものがすごいあるから、そこで、あ、これをずっとやっていきたいなって。役者が自分の書いたセリフをしゃべるっていうことにすごい興奮したんです。

自分の書いたことが実体化されることを「夢のある作業」と語り、自分の作品に他人が入り込み表現されていくことに喜びを感じている。また、同じ劇団の演出家から読書の仕方に関して影響を受けており、

ああ、でもそういう意味だと、大学で劇団を組んでた 1 個上の先輩の演出家というか、論じることがすごい好きだったんですよ。感想とか分析とか。その人といういろいろ話すうちに読み方の深さというか、そういうのは少し変わった気がします。そうですね。それとは面白くない本とかも分析するんで。なんで面白くないのかとか、そういう意見とかもすごい刺激になったりとか。

というように、読んだのちに分析し、論じるというプロセスは大学生のころに作られたと考えられる。何度も読む、見方を変える等、読み方を意識するようになったのは、自ら作品をつくるようになったことと関連しているだろう。

就職後、誘われたことをきっかけに映画の脚本を手掛けるようになる。読書の価値観や考え方が変わったか、否かの問いをした際には、

あー、読書、まあでもたぶんそのシナリオ書いたりし始めてからは、学んで意識がかなり。楽しむだけでなくどういう風にこれ着想したのかな、そういう視点をすごく持つようになったので、それ以降は読書の定義とか意識が変わったと思う。そういう意味だと自分の書きたいものの精度をあげたいっていう意識はかなりあって。読書、結構今映画とか読書はそうですけど、面白いものがあつたらそれをどう伝えるか、いま同じ映画一緒にやってるやつともしゃべったりするんで。あとどういう感想持つか大事にしようっていうのは変わった気がしますね。なんで面白いんだろう。このシーンはなんでこういう書き方なのかとかそういうのを話すのが楽しいっていうのはあります。一人で読むよりは人と感想をシェアするほうがいまは楽しいかもしれない。

というように、他人が自分の書いたものに関わってくる「シナリオ」を書くようになってからは、読書に対する意識そのものが変化していることが分かる。ライフストーリーAでは、他人の考え方に触れることに喜びを感じ、読書そのものを楽しむ様子が見られたが、成人して「シナリオ」を書くようになってからは、読書は自己表現のツールとして利用していることが分かる。脚本家という夢を目指す過程で、その燃料となる読書の概念が変化していく様子が見られた。

C) 読書そのものに関すること

Cさんが読むジャンルはフィクションが多く、中でも群像劇²⁴やサスペンス、推理小説を好む。個人的体系に結び付くのはフィクションであるといい、「フィクションの中で描かれる主人公の行動は自分の生き方に共鳴する、自分の生き方の選択肢に関わる。」と述べている。「知りたいことを知る。」と語り、知識を求めるAさんと同じく、読書から勉強したいと思っているCさんだが、実利的な知識ではなく自分の書くもの・生き方に関わる「土台」を求めているように考えられる。

上記でも述べたように、何度も本を読み返すことがあるが、

ああ、基本的には繰り返し読むんですけど、特に一番面白かった本とかは最初のインパクトを忘れたくないっていうのであえて読まないようにしています。読んだ、あの衝撃みたいなのが二回目読むと冷静に分析しちゃいそうなんで。一番好

²⁴ 主人公にスポットを当て、それを取り巻く人々という見方で脇役を描くスタイルの劇ではなく、登場人物一人一人にスポットを当てて集団が巻き起こすドラマを描くスタイルの劇のこと。

(引用：weblio 辞書. "群像劇". 群像劇とは—日本語表現辞典 weblio 辞書.
<http://www.weblio.jp/content/%E7%BE%A4%E5%83%8F%E5%8A%87>, (accessed 2015-12-20).)

きな本は二回目読まない、数冊ですけど。

というように、読み返すもの、読み返さないものが明確である。「分析しないために読まない」ということから、読書し分析する・考察することは C さんの中で習慣化されたものとなっていることが分かる。

本は好きな作者の新刊等を Amazon で購入することはあるが、書店に行きブラウジングをして見つけることが多い。学生時代の先輩の影響で書店のポップアップに注目して購入することがあるなど、他人のおススメや感想に興味を持つ様子が見られる。また、自分の好きな作者は全部揃え、本が日焼けしたら買いなおす、などの収集癖的な一面も見られた。

読書をする場所としては、ファミレス・カフェ・家・電車があげられる。休日の日はファミレスに行き執筆活動と並行して読書をする人が多い。「ドリンクバーがあるから」という理由で使っており、

そうですね、あと書く作業もファミレスがすごい多くて。書きながら気分転換に読んだりとかするんで、カフェよりは長居ができるっていう。で、たぶんそっちのが多く使う。

という発言から、ファミレスでの読書は「創作活動中の息抜き」であり、創作活動そのものに対するものではなく、娯楽として楽しんでいる様子が見られる。カフェは仕事の合間に立ち寄り、そこで読書をする事が多く、お気に入りの店舗を見つけ居心地のよさや飲み物そのものを楽しむ様子も見られた。

外で読書する際には、

家でも読むんですけど、静かなところで読んでると眠くなってきちゃう。わざわざ今日はその本を読もうって時は喫茶店に行ったりしますけどね。

と、「集中する」という目的を持ち利用しているが、3 回目のインタビューでは「本当に難しいものや、ちゃんと考えて本だけに集中して読みたいものは家に持ち帰って読むこともある」ということから、思考するか否かが家の中での読書と外での読書の違いに影響を与えていると思われる。カフェに対するこだわりはあまりなかったが、「没頭したいものをカフェとかで読んで、読み終わったりした後に外が晴れてたりすると、読了感と外の景色がリンクして気持ちよくなったりする」というように、自分の読んでいるものと周囲の環境を気にする側面は見られた。

あ、でもなんかこう、すごい読み込んでくると音楽が邪魔になるから消しますけ

ど、でもどうだろう。本の種類によるかもしれない。曲聞きたいときと街の音を聞きたいときとで分かれる。結構会話が耳にガンガン入ってくるようなときは音楽で。やめたりするときもあるし。

なんか、夜が舞台の小説とかだと音楽の静かな曲っぽいものを聞きたい。ミステリーとかだと集中したいので、街の音を聞いたり。それは簡易的なものかもしれない。

といい、外では BGM などを気にする一方で、家での読書では音楽をかけない。このことから、彼にとって家の中での読書は自分の創作物に対する「勉強」的な読書であり、外での読書は読書そのものに打ち込むことや、気分転換のための「娯楽」的な読書であると考察できる。また、自分の気分によって読むジャンルを変える（SF、恋愛小説、私小説など）等、娯楽として読書を楽しむ姿はその他にも見られた。

また、幼いころに他人に読書することを褒められたいと思ったことがあったか尋ねたところ、現在の方がその気持ちが強いことを語った。

小さいころはないです。今のほうがあります。なんかやっぱ B さんの読書会の話を知ると、俺もそんな世界文学に挑みたいみたいな欲求はちょっと出てきましたね。ただジャンルとして、挑戦みたいになってるの面白いじゃないですか。

そうそうそう、ステータスの 1 個として。いまだにドストエフスキーがステータスって言ったら恥ずかしいんですけど。

有名な文学に挑戦することで、「生粋の読書家」たちに認められたい、「ステータス」にしたいという気持ちがみられる。しかし、自分ごときがそういうものに参加しても、と自分を卑下する面も見られ、生粋の純文学を読む人たちへの尊敬・畏れを持っていることが分かる。

そう、なんかスタンダードに、届くものはまだ生み出してないんじゃないか。100 年残るみたいな。たぶんその作り手の意識だと思うんですよ。いまってなんか分かんないけど、してる人いるのかな。今って 100 年残ってやるぜって気概でまず作ってないなって。どのジャンルもですけど。

という発言からも、昔の人々が残した「オリジナル」に特別な意識を持っていることが分かり、このことが「オリジナル」を読む古典文学好きへの尊敬に繋がっているのではないかと考えられる。

D) その他

2 回目のインタビューでは友人の薦めで海外ドラマにはまり、読書をしていないことへの危機感をもっていた。また 3 回目のインタビューでは雑誌やノンフィクションを熱心に読む様子が見られた。雑誌を読書ととらえておらず、それまであまり雑誌を読むことはなかったが、パリの同時多発テロをきっかけに「情報そのもの」を求め手に取ったという。創作物との大きな違いとしては、「雑誌は自分が生きていく上で知っておくべきものを集めたもの」と述べており、自分の生き方の土台として求めるものではなく、知っておくべきものという「教養」的な意味で雑誌を買っていた。雑誌などに載っている情報はネットを見ることが事足りると思っていたようだが、「ネットの情報はすぐに頭から抜け落ちる感じがする。雑誌の方が頭に残る」と発言している。フィクションや詩など自分の心の琴線に触れるものに関しては媒体に囚われない様子が見られたが、情報に関しては雑誌などの紙媒体を読むことに意味があると考えており、ジャンルと形態に関連性がみられた。

インターネットが普及し、冊子体上じゃなくても自己表現ができる現代のことを「一億総作家時代」と呼び、自己表現がどんどん簡略化していくことを嘆いている。インターネット上での自己表現できるツールとしては、ブログや、Twitter、facebook などがあげられるが、ブログを楽しんでいた様子がみられ、

こっからじゃあスタンダードになる人はこの中のほんの一握りになってくるのかなって。どうしても楽なほうに流れちゃう。ブログの文化ってすごい好きだったんですよ。その本当に面白いブログを書く人っていて、で、そういう人ってもうやめちゃってるじゃないですか。

と述べている。このように、他人の考えを知ることができるブログを楽しみ、それが廃れていくことを残念に思う様子も見られた。ライフストーリーA では中学生のころからインターネットに親しみ、ネットアイドルの暗い自己表現やそれにまつわる人々のブログを読んでいたことから、ネットを通じた他人との交流にも興味をもっていた。

また 3.11 以降に地震を題材にした創作物が増えたことを冷めた視点で見ると、世の中の流れや風潮を俯瞰する様子も見られた。

そうそうそう。なんかそういうのを感じると、なんか我々の背骨の細さとか、昔の人には勝てないなって。

詩だけではなく、クラシック音楽や文学作品に対しても、昔のオリジナルには勝てないという意識を持っている。昔と比較して現代を嘆くことも、自分自身がオリジナルになるようなものに出会いたい、作りたいという強い意志の裏返しであることが考えられた。

4.1.3.2 KJ法の結果

4.1.3.2.1 キーワードの羅列と中分類

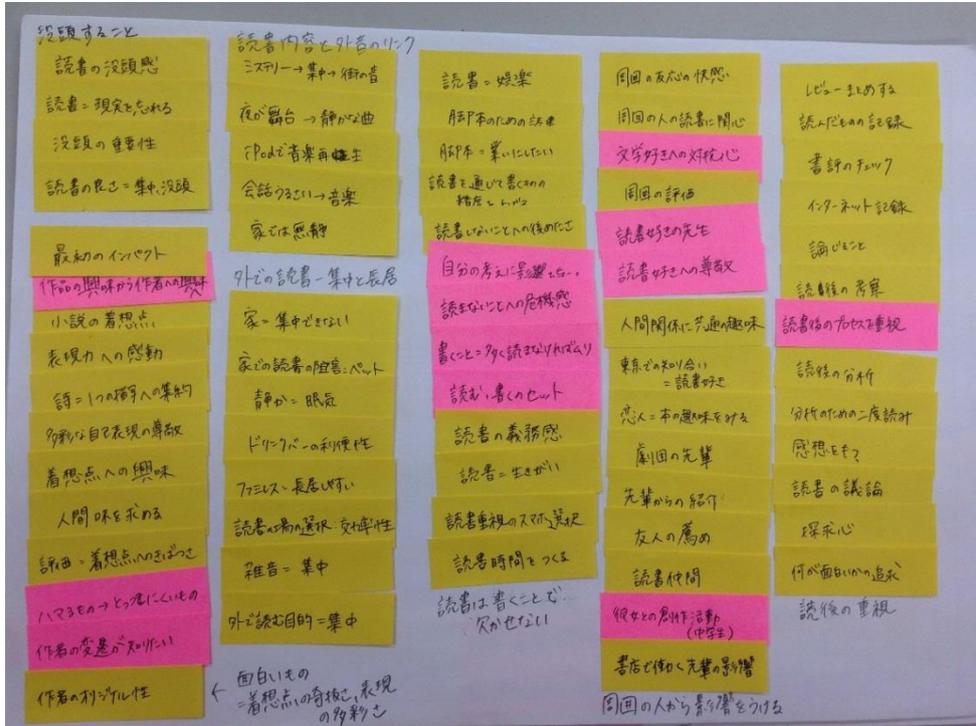


図8 Cさんのキーワードの羅列と中分類1

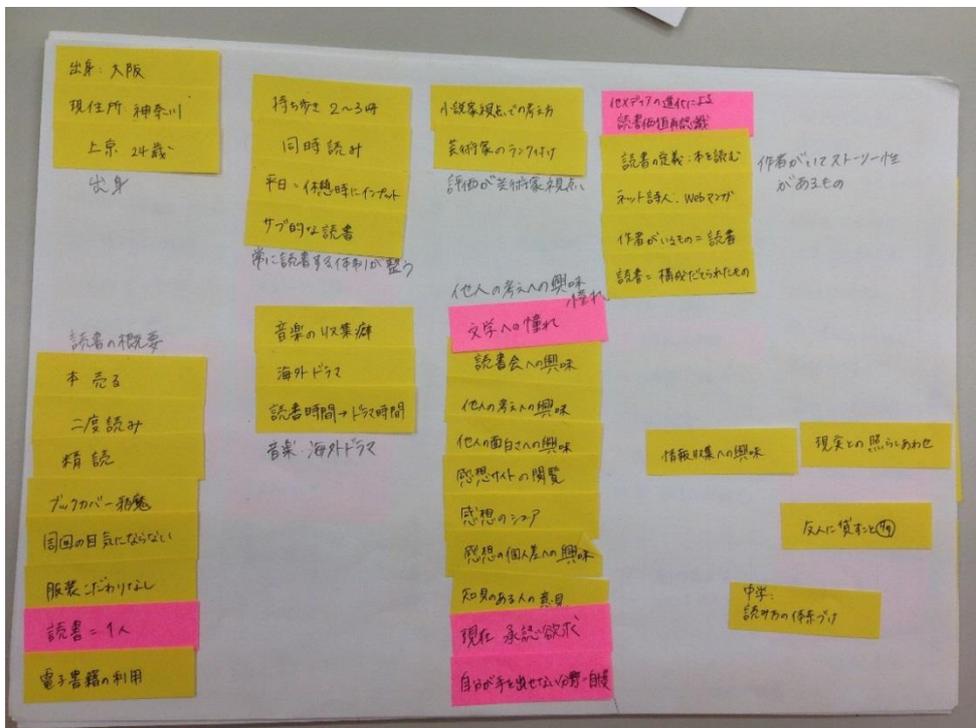


図9 Cさんのキーワードの羅列と中分類2

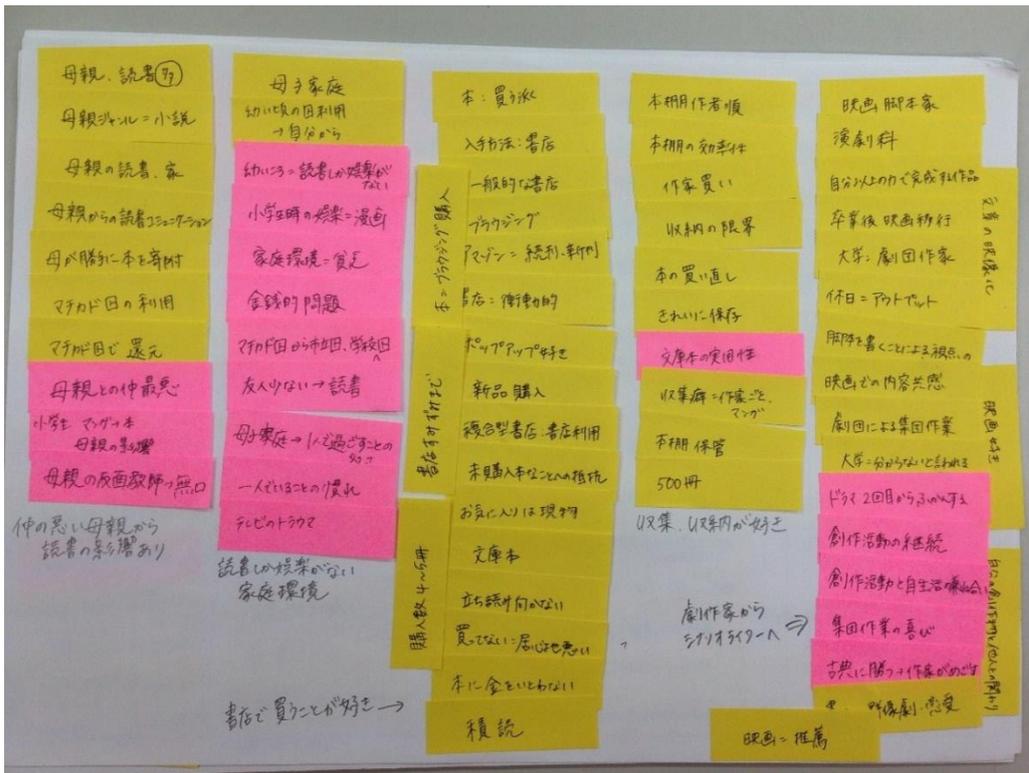


図 10 Cさんのキーワードの羅列と中分類 3

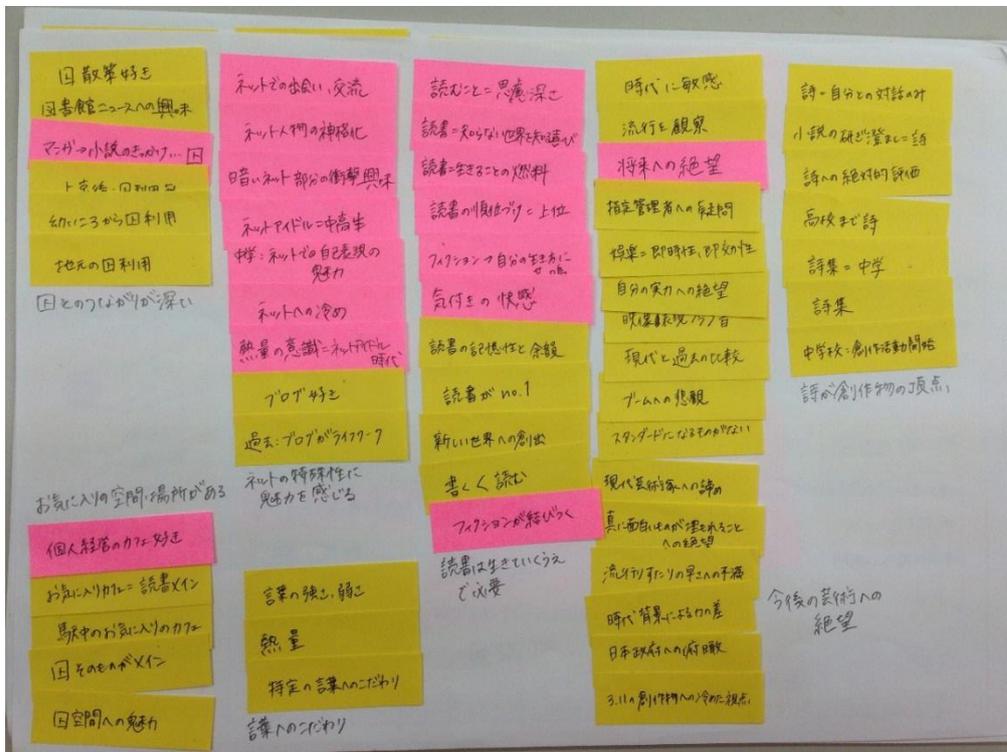


図 11 Cさんのキーワードの羅列と中分類 4

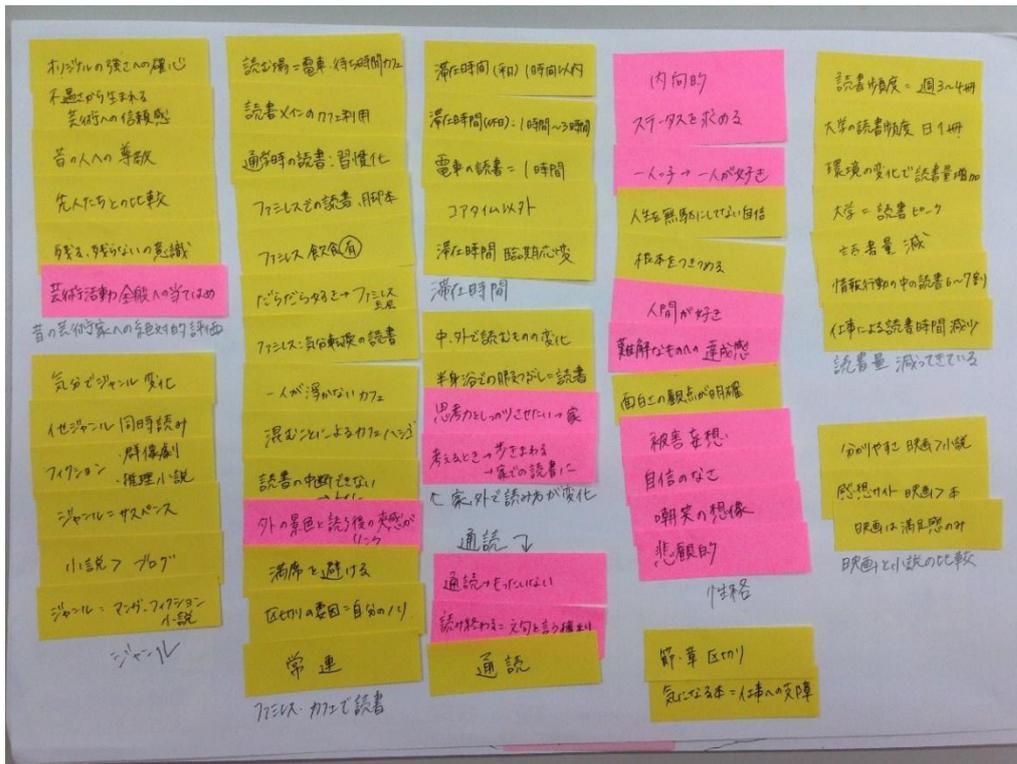


図 12 Cさんのキーワードの羅列と中分類 5

4.1.3.2.2 中分類と大分類、その関係性



図 13 Cさんの中分類と大分類、その関係図

4.1.3.2.3 KJ 法のまとめ

母子家庭で育ち、読書しかすることがなかった C さんにとって、読書は他人の考え方を知れるツールの一つであった。他人の考え・表現力に読書を通じて感銘を受けたことをきっかけに自分も表現者として創作活動をするようになる。現在、映画の脚本家として自己表現をしている C さんには、創作者として読書を見る側面と、読書好きとして読書を見る二つの側面が見られる。

創作者として見る側面では、「どうしてこんなことを思いつくのか」という着想点や表現力で各作品を見ている。Web マンガやネット詩人の作品なども読書の定義に入れているのは、中身に焦点があたっているからと考えられる。創作者として現代の作品と過去のものの評価し、比較せずにはいられない。また、読書では、読んだだけで満足することではなく、その後のプロセスを重視している。考察する、感想を持ちレビューを書く、人と議論するなど、読書後に内容を深めていくことは創作者という立場が影響を与えている。また、分析しながら読書をしたときや、書いたものを自分で見直したいときは家に帰って読書等を再開することから、家での読書が創作者としての読書と捉えられる。

一方で、読書好きとして読書を見る側面は、本の買い方や保存の仕方で見ることができ。自分の好きな本は手元におけるよう購入し、古くなれば買い直しをする。また、本棚は作者順に並べており保存形態にもこだわりがあるように感じる。本に留まらず好きなものは集めたいという収集癖的な一面があり、きっちりとはまっすぐにハマっていることに魅力を感じているところもあるようだ。また、没頭感は読書でしか得られないものであり、生きがいであると語っている。このように、読書がよいことであるという「読書教」的な一面も見られる。また、没頭したいものは外で読むことが多い、など外で読むときは読書好きとして単純に楽しむ様子が見られる。このように、創作者として、読書好きとして、という二つの側面から読書の間を使い分ける様子が見られた。

4.1.3.3 C さんのまとめ

読書は自分の生きがいであり、燃料であると語る C さん。この燃料という言葉には、自分が創作活動を続けていくための土台という意味が込められている。自分の考え方や生き方の土台はフィクションから得られると考えており、他人の発想力や考えを知ることができる小説や詩を好む。また、自分の脚本のために読む、読書そのものに価値があると思い読む、自分の気分に合わせて娯楽的に読む、など「知識の取得」「娯楽の享受」「読書そのもの」という 3 つの価値観を持っていることが分かった。

読書から他人の価値観を吸収しているが、親や恋人、劇団の先輩など自分と関わりがある人から直接読み方や書くことへの影響を受けているところがある。また、世間の風潮に敏感で批判する姿から、C さんは「人」そのものに興味があることが分かる。この「人」が好き、という考え方が彼の創作活動や読書行為の根本にあると考えられる。

読む場所は創作者としては家、読書好きとしてはカフェという傾向が見られたように、自分のスタンスによって場が変化する様子が見られる。また、フィクションの媒体にはこだわらないが、情報に関してはネットよりも雑誌のほうが受取やすいなど、無意識に読むジャンルと媒体を使い分けている様子もみられた。自分の読者としてのスタンスと得たい価値観、それと読む媒体・読む場所が使い分けられ読書スタイルが自分なりに体系化されていることが分かる。

Cさんの読書は、習慣的に読書をしてきた幼いころからの経験と、自分の夢を達成する現在の目標から成り立っており、それらが今の価値観と読書スタイルに影響を与えていると言えよう。

4.1.4 Dさん

Dさんは40代前半の女性で、現在はIT会社の事務として育児をしながら働いている。首都圏出身の都内在住。既婚者で、小学生と未就学児の子どもをもつ。四年制大を出ており、心理学を専攻していた。

4.1.4.1 インタビュー内容の分析

A) 読書の価値観

Dさんはここからが読書である、という自分なりの読書の定義はなく、マンガや雑誌も読書に含まれていた。一方で、インターネット上の情報や新聞は読書に入らない。また、勉強に関しても大学の勉強で読むものは読書に含むと考えており、義務か自分から読むかが読書の線引きになっていない。Dさんにとって、冊子体や本の形態をしているものをじっくり読むことが、読書と判断する基準になっていると考えられる。

また、雑誌と漫画が読書に入るか否かという質問をした際には、「漫画が読書なのに、なぜ雑誌は読書じゃなのか。」と言うなど、疑問を持っていた。

あ、でも雑誌はほとんど読まないんだけど、見るときは結構読んじゃうので、だいたい美容院でしか読まないんだけど(笑)でも結構文章を読んじゃうので。

というように、じっくり文章を目で追うかは彼女にとって読書か否かの指標になっている。

毎日出退勤時に電車で読書をするなど、習慣的に読書をすることが身につけている様子がみられるが、

なかったらなかったでどうにかなりそうです。案外。

とさっぱりした様子が見られる。しかし、

んー。なんだろ、私とくに趣味があんまなくて、読書は趣味と言えるかもってくらいなんですけど、その面でも、なんだろ、なんて言うんでしょうか。趣味として楽しめるもの？

というように、他に趣味がなく「のめりこむものがほしい」という気持ちから唯一の趣味である読書に自分なりの価値を持っているように見えた。

読書はどのようなものか、と尋ねた際には「自分の気持ちを楽しくさせてくれるもの」と答えており、「娯楽」を求め読書をしている様子が見られた。また、読書が楽しいものであると考えるようになったのは、社会人になり共通の読書の趣味を持つ友人と話したことがきっかけと述べており、他人と読書について話し合うことも彼女にとって読書をする意味の一つだと考えられる。

読むことを他人に強制しようとは思っていないが、自分の夫がまったく読書をしないことに関しては、

ああ、うん。なんで読まないのって聞いてみても、なんか時間がないとか言うんだけど、そんなん適当に時間なんてつくれるでしょって。(笑)まったくないはずはないからね。とは思いますが。

と言うように、読まない人に対し疑問を持つところが見られた。

また、「読書=いいこと」という世間の通念に対しては、

そうねー、まあ全然しないよりかした方が、色々、本によって、色々人の見方が分かったりとかっていうのもあるし。まあでもそれで本読んだ方が絶対いいとは思わないですけど。自分の子どもとかには全然読まないよりある程度読む子には育ててほしいってのはありますね。

結構本で人の気持ちとかどう感じるのかとか記されてあったりするじゃないですか。普段しゃべってるときはそういう気持ちを出さなくても本では書いてあったりするから、そういう気持ちを学んだりできるのかなって。

というように、読書から得られるものの価値について意識している側面はあり、読書がよいことであると考えている。「娯楽」として捉えている読書だが、その娯楽から享受できるものを理解し、自分の家族に伝えたいという意思が見られた。

B) 価値観の形成過程

ライフストーリーA

読書を改めて楽しみ始めたのは社会人になってからであり、読書量が多い現在を除けば小学生のころが最も読書をしていたと語った。当時は「みんな読んでいたから」という理由で手を出した江戸川乱歩シリーズに夢中になった D さん。

なんだろうー、覚えてないです。なんかでもその時代はみんな読んでたから。みんな読んでいたからそれで私はすごくハマって。んー、結構みんな読んでいた気がしますね。

みんなそこまではハマってなかったと思うんですけど、なにかしら 1 冊²⁵くらいは読んだことある程度だったと思うんですが。

というように、周囲の人に倣って始めたことに自分がのめり込んでしまった様子が見られる。このころから周囲の友人たちの読書スタイルに影響されている部分が見られる。

中高生になると、部活等他にやることができ忙しくなったことをきっかけにあまり読書をしなくなったという。放任主義の両親からは読書や勉強のことに口を出されることはあまりなく、自由に自分のやりたいことをやってきたと述べた。

ライフストーリーB

大学に入学し、通学時間に少しずつ読書をするようになった D さん。現在が一番読書をしている時期だと語るが、そのきっかけは共通の読書趣味をもつ友人と話したことだ。

えーと、同じような本、を好きな人が周りにいたのを把握した、みたいな。それで借りるようになって、ですかね。

というように、「偶然同じ本が好きだった」、という他人の影響が読書をするきっかけになっている。

自分が面白いって思ってるものを同じく面白いと思っている人は、あの一なんていうの、他に読んでる本も間違いなく面白いだろうと思って借りてますね。無駄なお金を使いたくないというか、買って失敗したくない。そんな感じです。

共通の読書趣味を持つ人なら間違いなく、という気持ちから友人の「おススメ」を信頼し読書を楽しむ傾向がある。友人の思考を通した読書をするため、会ったついでに直接借り

²⁵ 江戸川乱歩シリーズをなにかしら 1 冊はみんな読んでいた、という意味

ることが多く、「間違いないものを読みたい」という気持ちが彼女の読書スタイルを形成していると考えられる。図書館で本を借りることもあるが、それも友人が薦めた作者の人を中心に借りることが多いなど、受動的な選択をしていた。

また、社会人になって家族が読んでいることを意識するようになり、両親と読書コミュニケーションをする様子が見られた。

んーと、なんか私が時代小説とかを読んで、たまたま父も時代小説を読んでいるのを見て、こういうのも面白いよって薦めてみたりとか。

ライフストーリーAの時点では、親が読書をしていたかどうかは覚えていない、と述べていたが、自分の読書量が増えたことで両親の読書をしている姿が自然と気になるようになったと考えられる。

Dさんは、本を借りて読み、その感想を述べるまでが一連の読書のプロセスとなっている。他人の存在が自分の読書のきっかけになったために、「他人のことを意識する読書」が彼女の読書スタイルとして確立されている。

C) 読書そのものに関すること

同じ読書の趣味を持つ友人のおススメから新たな本に出会っていく方法をとるDさんは、自分で本を買うことがほとんどないことから家に本棚がなく次々と新しい本を読む傾向にある。手元にある本を読み終わった場合は図書館で昔の本や友人に薦められた作者の本を借りている。週に2~3冊読書をしており、最近は読んでいない日がない、というくらい読書は習慣化されていた。

読書をする場としては、電車、家、カフェがあげられた。

あー、んー、そうですね。家では...そんなに読む時間がない。なのでどうしても通勤時間とか、あとそうですね。

というように、電車の中での読書は単なる暇つぶしではなく、家で読書できない時間を電車で補完しているのではないかと考えられる。また、電車での読書に関して「邪魔されずに読める」と述べており、電車の中の環境を好んでいる。

カフェでの読書に関しては、待ち合わせの時間にすることが多いが、待ち合わせ時間よりも早めに行って読書時間を確保する姿が見られた。カフェに関しては特にこだわりはなく、あくまで読書をするのがメインで場を選択していることが考えられる。

電車を降り、会社に入るギリギリまで読書をしながら歩くことや、待ち合わせ時間ギリギリまで本を読み続けることが多く、自分の時間の許す限り読書をしておきたいという意

志が見られた。

また、借りた本に対し感想を言わなければならないという使命感をもっており、一度読み始めた本は必ず最後まで読むようにしている。年に2〜3回しか会わない友人には、一度に10冊ほど本を借りることがあるが、それも全て必ず読み終わって返すと語った。読んだ本に関してはメールで読んだことを伝え、近況報告を含め本の感想を述べており、定期的に自分の読んだ本に関して読書コミュニケーションをとっている様子が見られた。メールで読書について語り合うことも「楽しい時間」と述べており、Dさんにとって読書し、人と共通の本について語り合うことが大切な趣味になっていることが分かる。

2人の子どもがおり、読書教育をするつもりはないと語ったが、会社の昼休みに図書館に立ち寄り、子どもの本を借りたりするなど、読書にふれさせる機会をつくるどころが見られた。

D) その他

1回目のインタビューの終わりに、筆者とお互いのお薦めの本の話をしており、2回目のインタビュー時には筆者の薦めた作家の本を読み感想を聞かせてくれた。本の貸し借りをする友人だけではなく、読書をする人と会えば、新たな本と出会う機会を積極的につくっていることが考えられた。

親は放任的で、読書や勉強に関して口をだされことはあまりなく、両親の行動に従って趣味や勉強をしたことは特にない。しかし、

ああ！うん、えっとね、そういう意味では、なんか、大人になって、あの自分も働いてたほうが、奥さんがね。うちのお母さんも働いてるからすごい元気なのね。働いているほうがいいなあって(笑)なんかやっぱ外に出てたほうが、ねえ、元気にいられるのかなって、そういう点は見習ってるというか。

と述べているように生活習慣や生き方については自分の現在と結びついている側面が見られた。

4.1.4.2 KJ法の結果

4.1.4.2.1 キーワードの羅列と中分類



図 14 Dさんのキーワードの羅列と中分類 1



図 15 Dさんのキーワードの羅列と中分類 2

4.1.4.2.2 中分類と大分類、その関連性

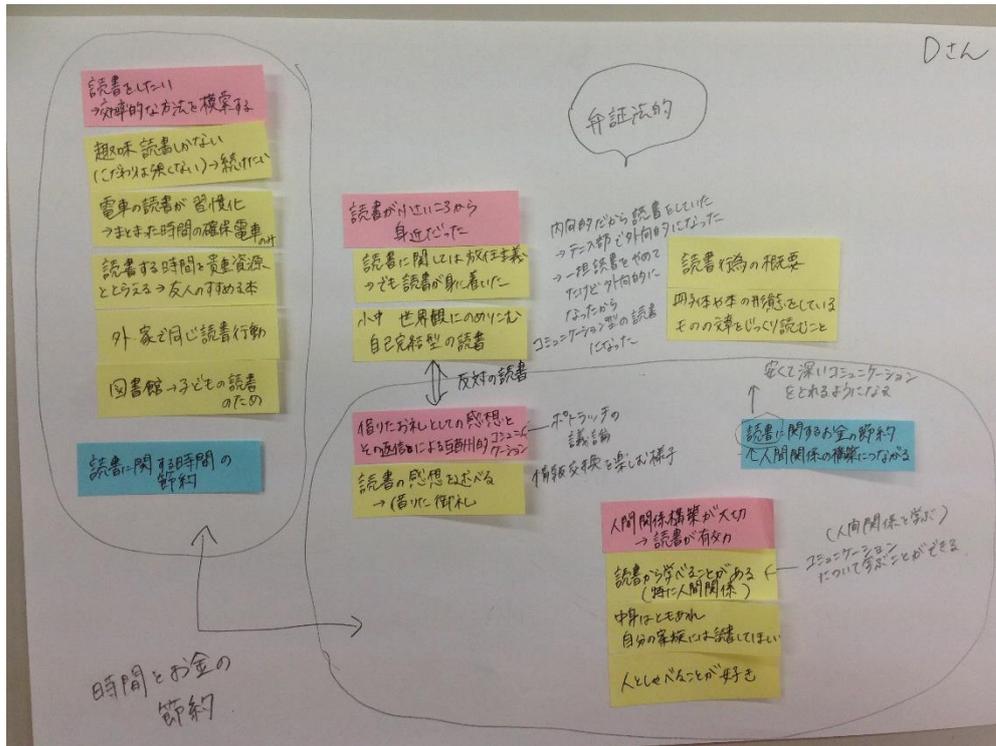


図 16 D さんの中分類と大分類、その関係図

4.1.4.2.3 KJ 法のまとめ

子育てと仕事を両立させている D さんは電車や待ち合わせの時間などに読書の時間を組み込むようにしている。駅から会社に着くまで歩きながら読むなど、単なる暇つぶしの読書ではなく読む時間を捻出している様子を感じられた。また、読む本はほとんど友人から借りた本であり、読書をする時間を貴重資源ととらえ面白いものだけを読みたい、という意思を見ることができる。趣味が読書くらいしかなく、続けたいと述べる D さんは読書に関して効率的に本までたどり着き、読む時間を捻出していることから、読書に関する時間を節約していると考えられる。

読む本の多くは同じ読書趣味を持つ友人から借りているものだが、読んだ本の感想を必ずメール等で述べるようにしている。自分では本を所持しておらず、ほとんど借りている D さんにとって、感想を言うことは社会学者であるマルセル・モースが論じた「贈与論」で述べられている受領の義務、返礼の義務²⁶に通ずるところがある。このように、借りた御礼

²⁶ 社会学者であるモースは、贈与論の中で現代の経済社会に見られる「交換と給付」の姿勢は原始社会においても見られると述べており、この全体的給付体系の最も純粋な形態はアメリカの部族間で行われた「ポトラッチ」であると述べた。ポトラッチには贈与の義務、受領の義務、返礼の義務という 3 つの本質があり、この義務を守らないことは礼儀に反し受け取る相手の地位を失うことにつながる。D さん自身も、「借りたからには感想を言わな

としての感想とその返信による互酬的コミュニケーションは人間関係の構築にもつながっている。また、彼女は読書から「人の気持ちをを知る」ことができると感じており、読書をするのが人間関係構築に有効な手段の一つであると感じている。このように、Dさんは人間関係構築を重んじている側面があり、共通の趣味を持つ友人から本を借りることは構築にもなるうえに読書に関するお金の節約にもつながっている。人から本を借りることで、お金と時間を節約することにつながり、良い人間関係が構築でき、また新たにより読書に関する情報を得るというサイクルができていた。

さらに、彼女は小学生のころ盛んに読書をし、中学生頃からは読書から離れ、社会人になった今読書熱が再熱している。小学校のころは今より内向的だったと述べあまり感想を人に話さず自己完結型の読書であったDさんは、運動部に入りいったん読書から離れていた。現在はコミュニケーション型の読書をしていることから、いったん読書から離れ、人とよく話すようになり外交的になったことが、彼女の現在の読書スタイルの形成に関わっていると考察できた。

4.1.4.3 Dさんのまとめ

自分の数少ない趣味の一つとして読書を捉えているDさんは、定期的に読書をするようになったのはつい最近であり、友人のお勧め本を中心に毎日電車で読書をしている。友達から借りて読み感想を返すというスタイルは、ただ読むだけではなくその後の友人とのコミュニケーションの促進になっている様子が伺え、単なる趣味だけではなく「関係を築くための読書」と捉えることができる。読書から人間の気持ちを学ぶことができる、と述べ、読書そのものが人間関係構築に影響を与えるものだと考えていることから、コミュニケーションと読書は彼女にとって切り離せないものだろう。

また、上記の3人と比べると読書に対する熱意は希薄に感じられたが、読める時間はギリギリまで使って読むところや、友人に読んだ本について逐一連絡をとっていることから、「読書の時間はとりたい」という気持ちは熱く、時間を捻出してということが分かった。友人に本を借りることがほとんど、と述べたがそれは探す時間の手間を省くことやお金を節約することにつながり彼女にとって効率的な読書体系を築き上げている。

自己完結型の読書からコミュニケーション型の読書に変化したのは、彼女の内向的だった性格が「人としゃべることが好き」という外交的な性格に変化したことが関係していると考えられた。Dさんにとっての読書の価値観は「娯楽の享受」であり、社会人になってからの友人との出会いが、幼いころの習慣を思い出させるきっかけとなり、現在の読書スタイルを作り上げたと言えよう。

ければならない」と考えていることから、ここでは返礼の義務を「本の感想」を述べることではたしていると考えられる。

マルセル・モース. 贈与論. 勁草書房, 1962, 326p. (参照 127 ページ)

4.1.5 Eさん

Eさんは50代前半の男性で、現在はIT企業でプログラム関連の仕事をしている。都内出身の首都圏在住。四年制大を出ており、当時は工学の勉強をしていた。

4.1.5.1 インタビュー内容の分析

A) 読書の価値観

Eさんにとって、読書は、「ちょっと現実の世界とはちがう」というものであり、読書が気分転換になっている。「娯楽」を求め読書をしており、ビジネス書や仕事に関わる本は読書に含まれない。また、現実とは違うところに行けるもの、という点においては新書を読むことは読書とは微妙なラインであると述べた。

んー、気分転換にもなるし、なんかその仕事なんだりを考えてるのを打ち切るっていうか。

と言っているように、読書をすることで自分の気持ちの切り替えを行っている。読書を娯楽として楽しむと同時に、普段の生活を忘れ違う世界を楽しむなど一種の「逃避」の様子が見られ、Eさんにとって読書は自分の世界にこもることができるものであると考えられる。

「読書=いいこと」という世間の通念について尋ねたところ、

まあたしかにちょっと気持ち悪いですけどね。土曜の王様のランチとか。あれは本当に気持ち悪いです。

薦めすぎだし、作家がいかにも善人みたいな感じでやってるじゃないですか。あの人たち、キチガイですけどね。(笑)

というように、作家が持ち上げられすぎる風潮を嫌う様子が伺えた。本そのものを褒めるのではなく、作家を褒めることに疑問を感じており、着物を着ている作家に対して「かたちから入ってるんじゃない」と言う場面もあった。

読書は趣味だから、という気持ちが強く、

自分の趣味で、趣味なので、趣味なのでいいとか悪いとかって。罪にならないといいことだって、別に、ねえ。...理解できない、不良だとか言われた時期もあったんでしょけど。別に夢中になることはなんでもいいと思います。それを押し付けるのはどうかと思いますけど。

世間的に「読書をしたほうがいい」という気持ちは強くない。読書は「自分が経験してい

ないことの中身を知れる。歴史的な本を読んでいると、どうやって成功したのか、なんで失敗したのかが分かる」というなど、Eさん自身は読書をいいことである、と認識しているが、息子や娘にそれを強制させることはない、と述べた。

読書に限らず、騒がれる世間のニュースに流される人びとに疑問を覚える傾向があり、自分で考え選択し、夢中になることを見つける、という考え方が彼のスタンスにあり、それが読書の価値観にも影響を与えていると言えよう。

B) 価値観の形成過程

ライフストーリーA

小学生から少年野球をはじめ、中学まで野球部に入っていた E さん。国語教師からの薦めで読書をするようになった。

ええと、中学校の1年か2年のときに国語が悪くて。今でも覚えてるんですけど、細井先生って人が国語の自分の担任だったんですよ。お前国語の成績が悪いから本でも読めって薦められたのが星新一だったんですよ。お前だったらこれ読めるって。それがきっかけです。

この薦めをきっかけに星新一に夢中になり、読書が楽しくなったと語った。

高校入学後は友人の薦めで歴史小説を読むようになり、電車の待ち時間が長かったことから、毎日のように電車のホームや電車の中で読書をするようになった。きっかけは人の薦めであるが、読書の習慣化そのものには通学時間の暇つぶしが関係している。高校時代には友人以外にも学校の司書と仲良くなり、本を紹介してもらうなど他人を通して本と出会うことが多かった。

Eさんが子どものころは両親が読書をしている記憶はあまりなく、特に薦められたこともなかったという。

また、中学入学後は、「完全に内向的」になり、一人で過ごす時間が増えたと述べた。

自分は上に姉がいて、下に妹がいるんですけど。で、たいてい2人って喧嘩してるんですよ。で、どっちかにつくとまずいじゃないですか。まずいっていうかついたんだけど、たぶんのそのときの気分に応じて。そうするとどっちかからすごい怒られてそれですごいめんどくさくなった。

というように、家族関係が内向的になった理由の一つであると考えている。高校にあがるにつれてどんどんしゃべらなくなっていったと述べ、男女グループで話していたときには「よく黙ってられるね」と感心されたことがあると語った。

確かに一人で考えてるのが好きなんですかね。っていうのはあるかな。本読んだりとか。

というように、一人で考えることが好き、という E さんの性格が読書にのめり込む要因の一つになったと考えられる。

ライフストーリーB

現在は会社の通勤時間の中に毎日読書をしている。往復 2 時間の通勤時間の間、読書をしていることは、高校時代の通学時の読書が習慣化されたものだと考えられる。

また、社会人になり実家を出てから両親が読書をしていることを知ったと述べた。自分の家族に関しては、読書をしている妻や娘とはたまに読書コミュニケーションをしている。唯一読書をしない息子に関しては、

息子はあまりできがよくないので（笑）勉強のために読んだがいかもよとは言っています。ただ、読んだから成績がよくなった実績がないので。あまり、なんだろ。ちゃんと薦めません（笑）

というように、読書をすることを薦めてはいるものの強制はしていない。あまり読書を薦めないことには、E さん自身が両親に自由な教育をされてきたことが関係していると考えられる。「夢中になれるものはなんでもいい。」と述べており、現在は息子の野球について口を出したりや応援していた。

また、もともとは本を買う派であったが、東日本大震災をきっかけに図書館で借りる派になったと語った。

えっとー…震災の前まで。震災で、死ぬよって言われて（笑）。あの一、売ったのがきっかけです。

かみさんに言われました。これ崩れたら死ぬよって（笑）

このことをきっかけに、それまで持っていた本をほとんど売り、本棚を解体したという。現在は家に本がないため、E さんは本を借りるようになり、妻は買っては売り、を繰り返すようになったと述べた。このように震災が E さんだけに限らず家族全員の読書スタイルに影響を与えたと考えられる。

C) 読書そのものに関すること

Eさんは歴史小説やミステリーなどフィクションを好んで読んでいるが、野球に関連する書籍に興味を持つ場面が見られた。

新聞でその、...高校野球好きな人のコラムみたいなのがあって、それでなんか埼玉県の松山高校っていうのがあるんですけど。公立高校で結構いいところ。そこをモデルにしたやつがあるとかで。じゃあ読んでみようかってなって読んでみたら結構面白くて。

読んだ野球関連の本を息子に読書感想文用にどうかと薦めるなど Eさんと息子の共通の趣味である野球を通して読書コミュニケーションをとる様子が見られた。

あ、えっと。小学校5年生のときに（息子が）道徳の時間にえっと、その野球漫画をとりあげてるページがあったんですよ。で、たまたま（私が）それを見たら、この大人になって大人がいた全10巻、筆笥の奥のほうにしまってたんで引きづりだして。あ、これなら持ってるって。で、（息子が）夢中になった。で、なんか野球に急にに関心を持ち始めてた。

というように、息子が野球を始めるきっかけは、Eさんが持っていた漫画であることが分かる。このほか、息子と一緒に「猫ピッチャー」という野球関連の漫画を読むなど、一緒に読書をするという姿が息子にのみ見ることができた。

読書をする場所としては、電車、カフェ、家があげられた。電車を読むことに関しては、上記でも述べたように習慣化されていたが、カフェに関しては

ああ。...多少ありますね。まあ自分の部屋がないので静かなところがないっていう感じで。

というように、自分の部屋がないことが関係している。高校から始めたギターを弾かなくなったのも「時間と部屋がないから」と述べており、自分が一人で趣味に打ち込める場を外に求めていることが考えられる。

電車を読んでいてキリが悪いとき、待ち合わせのときなどに駅から近い静かなカフェで読書をする。カフェの周囲の騒がしさから集中が途切れることがあり、電車では周囲の騒がしさのシャットアウトのために音楽を聞きながら読書をするとのことだった。自宅に自分の趣味を楽しむ場がない分、自然と外で読書をするが多くなるが、自分が求めている静かな場所がなく、音楽等で求める場所を作りだしていると考えられる。

また、スターバックスコーヒーなどメニュー数が多いカフェを避ける傾向にある。

スタバにいる人ってなんで思う人²⁷が多くて。例えば郊外にもあるじゃないですか。外にあるじゃないですか。カフェの外側にある。で、え？とか思って。埃っぽくないのかな、とかなにを主張してるのかなとか。まあ埃ですね。珈琲に入るだろみたいな。

という発言から、スターバックスコーヒーを利用する人たちに対して疑問をもっており、その偏見もカフェの選択に影響を与えていた。現在はドトールをよく利用している。

また、テレビが好きで家では録画したバラエティを見ることが多く、「つい家だとテレビを見てしまう」と述べるなど家で読書をしない要因の一つとなっていた。王様のブランチは上記のように「あまり好きではない」と述べているが、本に関連する番組を好んでみる傾向にある。現在夢中になっているのは、Eテレの「100分 de 名著」であり、

そう、面白いですよ。あの番組で夜と霧、だっけな。知ってますか？夜と霧かな？ちょっと書いた人の名前忘れちゃいましたけど、アウシュビッツかなんかにいて生き延びた人の話があって、それを読んでみようと思って読んでます。かなり時間かかっちゃいましたけど。

と述べており、実際に紹介された本を手にとっている。友人や先生に薦められジャンルが定着する、図書館のおススメコーナーにあったことをきっかけにミステリーを読みだす、テレビで紹介された本を読み始める、などお薦めや紹介されたものを中心に読む本を選ぶ傾向にある。また、そもそもの読書の定着化も国語の先生の薦めがきっかけとなっている。このことから、他人の紹介ありきで本を選択する傾向があることが分かる。

読んだ本はフェイスブックに記録しており、読書仲間として仲のよいDさんにのみ、それを公開している。

いや、いつこれ読んだかって覚えておくのに便利だなーと思って。
つまんなかったときだけつまんなかったって。二度と読まないように。

基本的には一度読みで次々と新しい本に手を出すEさん。あくまで自分が読んだ「記録」として利用しており、レビュー等は書くことが嫌と述べた。自分が面白くない本と思う本にのみ「つまらなかった」と記述するなど、もう一度手を出さない目印として利用していた。

²⁷ 「なぜスターバックスコーヒーを使うのか、と思うような人が多い」という意味

なるべく本をきれいに保ちたいと考えており、書き込み等は一切しない。多少は他人に見られたくないという気持ちもあるが、メインは本を傷つけないという理由からブックカバーを使用しており、本を借りることが多い現在は、図書館の本であっても文庫カバーをつけて読んでいると述べた。

また、本・音楽などで自分が好きなアーティストや作家のものは集めるなど収集癖的な一面が見られた。

あー、だからやっぱり作者にもよるんですけど、作者にこだわって全部読もうって思ったりします。

というように、歴史小説を高校時代から読み続けている背景には、自分が好きなものにこだわり読んでいきたい、という気持ちがあると考察できる。

D) その他

自らのことを「ひねくれ者」と言い、流行りもの、話題性があるものを避ける傾向が見られた。話題になりすぎた本はあえて読まない、というところがあり、「ハルキスト」の話聞き、村上春樹は絶対に読まないと宣言するなど、批判する場面も見られた。インタビューでは、読書に限らず安保改正に関することなどメディアに流され自分で判断しない人びとを批判しており、自分で考えない人びとへの疑問を語った。

ん、あと有名な人がツイッターとかで、まあなんも考えてないんでしょうけど、っていうのが透けてみえてやだ(笑)。自分は賛成でもなんでもないんですけど、ちょっと悩んだほうがいいんじゃないかなって。...結局強引に決めて行くのが気に入らないので。...もともとそういう意思なり思想なりがあってやってるんじゃないのっていうのがある。気に入らなくてやってる人っていうのも多いんじゃないかなーって。

安保法制デモに関しては上記のように述べるなど、特に政治に関しては世間の風潮に合わせて自分の意思で行動しない人びとに対し批判している。彼の中では「自分の意思で行動する」ことが重要であり、その考え方が「読書に限らず夢中になれることを見つければいい」という家族に対する教育方針につながっていることが考えられた。

4.1.5.2 KJ法の結果

4.1.5.2.1 キーワードの羅列と中分類

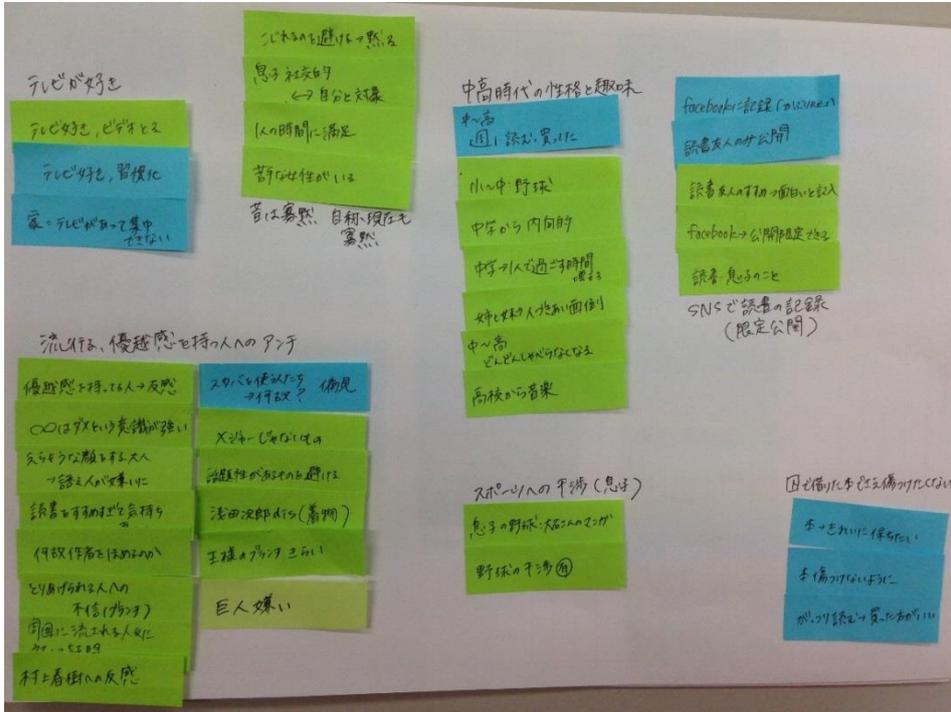


図 17 Eさんのキーワードの羅列と中分類 1



図 18 Eさんのキーワードの羅列と中分類 2

4.1.5.2.2 中分類と大分類、その関係性

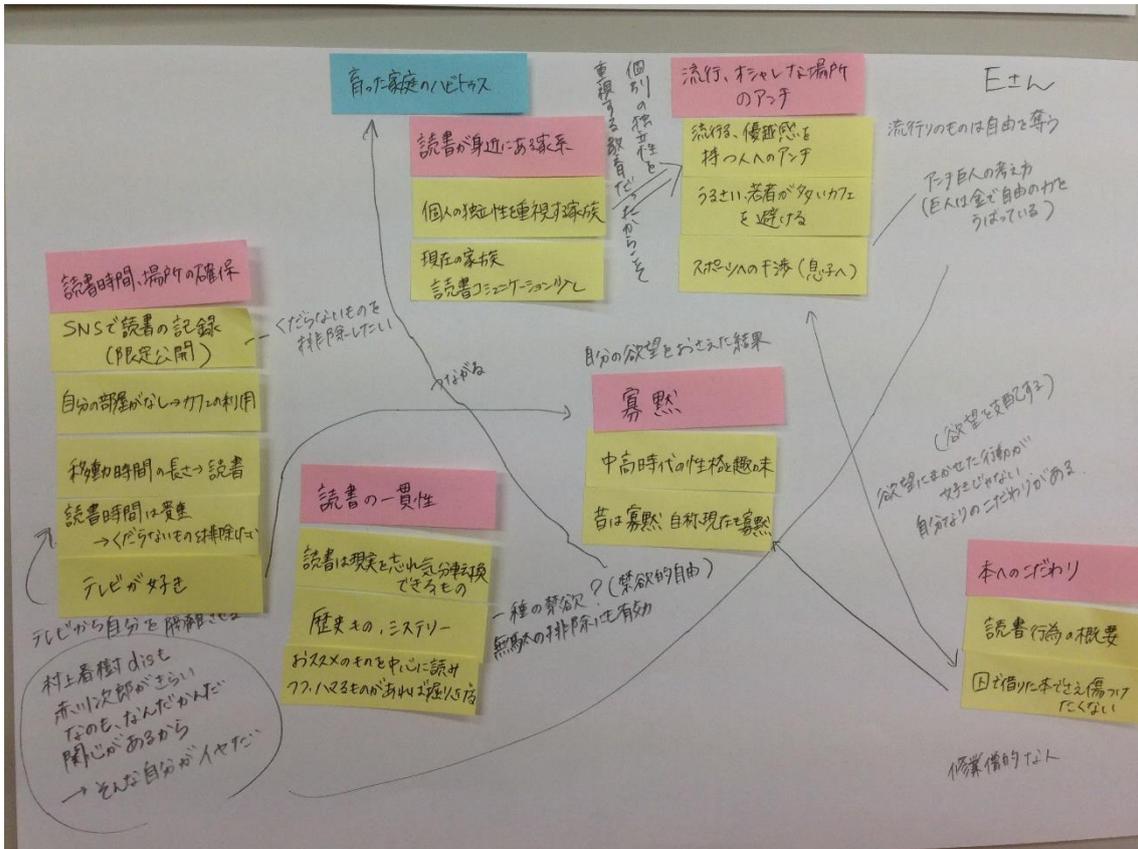


図 20 E さんの中分類と大分類、その関係図

4.1.5.2.3 KJ 法のまとめ

E さんは、比較的自由的な教育を受け、勉強やスポーツなどあまり親から口出しされなかった。個別の独自性を重視する家族のもとで育ったからこそ、現在の自分の家族においても「夢中になれることを見つければよい」という子どもの独自性を尊重した子育てをしてきた。そのような独自性を尊重する家系で育ったため、自分で考えることをやめ人びとの思考の自由を奪う流行りのものへのアンチをするのだろう。基本的には息子に自由にさせている、と述べたが、野球部に入った息子を巨人ファンにさせないように誘導するなど、自由と離れた発想をするものを嫌う傾向がみられた。

流行りものに対してアンチな気持ちを持つ一方でテレビが好きであり、家だとい見してしまうという理由が、電車での読書やカフェの利用を促していることが考えられる。このことから E さんには自分の欲望を支配したいという気持ちがあり、その気持ちが本来は興味がある流行りものを避けることにつながるのだろう。このような欲望の支配が彼の性格の一つである寡黙さにも関連していることが考えられる。

仕事をしている傍らで読書をしているため、効率的に読書をしたいという気持ちが D さ

ん同様にあり、読後に SNS に、つまらなかったもののみ記述し二度と読まないようにするなど、くだらないものを排除したいという意思が感じられた。

このようなくだらないものの排除は、彼の読むものの一貫性と通ずるところがある。おススメのものを読み、シリーズものを好む彼の読書スタイルは無駄なものを排除し自分にとって確実なものだけを選んでいるといえよう。

個人の独自性を重視する家族のもとで育ったからこそ、流行りものに流される世間にアンチ的な気持ちをもっている。それにも関わらずテレビを見ることは、そのような流行りものに本当は興味関心があるからと考えることができるだろう。彼にとって読書とはそのような流行への興味を抑える、「欲望を支配する行為」であり、読書をするのが一種の禁欲的自由を生み出しているのではないかと考察できる。

4.1.5.3 E さんのまとめ

E さんは高校時代から歴史小説を読み、電車で読むことが習慣化されている。「娯楽」のために読書をする述べているが、読書をすることで仕事のことから一旦離れ、現実の世界と違うものを味わう、など「娯楽」だけではなく「逃避」を求めて読書をしている傾向が見られた。現実と違うところに行く、という読書の目的が読むジャンルに影響を与えていると考えられる。また、読む場所に関しては部屋がない、「テレビがあるとついそっちを見てしまう」という理由から電車やカフェなど一人の時間に読書をする。このように読む場所に関しては、家族がいることによる環境の変化や、自らの欲望をおさえ流行りものに対して敏感なメディアから離れようとしていることが関連していると考えられる。

共通の趣味をもつ息子と野球に関連する本を読むことや、家族に言われ本棚を解体するなど、自分の家庭の存在は E さんの読書スタイルに影響を与えているといえよう。自分が育った家系にならい、基本的には自由な教育方針をとっているが、自分のアンチ球団から息子を遠ざけるなど、自由と離れた発想をもつものには流れないようにする側面もみられた。野球だけでなく、作家やオシャレなカフェ、図書館など流行りもてはやされるものにアンチ的な気持ちを持っている。この背景には、個別の独自性を重視する家系で育ち、現在の家族にもそれを引き継いでいることから、各々の自由な発想を奪い考えることをやめさせてしまう「流行り」に対して不信感を持っていることが関連している。

E さんにとって読書の価値観は「娯楽」であり、その背景には中学生のころから通学時に読書をしていた習慣化があると考えられる。家庭をもち生活スタイルや環境が変化している現在は家族からの影響も受けつつ、自分の好きなものを貫き読み続けている。

4.2 全員の比較

4.1 では、調査対象者のインタビューに基づく結果と考察をそれぞれ述べた。4.2.1 では、全員の価値観と形成過程を並べ、今回の調査において読書に対し人々がどのような過程を

得て読書をするようになるのか、また、何を求めて読書をしているのかを大まかに分類する。

4.3 では、先行研究で明らかになった読書の五つの次元に今回の調査対象者のパターンをあてはめ、それをふまえたうえで先行研究に対する批判を行う。

4.2.1 価値観とその形成過程

「知りたいことを知るため」と実用書やビジネス書を中心に読む Aさんは読書の中でも「知識を得ること」を大切にし、またそれを「知的興奮の快感」と呼んでいる。知識を得ることそのものも楽しんでいることから、読書の価値観は「知識の取得」「娯楽の享受」であるといえる。また、その形成過程には、両親の宗教が関連しており、望まないことも良いと言わなければいけなかったことの反面教師として、自分で調べ知識を得ることに快感を覚えるようになったと考えられる。読書はあくまでも自分に「知識」を教えてくれる手段の一つであり、読書をする事そのものに特別なこだわりはなかった。

「一生読書をしていきたい」と考え、文学を好んで読む Bさんは、読書をしない人たちに疑問を抱くほど、読書をする事が当たり前になっている。自分の読書は8割が娯楽目的というように、「楽しむこと」を大切にしているが、それ以上に「読書そのもの」に価値を持っているように思われた。この形成過程には、父親が大きく影響を与えている。大学教授の父親を筆頭に読書家族の中で育ち、読書をする父親を尊敬し、自分もそのレベルに追い付きたいと思うようになった。読書を楽しみたいという気持ちと父親の知的な部分への尊敬が重なり、彼女自身も読書に価値を持つようになったと考えられる。

映画脚本を書く Cさんは、フィクションなどを読むことを「自分の燃料」ととらえており、自分の脚本の土台にするために読書をする一面と、一般的な読者として本を楽しむ一面が見られた。ここで Cさんが大切にしているものは、知識を得ることと、読書をするという読書行為そのものであり、価値観は「知識の取得」「読書そのもの」と言える。この形成過程には、読書しか娯楽がなかった家庭環境が読書を習慣化させ、他人の考えの面白さを、読書を通して知ったことがあげられる。それをきっかけに自分も表現者を目指すようになり、現在は没頭できる趣味の一つであり、「書くもの」の制度をあげるツールの一つであることが分かった。

ファンタジーやミステリーを好み、作品の世界観を楽しむ Dさんは、自分の唯一の趣味として読書をしている。「自分の気持ちを楽しくさせてくれるもの」として読書をとらえており、価値観は「娯楽の享受」だと考えられる。この形成過程には、共通の読書趣味をもつ友人が大きくかかわっている。その友人に本を薦めてもらったことが、小学生のころから読書をしていた Dさんが読書を再開するきっかけとなり、読後に語り合うことを楽しみながら、習慣的に読書をするようになった。

歴史小説やミステリーを好んで読む Eさんは、高校時代から通学時間に読書をしており、

現在も通勤時間で読書をするのが習慣化されている。読書を「ちょっと違う世界に行けるもの」ととらえており、現実離れをして作品の世界観を楽しむ「娯楽の享受」を読書の価値観としている。この形成過程は、中学のときに国語の担任に本を薦められたことがきっかけとなり、電車の通学時間の長さが習慣化につながり、現在の読書スタイルを作ってきたと考えられた。

以上より、今回の調査対象者においては読書の価値観を形成するにあたり以下の経験が関わるのが明らかとなった。その経験は①親の教育・読書スタイル・家庭環境（両親の姿を見て自分も読書を始めた等）、②先生や友人から薦め・影響、③大人になってからの経験（読書会の参加、共通の趣味の友人と出会う等）、④各々の夢（夢のために読書をする等）の4つに分類できる。これらの経験が価値観形成に関わっており、①知識の取得、②娯楽の享受、③読書行為そのもの²⁸、④コミュニケーションという4種類の価値観を形成していた。これらの価値観とその形成過程に関わる経験は、一人で複数得ていることが多いと考えられ、幼いころから今までの経験が主軸となり価値観が形成され、各々の読書スタイルに影響を及ぼしていることが考えられた。（表2、3参照）

表2 価値観とその形成過程一覧

| | 価値観 | 価値観の形成過程 |
|---|-----------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| A | ①知識の取得 ②娯楽の享受 | 両親の宗教→抑圧されていた分なにごとも自分で知り判断したい、という思いが強くなっていく→知りたいことを教えてくれるものが偶然読書だった |
| B | ①娯楽の享受 ③読書行為そのもの ④コミュニケーション | 読書家族→読書する父親への絶対的な尊敬→自分自身も読書に価値を持つようになる |
| C | ①知識の取得 ③読書行為そのもの | 人の考えの面白さを、読書を通じて知る→自分も表現者を目指す→没頭できる趣味の一つであり、書くものの精度をあげるツールでもある |
| D | ②娯楽の享受 ④コミュニケーション | 共通の読書趣味をもつ友人に本を薦めてもらう→ 好みが似ている友人のおススメは間違いないと思い、それらを読み続ける |
| E | ②娯楽の享受 ④コミュニケーション | 中学のときに成績が悪いからと薦められた星新一→電車の待ち時間が長くて読書をするのが日常化する→自分の好きなものを今でも読み続ける |

²⁸ 「娯楽の享受」とは、「読書から楽しさを得られる」という気持ちから読書することを指す。また、「読書行為そのもの」とは、読書行為そのものとは、「読書はいいことである」という自分なりの価値を持ち読書をするを指す。

表3 価値観とこれまでの経験、形成過程の関わり合い

| | 価値観 | 価値観の形成に関わる経験 |
|---|-----------------------------------|----------------------------------------------|
| A | ①知識の取得 ②娯楽の享受 | ①両親の教育 ③読書会 ④仕事を続けていきたい→知識を取得する |
| B | ①知識の取得 ③読書行為そのもの ④コミュニケーション | ①両親の読書スタイル ③読書会 |
| C | ①知識の取得 ③読書行為そのもの | ①両親の読書スタイル ②友人・先輩の薦め ③映画の脚本を書き始める ④映画の脚本家 |
| D | ②娯楽の享受 ④コミュニケーション | ③同じ読書趣味を持つ友人との出会い |
| E | ②娯楽の享受 ④コミュニケーション | ②中学の先生に読書を薦められる |

本研究の調査対象者のインタビューから、彼らの読書行為を先行研究の読書の次元にあてはめ先行研究の批判を行う。各人の分類と次元に関しては付録を参照とする。

4.2.2 両親の影響と読書への考え

読書という行為は自分で好きに選択できる行為であり、自律的な行為であるといえる。そのため、人間が持つ他の価値観に比べ、ライフストーリーの中で語られるこれまでの経験がどれほど影響を与えているかは分からないところがあった。しかし、今回の調査対象者においては、両親の教育や家庭環境が読書と関連付けられる可能性があることが分かった。(表4参照)

Aさんは両親の宗教への反発から、知ることそのものに魅力を感じるようになり読書をするようになった。Bさんは、読書家の父親への尊敬の念が強く自分も読書は素晴らしい行為であると思うようになった。また、Cさんは母子家庭で育ち母親とは不仲だったものの、読書行為のみを真似し、自分自身も読書を生きがいとするようになった。彼は、母親との関係を映画の脚本にしており、家庭環境が彼の芸術家としての側面に大きな影響を与えていることが分かる。

A、B、Cさんは、両親の読書行為や教育方針から反面教師的であっても素直なものであっても影響を受けている。彼らは読書や知識を得ることそのものに魅力を感じており、読書が自己目的になっている傾向が見られた。

一方でD、Eさんはどちらも両親が読書をしていることに気付いたのは成人後であり、特に読書に対する考え方を両親から受け継いでいる様子は見られなかった。彼らは娯楽のために読書をしており、読書が自己目的になっていなかった。

表4 両親の影響と読書への考え

| | 両親からの影響 | 読書への考え |
|---|----------------------------------------|---------------------------------------|
| A | 親の宗教への反発 (反面教師的影響) | 知ることそのものが楽しい 「知識教」 |
| B | 読書家の父親への尊敬 | 読書は素晴らしいことである 「読書教」 |
| C | 母子家庭で母親と不仲 読書しかすることがない →読書行為を真似る | 芸術志向 (脚本家) 自分の不遇さ≒芸術 脚本には読書が影響 |
| D | 両親と読書の話をする ようになったのは成人後 | 娯楽を目的として読書をする |
| E | 自由さを尊重する教育 (勉強、読書には言及なし) | 娯楽を目的として読書をする (自由を尊重する教育を息子たちにもする) |

以上のことより、ライフストーリーの中で、読書は家庭環境に関連付けて語られることが明らかとなった。

4.2.3 調査対象者に見られた読書と社会学的視点

本調査では調査対象者の語りを、KJ法を用いることにより、客観的に分析した。その結果、A～Eさんそれぞれに読書の中で社会学と関連付けられるような意図・行動が見られた。

Aさんは、本は買う派であったが、数か月前に思い立ちほとんどの本を捨ててしまったと語った。この本を捨てる、という背景には、本が過去の自分を象徴するものであり、それに捉われたくないという考えがあるのではないかと考えられる。知識を得ることが快感であり、その手段として読書をしていたが、多くの知識を得た結果それらの考え方に捉われることを恐れ手放したのではないだろうか。ショーペンハウエルは「読書は、他人にモノを考えてもらうことである。」²⁹と述べた。自分で考えることが好き、と述べたAさんにとって「他人に考えてもらった」知識を手放すことが、誰かに捉われない宗教と離れた生き方につながっていると考えられる。

Bさんは「読書教」的な一面が見られ、読書そのものが自己目的になっていた。しかし、その一方で読書が父親とのコミュニケーションを目的として行われている側面も見ることができた。成人し、父親に本を紹介しているなど、自分が受けた恩恵（ここでは、本のすばらしさを間接的に教えてくれたこと。）を父親に本を通して返していると言える。これは

²⁹ ショウペンハウエル. 読書について: 他二篇. 改訂版, 岩波書店, 1982, 158p.

D さんにも見られる行為であり、本の持つ知識が資産として扱われていることが示唆される。本のある環境で育ち、自分の読書経験を父親から倣った B さんが、自分のお薦めの本を紹介することと、D さんが友人から本を借りた御礼に感想を必ず述べるようにすることは、どちらもプロセスは違うがモースの「贈与論」の返礼の義務に通じていると考えられる。このように、本はただの紙ではなく、そこに書かれている知識に価値がもたらされ、交換しうるものとなる。読書から生まれるコミュニケーションに焦点をあてることで、本にかかれる知識の価値を見ることができた。

C さんは豊かな時代に生まれた自分は不遇の時代を生きた作家たちに勝つことはできない、と詩を書くことをやめていた。しかし、彼は母子家庭で育ち、唯一の肉親である母親とも不仲である。また自分の家庭が裕福ではなかった背景が彼を読書に没頭させるきっかけになっていた。このように、豊かな現代の中でも不遇な境遇で育ったことが彼の芸術志向に影響を与えているのではないかと考えることができる。芸術家のランク付けを行い、「詩人>小説家>劇作家」と述べていたが、自分自身の家庭環境は現代の中でも不遇である、という考え方がこのランクの一番下である劇作家に結び付いているのではないかと考えられた。

E さんは、自分の中の善し悪しを主張する傾向が見られた。流行りものをもてはやすメディアを嫌い、それらに流される人びとも批判していたが、この背景には自分自身が流行りものを避け自分自身の欲望を支配するという「自由」が関連していると考えられる。本能や欲望、欲求に従わず、自分の理性を保ち流されないようにしていることが、自分の嫌いな作家への批判や、息子を巨人から遠ざけようとするにつながっているのではないだろうか。

以上のように、調査対象者の読書に関する語りの中から社会学的な思想を見ることができる。読書をただ「本を読む行為」と定義づけをせず、各々の過去から現在までをさかのぼり話を聞くことで、読書行為が持つ価値、本が持つ価値が、各々の生き方・生活に影響を与えていることが明らかとなった。

4.3 先行研究への批判

先行研究では、「作用」「志向」は独立した次元となっており、次元間に階層構造がない、と述べられていた。「作用」は「読書した結果から何を得るのか」というように、時間軸においては読書後に得られる感覚であり、「何のために読むのか」という読書前に先行する「志向」とは分けて考えることができる。しかし、今回の調査においては E さんのように、「なぜ読書をするのか」という問いに対し、「現実とは違う世界に行きたい」と「作用」の要素に当てはまる回答をする人がいた。このことから、読書をする人のなかには、結果的に求められる「作用」がどのようなものかを、自身の読書経験から理解しその「作用」を「目的」として読書をしている人がいることが明らかとなった。よって、「志向」のサブ次元で

ある「目的」の中に、「作用」が入りうる可能性がある。

また、1.3では、本研究における「価値観」とは「志向」のサブ次元である「背景」に含まれうると論じたが、この「価値観」がその他の次元に影響を与えていた。

例えば、Aさんは読書の価値観を「知識の取得」、「娯楽の享受」としている。それが読書の「背景」となり、情報収集を「目的」（「志向」のサブ次元）とし、ネットの情報なども「対象」に含んでいる。また、自分の知りたいことの情報を得ることで価値観を吸収するという「作用」を生んでいる。このことから彼女は、「志向」のサブ次元である「背景」が「目的」「対象」「作用」に影響を及ぼしていると言える。

Bさんの読書の価値観は、「娯楽の享受」と、「読書そのもの」である。それが、一生読書をしていきたいという「好奇心」（「目的」の要素）につながり、効率的な本の情報の取得や、本棚への保存方法を工夫するなどの「行動」や、苦手な本は集中して読みたいからカフェを利用する、などの「場所」に関わっている。

Cさんは、読書の価値観を、「知識の取得」「娯楽の享受」「読書行為そのもの」としている。読書を「違う世界に行けるもの」と考え「作用」を求めて読書をしている場面、脚本のために読書するという、「情報収集」（「目的」の要素）のために読書をしている場面がそれぞれ見られ、「作用」と「目的」が同軸にあることが分かる。外での読書の方が没頭感を得られるという理由からカフェでの読書（「場所」）を選択していた。また、創作者として読書する場合においては、創作するために他人と作品について話合う、議論する（「行動」）場面が見られる。

このことから、「志向」の中でも「価値観」を含む「背景」が独立し、それが他の四つの次元に影響を与えていることが明らかとなった。上記のように、「行動」「対象」「場所」がそれぞれ相互作用しあう様子もみられた。また、人によっては読んだ結果から得られる「作用」を「目的」とし、読書をする人がいる。以上のように、「読書とはどのような行為か」という読書そのものだけでなく、ライフストーリーをふまえた読書傾向を聞いていくことで、五つの次元の関わり合いを見ることができた。

第5章 結論

5.1 結論

本研究では、読書の優先度が高い人たちの読書の価値観とその形成過程を明らかにすることを目的とし、ライフストーリーの中で読書がどのように語られているのかを見た。その結果、①両親の教育・読書スタイル・家庭環境、②先生や友人から薦め・影響、③大人になってからの経験、④各々の夢・目標の4項目が、価値観形成に関わっていた。ここから形成される価値観としては、①知識の取得、②娯楽の享受、③読書行為そのもの、④コミュニケーションにまとめられた。また、ライフストーリーの中で読書は家庭環境に関連付けて語られていた。これらの価値観は、先行研究の「志向」のサブ次元である“背景”とほぼ同じ意味であり、「場所」等他の四つの次元に影響を与えていた。

先行研究においては、五つの次元の関係について言及されていなかったが、ライフストーリーを含めて次元間の関連を見た結果、「志向」が突出し、他の四つの次元に影響を与えていることが明らかとなった。さらに、この「志向」のサブ次元である「目的」にはライフストーリーに基づく各々の価値観³⁰（「志向」のサブ次元「背景」に関わるもの）が影響を与えている。また、今回の調査対象者においては、読書をすることによって得られる「作用」を読むことの「目的」としている人もおり、「目的」と「作用」は切り離せない関係であった。このことから、読書行為の定着には「志向」が重視され、その中でもライフストーリーやそれに基づく価値観（「背景」）が読書の「目的」や「作用」に大きく影響を与えていることが分かる（図2参照）。また、「対象」「行動」「場所」がお互いに影響を及ぼしあうこともあり、必ずしも一直線で読書行為が選択されるわけではないことが明らかとなった。

今回の調査では、お金のかからない家ではなくわざわざカフェで読書をする人びとに焦点をあてた。卒業研究では、場所の雰囲気重視で読書の場を選択する人びとがいることを明らかにしたが、今回の調査では、カフェの雰囲気を楽しむ人もいるものの、読書そのものが定着する背景にはライフストーリーが大きく関わっていることが分かった。このように、「志向」に基づき人びとは読書をする「対象」や読書をする「場所」を選択しているが、「対象」や「場所」の選択肢の増加が「志向」に影響するということは必ずしも正しいと言えない。「対象」や「場所」の質的・量的な増加は、読書に興味がない人びとに対して興味を持たせるきっかけにはなるが、読書そのものの定着にはつながらないだろう。

以上より、目新しい「場所」（ブックカフェや複合型書店）や「対象」（読書媒体の多様化）の提供は、根本的な読書離れの解消にはつながらない可能性が示唆された。

また、今回の調査は最初の対象者からスノーボーリングサンプリングで被験者を募った

³⁰ ここでの価値観とは、読書の中で何を大切にしているか、ということ指し、ウェーバーの行為の四類型である「価値合理的行為」の「価値」とは違うものである。行為の四類型は、実際に読書行為を行う志向の「目的」「作用」に関わってくるものであり、「目的」「作用」の要素は四類型にあてはめうる。

が、会社は違うものの全員 IT 企業で働く（もしくは働いていた）人びとであった。B さんは、「会社にほとんど読書をする人がいない」と嘆き、読書会にいる人びとで IT に勤めている人は自分だけだったというように、パソコンに向かう人が多い IT 企業に勤める人びとは一見他の職業に比べて読書から遠い存在のように感じる。

しかし、B、C さんのような「読書教」的な一面が見られる人びとや、D、E さんのように読書をする機会をつくっている人びと、また A さんのように朝読書をしている人など、全員が読書に対する「こだわり」を見ることができた。仕事をしており、読書時間の確保が難しいなか、読書をする時間をつくっており、さらにカフェで読書をしている彼らはまったく読書をしない人びとと比べれば読書に対する意識が高いと言える。B さんは、読書をしない人びとが多い会社に違和感を持っていたが、このような違和感が本人の読書の意識をより高めている可能性が考えられる。IT 企業に勤めている（または勤めていた）人のみのサンプリングの中で全員が読書に夢中になっている背景には、読書をしない人びとばかりという環境が、彼らの読書欲をより高める一つの要因になることが考えられた。

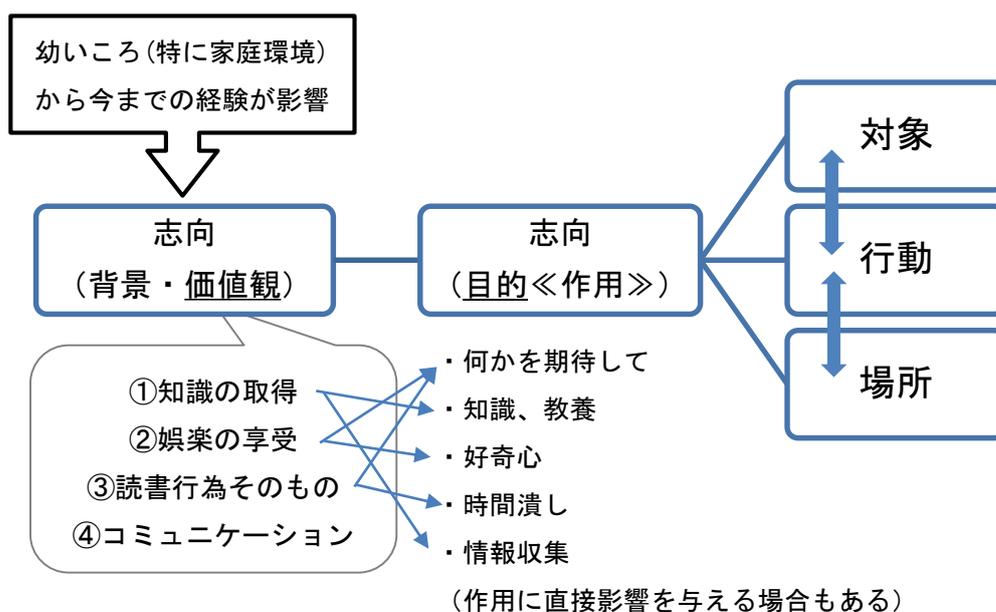


図 20 本研究における五つの次元の関わり合い

5.2 今後の課題

本研究では読書の優先度が高い人のみに焦点をあてたが、あまり読書をしない人たちに今回の調査結果と逆のことが言えるのかを調査する必要がある。また、読書が好きという度合いや、電子媒体の使い分けに各々のこれまでの経験が影響するのか否かも同時に検証したい。

さらに、本研究では、読書という行為がコミュニケーションのために行われているなど、

「本を読む」ことで知識以外のものを得ているパターンが見られた。今後は読書をする過程で生まれる付加価値にも焦点をあて、読書という行為をより広い視点でとらえていきたい。

参考文献一覧

- ・川喜田二郎. 発想法. 中央公論社, 1967, 202p.
- ・川喜多二郎ほか. 問題解決学:KJ法ワークブック. 講談社, 1970, 203p.
- ・北沢毅・古賀正義編著. <社会>を読み解く技法:質的調査への招待. 福村出版, 1997, 212p.
- ・桜井厚. ライフストーリー論. 弘文堂, 2012, 171p., (現代社会学ライブラリー, 7).
- ・佐藤郁哉. 質的データ分析法:原理・方法・実践. 新曜社, 2008, 211p.
- ・佐藤郁哉. フィールドワークの技法:問いを育てる、仮説をきたえる. 新曜社, 2002, 346p.
- ・ショウペンハウエル. 読書について:他二篇. 改訂版, 岩波書店, 1982, 158p.
- ・ジョン・E・ブッシュマン. グロリア・J・レッキー編. 場としての図書館:歴史、コミュニティ、文化. 川崎良孝ほか訳. 日本図書館協会, 2008, 405p.
- ・Starbucks Coffee Company. “Book&Cafe”. スターバックスコーヒージャパン: Starbucks Coffee Company. <http://www.starbucks.co.jp/store/concept/bc/>, (参照 2013-11-29).
- ・西條剛央. ライブ講義・質的研究とは何か:研究の着想からデータ収集、分析、モデル構築まで. 株式会社新曜社, 2007, 239p.
- ・根本彰. “CA1580・動向レビュー:「場所としての図書館」をめぐる議論 / 根本彰”. Current Awareness Portal: 図書館に関する情報ポータル. 2005-12-20. <http://current.ndl.go.jp/ca1580>, (参照 2013-11-28).
- ・藤野幸雄ほか. 図書館情報学入門. 有斐閣アルマ, 1997, 230p.
- ・マックス・ウェーバー. 社会学の基礎概念. 恒星社厚生閣, 1989, 113p.
- ・マックス・ウェーバー. 社会学の根本概念. 岩波文庫, 1972, 108p.
- ・マルセル・モース. 贈与論. 勁草書房, 1962, 326p.
- ・Lifebook. “電子書籍と図書館!?国内図書館の最新導入事例まとめ”. 株式会社 Lifebook. 2012-2-12. <http://life-book.co.jp/delivery/?p=580>, (参照 2013-8-17).

謝辞

本論文の作成にあたり、始終適切な助言を賜り、また丁寧な指導して下さった後藤嘉宏先生、照山絢子先生に感謝いたします。また、後藤研究室の同期の皆様、大学院生の方々には常に刺激的な議論を頂き、大変参考にさせていただきました。ありがとうございます。

そして、最後となりましたが、本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いた、調査対象者の皆様に心から感謝します。本当にありがとうございました。

付録

先行研究にもとづくインタビュー対象者の読書の次元へのあてはめ

Aさん

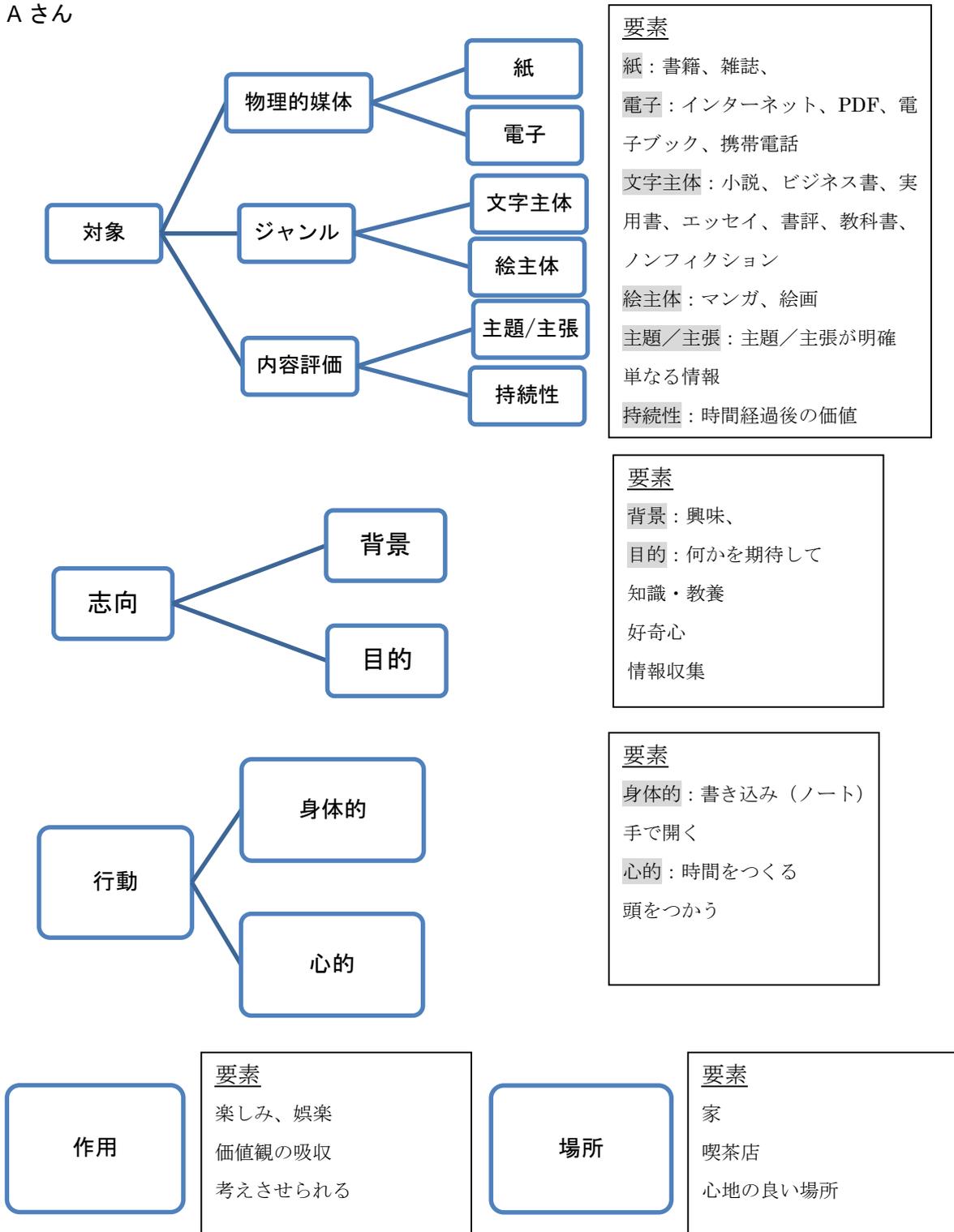


図1 Aさんの読書の次元とその要素

Bさん

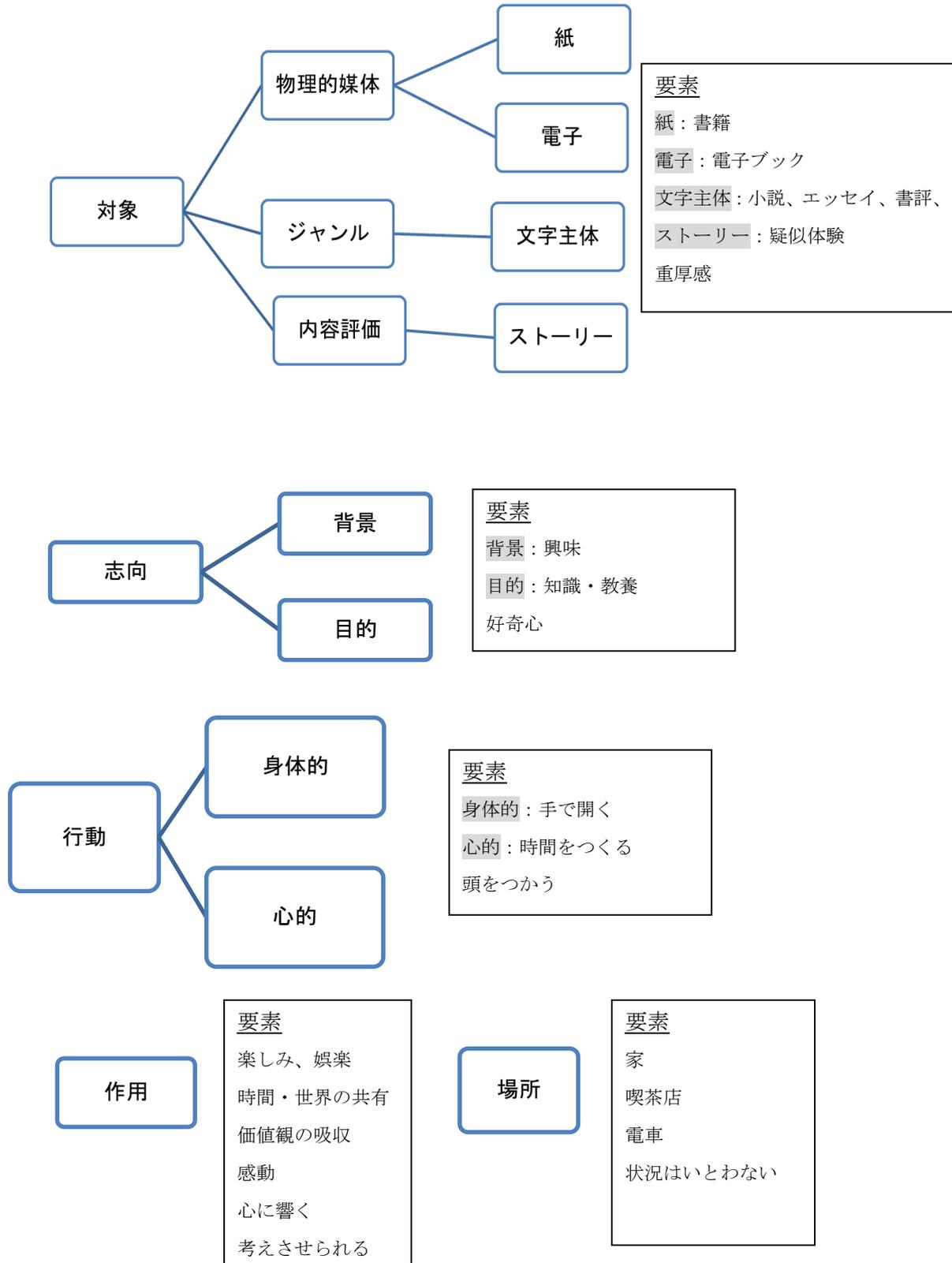
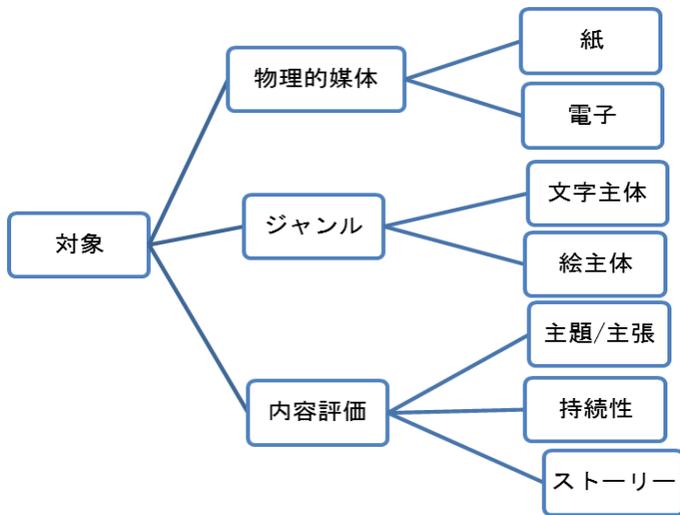


図2 Bさんの読書の次元とその要素

Cさん



要素

紙：書籍

電子：インターネット、電子ブック、携帯電話

文字主体：小説、エッセイ、ノンフィクション

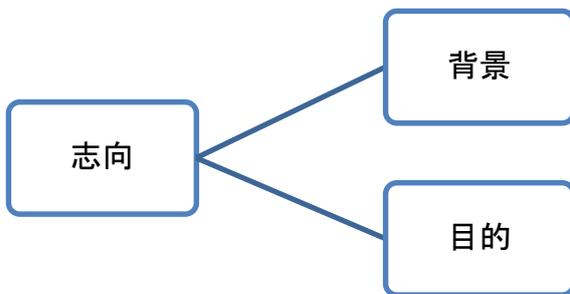
絵主体：マンガ

ストーリー：重厚感、一貫性、作り込み/完成度、疑似体験

主題/主張：主題/主張が明確

単なる情報

持続性：時間経過後の価値



要素

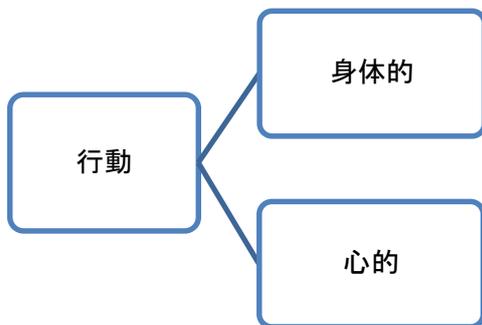
背景：興味、

目的：何かを期待して

知識・教養

好奇心

情報収集



要素

身体的：手で開く

心的：時間をつくる

頭をつかう

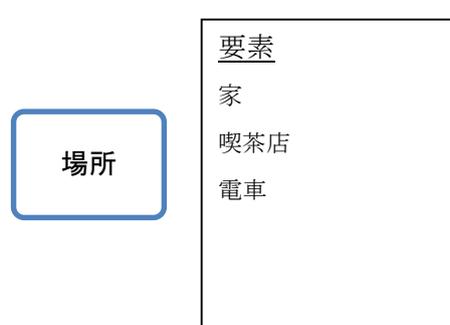
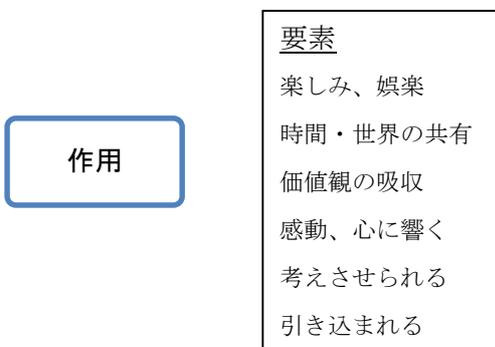


図3 Cさんの読書の次元とその要素

Dさん

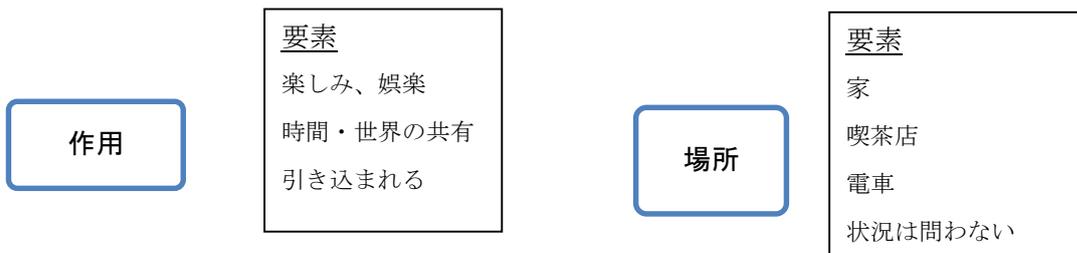
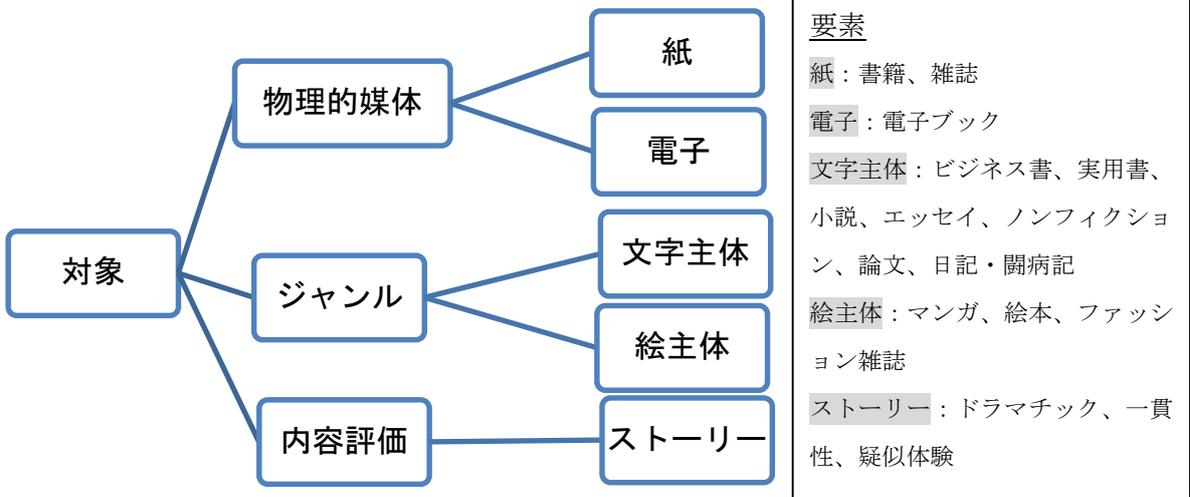


図4 Dさんの読書の次元とその要素

Eさん

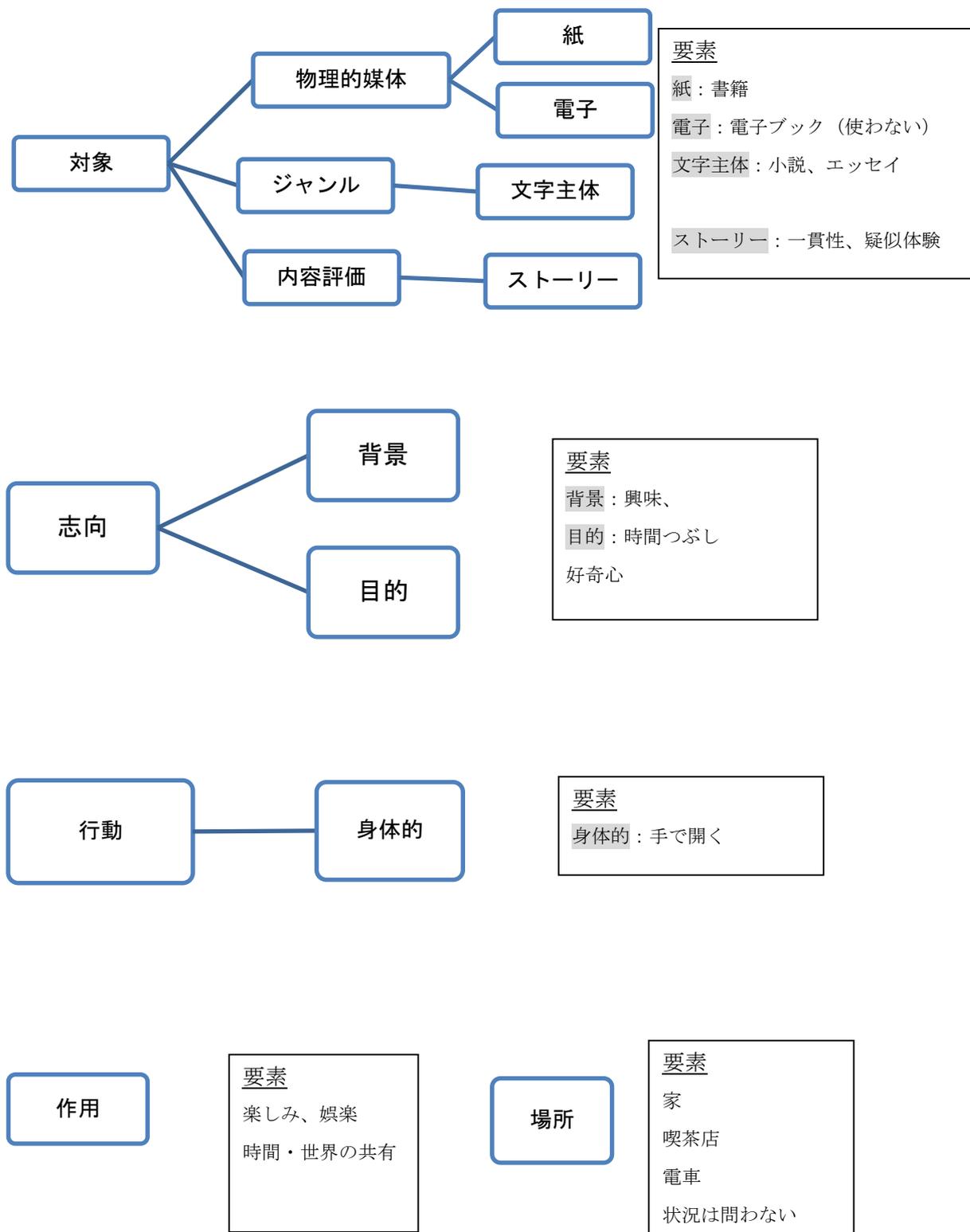


図5 Eさんの読書の次元とその要素